

高知県高岡郡窪川町

根々崎五反地遺跡
カマガ淵遺跡
川口遺跡
神ノ西遺跡
江ノ川遺跡
天ノ川遺跡
西原遺跡

—中山間地域総合整備事業等に伴う発掘調査報告書—

2004.3

高知県窪川町教育委員会

高知県高岡郡窪川町

根々崎五反地遺跡 カマガ淵遺跡 川口遺跡 神ノ西遺跡 汎ノ川遺跡 天ノ川遺跡 西原遺跡

—中山間地域総合整備事業等に伴う発掘調査報告書—

2004.3

高知県窪川町教育委員会



根々崎五反地遺跡出土押型文土器



根々崎五反地遺跡出土縄文時代後期の土器



根々崎五反地遺跡SK1 出土弥生土器



カマガ淵遺跡IV区SK10 出土弥生土器

序 文

窪川町は高知県の西南部に位置し、水量豊かな四万十川と気象条件に恵まれ良質米の産地として農業を基幹に発展してきました。しかしながら、近年の社会・経済情勢の変化に伴い、農産物の自由化が進むなど農業を取り巻く環境は年々厳しさを増しており、本町では生産性の向上と担い手農家等の育成を基本には場整備を重要事項として取り組み継続的に実施しております。

教育委員会では埋蔵文化財の保護と開発事業との調整を図るために発掘調査を実施しており、なかでも平成13年度に実施した根々崎地区の調査では、多数の土坑・溝跡・柱穴などの遺構の検出や、縄文・弥生時代の土器を中心とする遺物が出土するとともに、町内で初めて竪穴住居跡が検出されるなど本町過去最大規模の発見となり、窪川町の歴史を知る貴重な資料を得ることができました。

この度、根々崎地区での調査内容を主に他の地区での調査成果も含め窪川町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集として発行することになりました。この報告書が今後の県西南部の歴史研究や文化財保護思想の普及の一助となれば幸です。

最後になりましたが、発掘調査に際しては、高知県須崎耕地事務所、窪川町土地改良区、高知県教育委員会文化財課、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター及び地元関係者の方々をはじめ、調査から報告書作成に至るまでにご協力・ご指導いただきました方々に対し、厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

窪川町教育委員会

教育長 中平 克喜

例　　言

- 1 本書は高知県高岡郡窪川町教育委員会が国庫補助を受け、平成13年5月14日～同年11月19日に実施し、平成13～15年度に整理作業を行った「根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡」の試掘確認調査に関する報告書である。調査面積は、1,208m²である。昭和63～平成15年度に国庫補助を受けて実施したその他の試掘確認調査の概要についても報告する。
- 2 発掘調査は窪川町教育委員会吉岡範満が担当し、高知県教育委員会文化財課松田知彦・坂本裕一・畠中宏一が補佐した。
- 3 本書の編集は窪川町教育委員会が行い、編集実務及び執筆は「調査に至る経緯」を吉岡範満が担当し、その他の部分を畠中宏一が担当した。
- 4 発掘作業及び整理作業・遺物写真撮影では下記の方々の協力を得た。記して感謝します。

発　掘　調　査　足達文子・市川繁歎・小原光子・小原ユリ・小原百合子・熊谷安郎・小松央子・小松好子・篠岡利子・篠岡政子・篠岡君子・篠岡里恵・式地隆三・宗崎重孝・田辺猛・谷末廣・永野萌・野中昌子・野村光義・藤田稻実・宮本勇右・宮本節夫・百田進一・安岡恵子・山本博文・窪川町役場有志・教育委員会有志
- 整　理　作　業　井澤久未・大谷亜紀子・尾崎富貴・小原光子・小原ユリ・門田美知子・黒岩佳子・小林貴美・篠岡里恵・佐藤雅子・沢本貴支・高橋加奈・高橋由香・竹村延子・土居初子・西内広美・西村謙二・松山真澄・百田進一・矢野富士子・山中美代子・山本裕美子・吉本由佳
- 遺物写真撮影　坂本憲彦・西村謙二
- 5 発掘調査及び執筆では下記の方々から御指導・御助言・御協力を得た。記して感謝します。

池澤俊幸・犬飼徹夫・岡本桂典・小野由香・遠部慎・木村剛朗・久家隆芳・鈴木正博・坂本憲昭・田辺猛・出原恵三・筒井三菜・浜田恵子・廣田佳久・藤方正治・前田光雄・松村信博・松本亜紀彦・森田尚宏・山崎真治・山本純代・山本哲也・吉成承三
- 6 遺跡の略号は「根々崎五反地遺跡(01-KNG)」「カマガ淵遺跡(01-KM)」「注ノ川遺跡(02-KNK)」「天ノ川遺跡(02-KSK)」「西原遺跡(03-KSB)」として出土遺物の註記等にはこれを使用した。
- 7 遺構等の略称は「堅穴住居跡(ST)」「掘立柱建物跡(SB)」「土坑(SK)」「溝跡(SD)」「ピット・柱穴(P)」「祭祀遺構(SF)」「集石(SS)」「性格不明遺構(SX)」とし、試掘坑については過去の資料でGまたはTRと表記しているものもTPと表記した。

本文目次

第Ⅰ章 離川町における埋蔵文化財保護行政と調査経緯

第1節 調査に至る経緯と経過	1
1. 離川町における埋蔵文化財保護行政と発掘調査	1
(1) 入ル谷山遺跡	4
(2) 作屋遺跡	5
(3) 七里上小野川地区・七里下小野川地区・七里下小野川西地区	6
(4) 沖代地区	8
(5) 六反地遺跡	11
(6) 汗ノ川遺跡	13
(7) 浜の川地区・小向地区	18
(8) 東又弘見北地区	20
(9) 平串遺跡・富岡地区	22
(10) 宮内遺跡	25
(11) 神ノ西遺跡	26
(12) 西原遺跡	29
(13) 中神ノ川地区	37
(14) 口神ノ川一町切地区	39
(15) 口神ノ川スガサキ地区	41
(16) 峰の上遺跡・峰ノ上下屋敷地区	45
(17) 若井川神田地区・若井川カキヤマ地区・若井川西ノ前地区	49
(18) 高野大工地区	52
(19) 天ノ川遺跡	54
(20) 川口遺跡	56
(21) 越ノ下遺跡・秋丸地区	61
(22) 家地川城跡	63
2. 調査に至る経緯	65
3. 調査の経過	65
第2節 遺跡の地理的・歴史的環境	67
1. 遺跡の地理的環境	67
2. 遺跡の歴史的環境	69

第Ⅱ章 調査の方法と成果

第1節 調査区北部の試掘調査	75
1. 調査の方法	75
2. 調査の成果	75
第2節 調査区南部の試掘調査	78
1. 調査の方法	78
2. 調査の成果	78
第3節 I区の確認調査	80
1. 調査の方法	80
2. 調査の成果	80
第4節 II区の確認調査	93
1. 調査の方法	93
2. 調査の成果	93
第5節 III区の確認調査	107
1. 調査の方法	107
2. 調査の成果	107
第6節 IV区の確認調査	111
1. 調査の方法	111
2. 調査の成果	111
第7節 V区の確認調査	126
1. 調査の方法	126
2. 調査の成果	126

第Ⅲ章 まとめ

第1節 繩文時代早～前期の土器について	133
第2節 繩文時代後期の土器について	134
第3節 弥生時代～古墳時代の土器について	136
第4節 弥生時代～古墳時代の遺構について	137

挿図目次

第1図	宝川町発掘調査地点位置図	2
第2図	入ル谷山遺跡位置図・調査区平面図	4
第3図	作屋遺跡位置図・調査区平面図・遺物実測図	5
第4図	七里上小野川地区・七里下小野川地区・七里下小野川西地区位置図	6
第5図	七里上小野川地区・七里下小野川地区・七里下小野川西地区調査区平面図	7
第6図	沖代地区土層柱状図	8
第7図	沖代地区位置図・調査区平面図	9
第8図	沖代地区遺構平面図	10
第9図	六反地遺跡位置図・調査区平面図	12
第10図	辻ノ川遺跡位置図・調査区平面図	14
第11図	辻ノ川遺跡TP4抜張区平面図・遺構平面図・遺物実測図	16
第12図	浜の川地区・小向地区土層柱状図	18
第13図	浜の川地区・小向地区位置図・調査区平面図	19
第14図	東又弘見北地区位置図・調査区平面図	21
第15図	平串遺跡・富岡地区位置図・調査区平面図	23
第16図	平串遺跡・富岡地区土層柱状図・出土遺物実測図	24
第17図	宮内遺跡位置図・調査区平面図	25
第18図	神ノ西遺跡出土遺物実測図(1)	26
第19図	神ノ西遺跡位置図・調査区平面図	27
第20図	神ノ西遺跡出土遺物実測図(2)	28
第21図	西原遺跡位置図・土層柱状図	29
第22図	西原遺跡調査区平面図(1)	30
第23図	西原遺跡調査区平面図(2)	31
第24図	西原遺跡TP14抜張区調査区平面図・セクション図	33
第25図	西原遺跡TP14抜張区SF1平面図・遺物実測図	35
第26図	西原遺跡TP14抜張区SF2平面図・遺物実測図・TP15抜張区平面図・遺物実測図	36
第27図	中神ノ川地区土層柱状図	37
第28図	中神ノ川地区位置図・調査区平面図	38
第29図	口神ノ川一町切地区セクション図	39
第30図	口神ノ川一町切地区位置図・調査区平面図・遺構平面図	40
第31図	口神ノ川町スガサキ地区位置図・調査区平面図	42
第32図	口神ノ川町スガサキ地区TP8(第一次)平面図・セクション図・TP1(第二次)セクション図	43
第33図	口神ノ川町スガサキ地区TP1(第二次)平面図	44
第34図	峰の上遺跡・峰ノ上下屋敷地区位置図・調査区平面図	46
第35図	峰ノ上下屋敷地区遺構平面図(1)	47
第36図	峰ノ上下屋敷地区遺構平面図(2)・柱状図	48
第37図	若井川神田地区・若井川カキヤマ地区・若井川西ノ前地区位置図・若井川神田地区調査区平面図	50
第38図	若井川カキヤマ地区・若井川西ノ前地区調査区平面図	51
第39図	高野大工地区柱状図	52
第40図	高野大工地区位置図・調査区平面図	53
第41図	天ノ川遺跡位置図・柱状図・出土遺物実測図	54
第42図	天ノ川遺跡調査区平面図	55
第43図	川口遺跡位置図	56
第44図	川口遺跡調査区平面図	57
第45図	川口遺跡出土遺物実測図(1)	58
第46図	川口遺跡出土遺物実測図(2)・柱状図	59
第47図	越ノ下遺跡・秋丸地区位置図	61
第48図	越ノ下遺跡・秋丸地区調査区平面図	62
第49図	家地川城跡位置図・調査区平面図	64
第50図	根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡調査区平面図	66
第51図	宝川町地形図	68
第52図	野地遺跡出土遺物実測図	69
第53図	宝川町遺跡地図	70
第54図	北部試掘調査土層柱状図・出土遺物実測図	75
第55図	北部試掘調査調査区平面図	76

第56図	南部試掘調査調査区平面図	79	測図	117	
第57図	I 区平面図	80	第87図	IV 区SK11・SK12・SK17平面図・出土遺物実測図	118
第58図	I N区平面図・TP49セクション図	81	第88図	IV 区SK18・SK19平面図・出土遺物実測図	120
第59図	I N区TP49SK1平面図・出土遺物実測図	82	第89図	IV 区SK20・SK21・SK22・SK23・SK24平面図・出土遺物実測図	121
第60図	I N区TP49包含層出土遺物(1)	84	第90図	IV 区SK25・SK26・SK28・SK29・SK30平面図・出土遺物実測図	123
第61図	I N区TP49包含層出土遺物(2)	85	第91図	IV 区SS1平面図・出土遺物実測図・包含層出土遺物実測図	124
第62図	I N区TP49包含層出土遺物(3)	86	第92図	V 区平面図・SD1・SD2セクション図・出土遺物実測図・SB1平面図	127
第63図	I N区TP49包含層出土遺物(4)	87	第93図	V 区SK8・SK21・SK31平面図・出土遺物実測図	129
第64図	I N区TP49包含層出土遺物(5)	88			
第65図	I N区TP49包含層出土遺物(6)	89			
第66図	I N区TP49包含層出土遺物(7)	90			
第67図	I W区平面図・出土遺物実測図	91			
第68図	II 区平面図	94			
第69図	II 区SK1平面図・出土遺物実測図	95			
第70図	II 区SK2平面図・出土遺物実測図	96			
第71図	II 区SK3・SK4平面図・出土遺物実測図	97			
第72図	II 区SK5平面図・出土遺物実測図	98			
第73図	II 区SK6平面図・出土遺物実測図(1)	99			
第74図	II 区SK6出土遺物実測図(2)・SK7・SK8・SK9平面図	100	表1	窪川町発掘調査一覧	3
第75図	II 区SK10平面図・出土遺物実測図(1)	101	表2	窪川町遺跡・出土地点・青銅器所蔵場所一覧	71
第76図	II 区SK10出土遺物実測図(2)	102			
第77図	II 区SK10出土遺物実測図(3)・SK11平面図	103			
第78図	II 区SX1平面図・セクション図	105			
第79図	II 区SX1出土遺物実測図	106			
第80図	III 区平面図・ST平面図・出土遺物実測図(1)	108			
第81図	III 区ST出土遺物実測図(2)	109			
第82図	IV 区平面図	112			
第83図	IV 区SB1・SB2平面図・SD1出土遺物実測図	113			
第84図	IV 区SK1平面図・出土遺物実測図(1)	114			
第85図	IV 区SK1出土遺物実測図(2)・SK4・SK5・SK7平面図・出土遺物実測図	115			
第86図	IV 区SK8・SK10平面図・出土遺物実				

表目次

第Ⅰ章 窪川町における埋蔵文化財保護行政と調査経緯

第1節 調査に至る経緯と経過

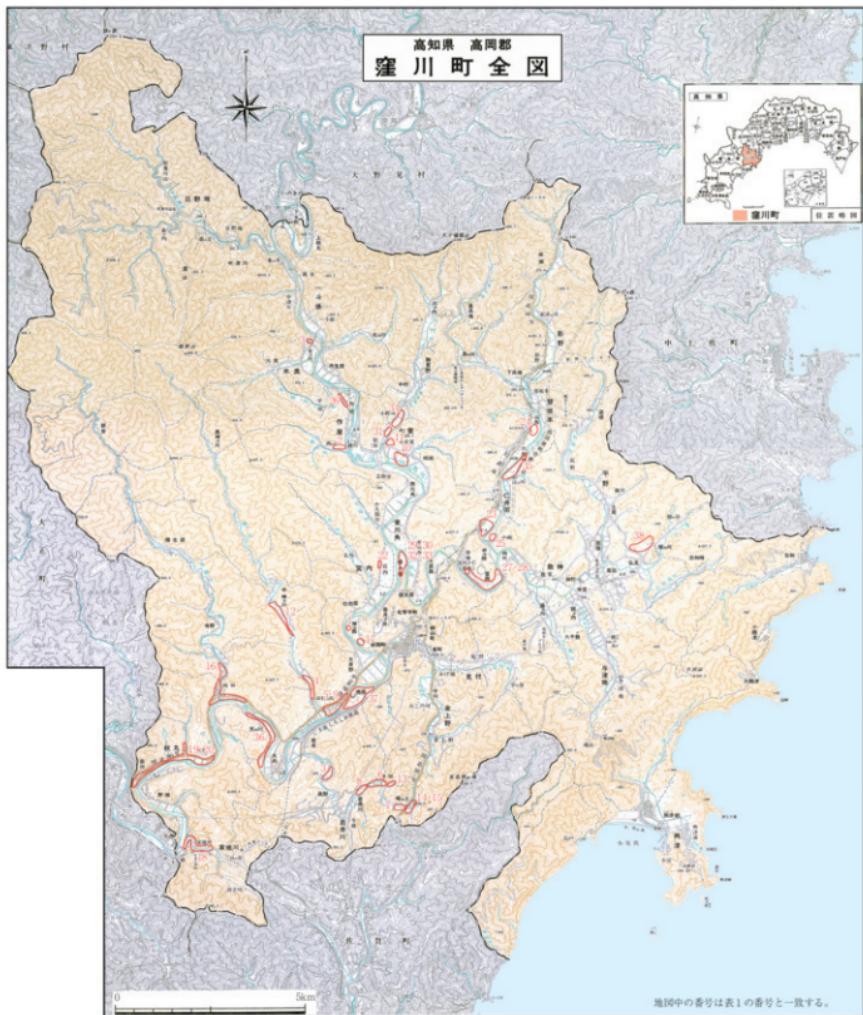
1. 窪川町における埋蔵文化財保護行政と発掘調査

窪川町は古くから青銅器を始めとする埋蔵文化財が多く出土しており、学史に残る発掘調査も行なわれた。窪川町内の遺跡で最も早く出土した記録が残るのは根々崎遺跡の銅矛であり、1657(明暦3)年に出土した記録が残る。1935(昭和10)年には西の川口遺跡で、1943(昭和18)年にはホコノコシ遺跡で銅矛が出土した。また、戦前の頃であるが宮内遺跡でも弥生土器等が表採された。

このような、青銅器を始めとする貴重な遺物が比較的多く出土していることが背景にあったためか、第二次世界大戦後も出土例が次々と報告されることとなる。1950(昭和25)年には、神ノ西遺跡で弥生土器が発見され、同年窪川高校により町内初の発掘調査が実施されている。1951(昭和26)年頃には根元原遺跡(ハツ頭遺跡とも呼んだ)で両頭石斧、ホッキョー田遺跡(現在の仕出原遺跡)で注口土器、志和遺跡で大型蛤刃石斧が出土し、1957(昭和32)年には再び西の川口遺跡で弥生土器等が、1958(昭和33)年には森ノ下遺跡(現在は根元原遺跡の一部である)で土師器が出土したことが報告された。1960(昭和35)年～1962(昭和37)年に全国的に実施された埋蔵文化財包蔵地の分布調査によって作成された『全国遺跡地図(高知県)』(文化財保護委員会1966)には、前述した遺跡に、柳山地区の小型蛤刃石斧出土地点(当時は駅前通遺跡と呼ばれた。)を加えた11遺跡が登載された。

1983(昭和58)年度には高知県教育委員会が県内各市町村教育委員会の協力によって、中世城館跡分布調査を実施した。前述した『全国遺跡地図 高知県』(文化庁1976)に登載されている城館数が118箇所に止まり、様々な文献や書籍に掲載されている350余りの件数に比べて非常に少なかったからである。この調査によって発刊された『高知県中世城館跡分布調査報告書』(高知県教育委員会1984)によると、窪川町内で確認された城館跡は、米の川城跡・西の川城跡・川の内城跡・影山城跡・本在家城跡・志和分城跡・青木番城跡・東川角城跡・白皇城跡・山の上城跡・茶臼山城跡・奈路城跡(新在家城跡)・中越城跡・天一城跡・古溪山城跡・窪川城跡・鶴ノ巣城跡・西原城跡・志和城跡・的尾城跡・興津浦城跡・市生原城跡・勝負野城跡・柳瀬城跡・小松城跡・本堂城跡・宮内城跡・金上野城跡・口神ノ川城跡・峯の上城跡・若井城跡・川口城跡・野地城跡・家地川城跡を加えた34箇所であった。

1966(昭和41)年には浜の川遺跡で石鎚が、1968(昭和43)年には再び神ノ西遺跡で打製石斧が表採されている。1970(昭和45)年には西の川口遺跡で以前銅矛が出土した埋納遺構を確認する発掘調査が実施されている。1973(昭和48)年度には高知県教育委員会によって分布調査が実施され、『全国遺跡地図 高知県』(文化庁1976)が刊行されているが、この時は前回掲載されていた遺跡に、浜の川遺跡や古代の須恵器が出土した吹ヶ谷遺跡を加えて登載している。なお、神ノ西遺跡については、遺物が出土した4地点を別個に掲載している。



第1図 窪川町発掘調査地点位置図

昭和50年代まで、鹿川町で実施された発掘調査は前述した2件のみで、いずれも学術調査であった。1986(昭和61)年になると高知県遺跡詳細分布調査調査が始まり、鹿川町でも鹿川町教育委員会及び高知県教育委員会によって1992(平成4)～1993(平成5)年に分布調査が実施された。1992(平成4)年度前半では資料に基づき踏査地域を選定する第1次調査が実施された。1992(平成4)年度後半～1993(平成5)年度までは現地踏査による第2次調査が実施された。從来から周知されていた遺跡に加えて、新たに踏査等によって確認された遺跡が把握され、埋蔵文化財保護行政が推進されることとなる。これ以降開発に伴う緊急調査も実施されるようになった。1988(昭和63)年以降、主には場整備関係の事業に伴う調査が実施されているが、報告書が刊行されているのは1992(平成4)年度に財團法人高知県文化財団埋蔵文化財センターによって実施された峰の上遺跡の本発掘調査についてのみである。今回の報告書は2001(平成13)年度に実施された根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡の試掘確認調査についてのものであるが、両遺跡の歴史的背景を理解する上で不可欠な、刊行物に掲載されていない調査成果についても簡単に報告したい。

表1 鹿川町発掘調査一覧

番号	遺跡・地区名	調査期間	調査主体	関 係 文 献	頁
1	神ノ西遺跡	S25	鹿川高校	土佐神西遺跡調査概報「古代文化第20号」	26
2	西の川口遺跡	S45	日本考古学協会	鏡子の埋納遺跡「歴史と地理第243号」	73
3	高野大工地区	S63.9.5～S63.9.17	鹿川町教委	鹿川町南部地区営営施設整備事業に伴う高野大工・口神	52
4	口神ノ川一町切地区	S63.9.19～S63.10.20		の川一町切道路発掘調査実績報告書	39
5	口神ノ川スガサキ地区	H 1.1.17～H 1.1.24	鹿川町教委	鹿川町南部地区営営施設整備事業に伴う口神ノ川スガサキ遺跡試掘調査実績報告書	41
6	若井川カキヤマ地区	H 1.8.21～H 1.8.23	鹿川町教委	鹿川町南部地区営営施設整備事業に伴う若井川カキヤマ・峰	49
7	峰ノ上下屋敷地区	H 1.9.5～H 1.10.6		ノ上下屋敷跡地試掘調査実績報告書	45
8	若井川西ノ前地区	H 2.11.21～H 2.12.1	鹿川町教委	鹿川町若井川西ノ前・口神ノ川スガサキ遺跡調査実績報告書	49
9	口神ノ川スガサキ地区	H 2.12.1～H 2.12.21			41
10	神代地区				8
11	七星下小野川西地区	H 3.7.15～H 3.8.9	鹿川町教委	鹿川町北部営営施設に係る試掘調査概要	6
12	中神ノ川地区				37
13	若井川神田地区	H 3.11.13～H 3.12.5	鹿川町教委	平成3年度鹿川町南部遺跡群試掘調査概要報告書	49
14	神の上遺跡				45
15	峰の上遺跡	H 4.4.22～H 4.8.29	高知県理文センター	峰ノ上遺跡	45
16	川口遺跡	H 5.10.4～H 5.10.29	鹿川町教委	鹿川町川口遺跡群埋蔵文化財発掘調査概要	56
17	神ノ西遺跡	H 6.10.6～H 6.11.11	鹿川町教委	鹿川町西部遺跡群(神の西・家地川)道路発掘調査概要報告書	26
18	家地川城跡	H 6.12.5～H 6.12.12			63
19	楓ノ下遺跡				61
20	秋丸地区	H 7.10.2～H 7.11.9	鹿川町教委	鹿川町西部遺跡群越の下遺跡発掘調査概要報告書	61
21	入谷山遺跡	H 8.12.13～H 8.12.27	高知県理文センター	鹿川町米菴試掘調査概要報告書	4
22	宮内遺跡	H 10.7.7	高知県教委	県道拡幅工事に伴う試掘調査概要報告書	25
23	浪の地区	H 10.10.26～H 10.11.11			18
24	六反遺跡	H 10.11.12～H 10.11.20	鹿川町教委	鹿川町浜の川・六反遺跡・小向地区発掘調査概要報告書	11
25	小向地区	H 10.11.21～H 10.12.8			18
26	作原遺跡	H 10.12.14～H 10.12.17	高知県教委	鹿川町作原遺跡発掘調査概要報告書	5
27	平串遺跡	H 12.11.21～H 12.12.19	鹿川町教委	平成12年度平串遺跡・平串・富岡地区試掘確認調査概要報告書	22
28	富岡地区				22
29	カマガ淵遺跡(北部)	H 13.6.14～H 13.6.16	鹿川町教委	平成13年度カマガ淵遺跡・根々崎五反地遺跡試掘確認調査概要報告書	75
30	根々崎五反地遺跡				75
31	七星下小野川地区	H 13.8.8～H 13.8.9	鹿川町教委	平成13年度七星下小野川地区試掘確認調査概要報告書	6
32	カマガ淵遺跡(南部)	H 13.10.9～H 13.11.19	鹿川町教委	平成13年度カマガ淵遺跡試掘確認調査概要報告書	78
33	カマガ淵遺跡	H 13.11.20～H 14.1.31	鹿川町教委		93
34	七星下小野川地区	H 14.5.13～H 14.5.24			6
35	日ノ川遺跡	H 14.5.24～H 14.5.30	鹿川町教委	平成14年度辻ノ川遺跡・天ノ川遺跡・七星下小野川地区試掘確認調査概要報告書	13
36	天ノ川遺跡	H 14.5.30～H 14.6.12			54
37	西原遺跡	H 15.6.30～H 15.7.11	鹿川町教委	平成15年度西原遺跡・東又弘見北地区試掘確認調査概要報告書	29
38	東又弘見北地区	H 15.12.15～H 15.12.18			20

(1) 入ル谷山遺跡

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町米奥字入ル谷山・富留処山

② 調査区の概要

四万十川右岸の丘陵上に所在。中世寺院大乗寺跡に隣接し、河原石を配した墓址らしき人造の平坦地がみられた。高知県埋蔵文化財センターが県道322号松原窪川線改良工事に伴い調査したものであるが概要を記す。

③ 調査期間

平成8年12月13日～平成8年12月27日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

約20m²/約800m²

⑤ 調査方法及び経過

地表の川原石を実測後、下層を調査した。

⑥ 基本層序

①表土②地山の二次堆積③岩盤

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP3

土坑を検出。肥前産染付猪口1点・寛永通宝5枚が出土した。

TP4

土坑の一部とみられる岩盤の掘削痕を確認。

TP5

土坑を検出。寛永通宝2枚・煙管が出土した。

TP6

土坑を検出。煙管が出土した。

TP9

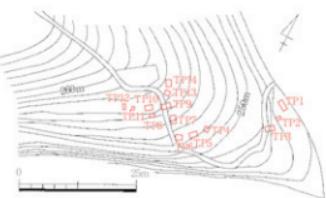
土坑を検出。

TP10

土坑を検出。角釘が出土した。

⑧ 調査成果

18世紀代の早い段階の古墓地と考えられる。



第2図 入ル谷山遺跡位置図・調査区平面図

(2) 作屋遺跡

① 調査場所

高知県高岡郡韮川町作屋

② 調査区の概要

四万十川右岸の河岸段丘上に位置する。同遺跡はかつて松葉川中学校校庭遺跡と呼ばれ、1948(昭和23)年開校の松葉川中学校校庭造成中、約200点の神西式土器・石包丁が出土した。土器の多くが(1)のように微隆起突帯を有することから、弥生時代中期後葉と思われる。貼付口縁・列点文・棒状浮文を有するものもある。叩き目が残る底部1点は他の遺物とは時期が異なる。実見していないが、凹線文を有する高杯1点の出土も報告されている。県道322号松原韮川線の待避所設置のための拡幅工事に伴い高知県教育委員会が調査した。

③ 調査期間

平成10年12月14日～平成10年12月17日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

約113m²/約1,200m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。

⑥ 基本層序

①表土、自然堆積層②アカホヤ③褐色土④淡黄色粘質土⑤疊

⑦ 出土遺物・検出遺構

遺物・遺構ともに確認できない。

⑧ 調査成果

調査区内には埋蔵文化財は所在しないと思われる。



第3図 作屋遺跡位置図・調査区平面図・遺物実測図

(3) 七里上小野川地区・七里下小野川地区・七里下小野川西地区

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町大字七里甲／乙

② 調査区の概要

四万十川の支流勝賀野川両岸の河岸段丘上に位置する。1991(平成3)年度は下小野川西地区で窪川町北部県営ほ場整備事業、2001(平成13)年度は下小野川地区、2002(平成14)年度は上小野川地区で県営担い手育成基盤整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

上小野川地区 平成14年5月13日～平成14年5月24日

下小野川地区 平成13年8月9日～平成13年8月9日

下小野川西地区 平成3年6月9日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

上小野川地区 約38m²/約32,464.6m²

下小野川地区 約32m²/約29,380m²

下小野川西地区 約24m²/約18,000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。

⑥ 基本層序

上小野川地区①表土②床土、自然堆積層③黒褐色粘土④アカホヤを含む黄褐色粘土⑤10cm大の礫を含む暗黒褐色粘土；下小野川地区①表土②床土、自然堆積層③暗灰色粘土④淡褐色粘土⑤黄灰色粘土⑥暗黄灰色粘土；下小野川西地区①表土②床土、自然堆積層③明灰色粘質土④暗灰色粘質土⑤黄褐色粘礫土

⑦ 出土遺物・検出遺構

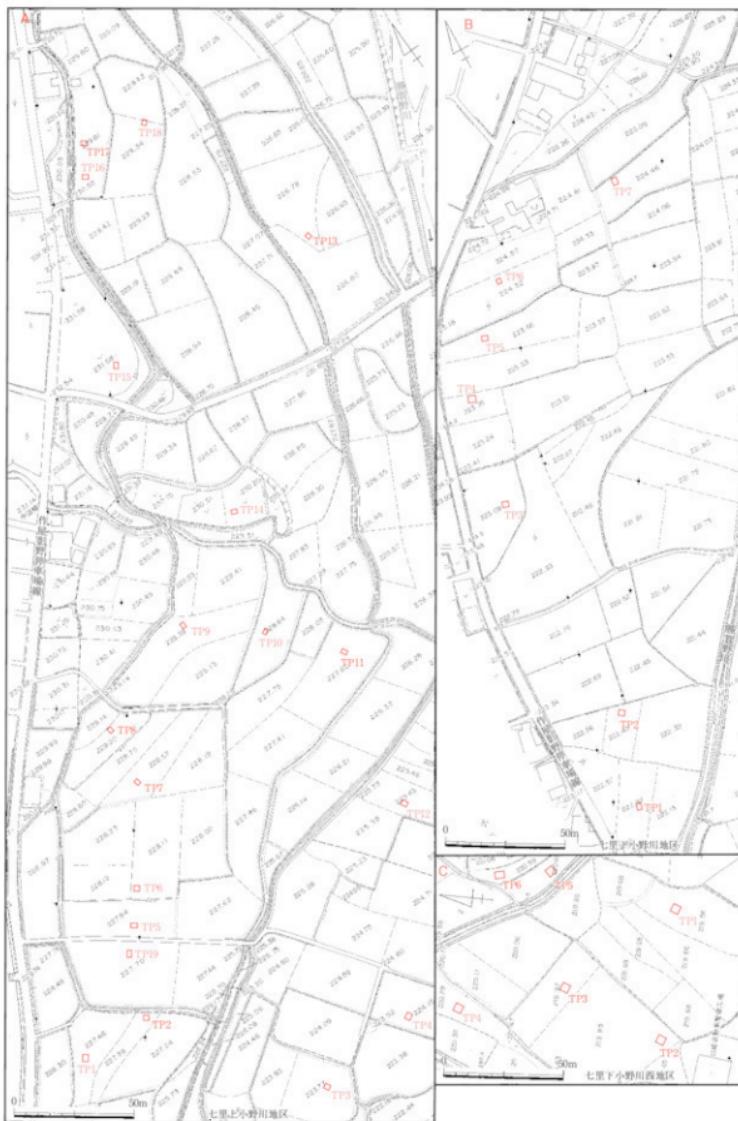
遺物・遺構とも確認できない。



第4図 七里上小野川地区・七里下小野川地区・七里下小野川西地区位置図

⑧ 調査成果

調査範囲内に埋蔵文化財は所在しないと考えられる。



第5図 七里上小野川地区・七里下小野川地区・七里下小野川西地区調査区平面図

(4) 沖代地区

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町七里乙

② 調査区の概要

調査区は四万十川左岸の河岸段丘上に位置する。窪川町

北部県営は場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

平成3年7月15日～平成3年8月8日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

約350m²/約82,000m²

⑤ 調査方法及び経過

遺構が確認されたTPについて随時拡張した。

⑥ 基本層序

①表土、自然堆積層 ②アカホヤ ③粘土 ④砂 ⑤礫

⑦ 出土遺物・検出遺構



第6図 沖代地区土層柱状図

TP8

ピットが4個、1.8m間隔で並ぶ柵列を検出したが、拡張区域や周辺TPの状況から掘立柱建物となる可能性は低い。地元では、このTP東側には1890(明治23)年の四万十川の氾濫まで集落が存在したと伝えられているが、遺構との関係を明らかにすることはできなかった。弥生時代後期と思われる土器片が数点出土したが、ローリングを受けており、流れ込みの可能性が考えられる。

TP19

ピットを検出した。

TP21

ピットを検出した。

TP23

3間×1間の掘立柱建物跡(SB1)1棟、3間×2間の総柱建物跡(SB2)1棟、ピット56個、溝状遺構1条を検出した。柱痕が確認されたピットもある。SB1の各ピットは径約1m、深さ約80～90cmを測り、出土した青磁から中世の遺構と考えられる。SB2からは近世の日常で使用された陶磁器が出土した。周囲の状況から遺構の広がりはTP23の周辺の1筆であると思われる。

TP26

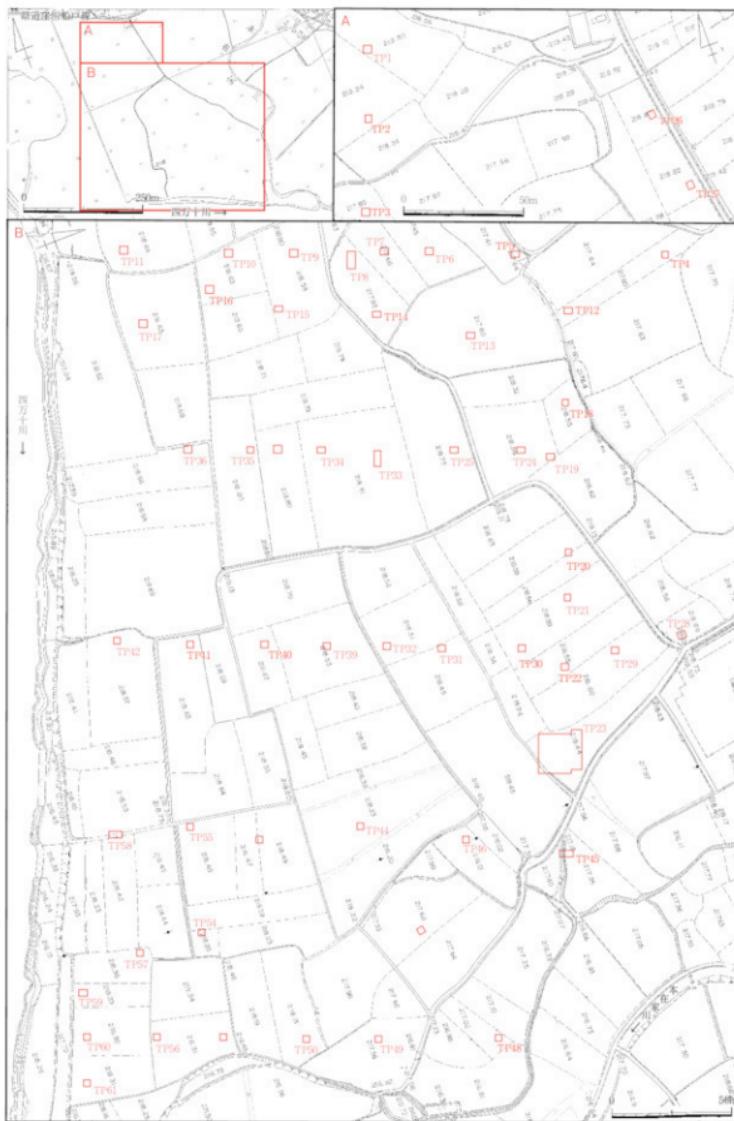
ピットを検出した。

TP45

溝状遺構を検出した。

TP52

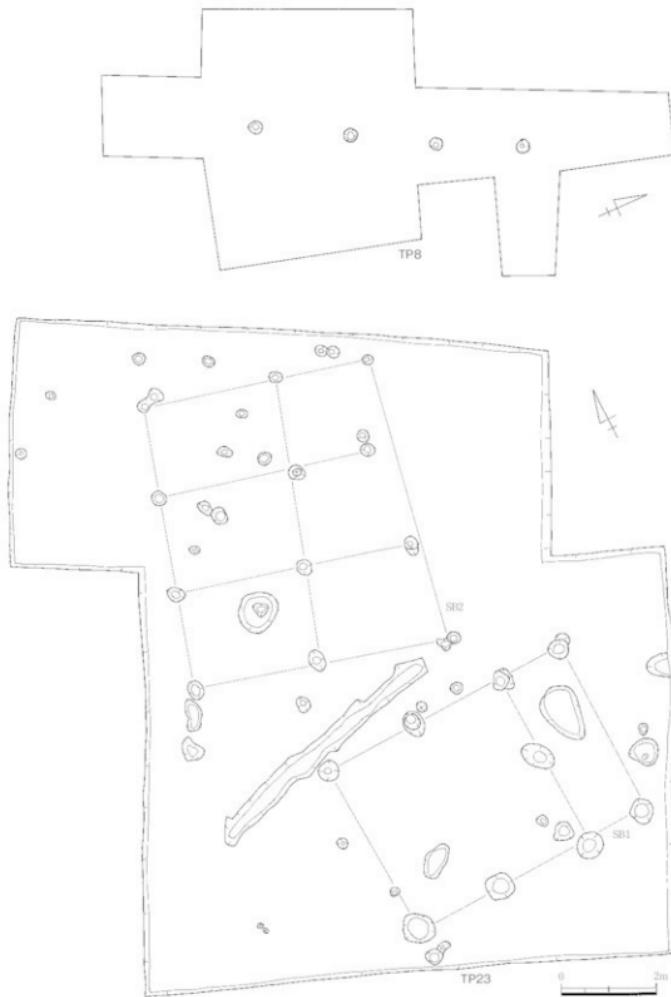
ピットを検出した。



第7図 沖代地区位置図・調査区平面図

⑧ 調査成果

SB1の間隔が短い1間を除いた桁行と梁間はほぼ正方形で、中世の神社または御堂的建物と考えられる。SB2は近世の民家跡と考えられる。



第8図 沖代地区遺構平面図

(5) 六反地遺跡

① 調査場所

高知県高岡郡雉川町六反地

② 調査区の概要

四万十川の支流仁井田川右岸の河岸段丘に位置する。1992(平成4)年12月14日実施の分布調査では縄文時代の遺跡と報告した。仁井田地区県営ほ場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

平成10年11月12日～平成10年11月20日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

約80m²/約670m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定し調査した。

⑥ 基本層序

表土(①赤褐色土)、自然堆積層(②アカホヤ③淡黄色粘質土④明褐色土⑤砂礫)

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP1

ピットを4個検出した。

TP2

ピットを検出した。

TP3

ピットを4個検出した。

TP6

ピットを5個検出した。

TP7

ピットを検出した。

TP20

溝を1条検出した。

⑧ 調査成果

調査範囲内は遺跡の縁辺部であると考えられた。上記以外の場所でも14~15世紀前半の所産である。青磁片を1点表探した。



第9図 六反地遺跡位置図・調査区平面図

(6) 汁ノ川遺跡

① 調査場所

高知県高岡郡鹿川町仁井田

② 調査区の概要

四万十川の支流仁井田川左岸の河岸段丘上に位置する。県営担い手育成基盤整備事業に伴い調査をした。

③ 調査期間

平成14年5月24日～平成14年5月30日

④ 調査面積(調査面積／対象面積)

約82m²／約41,854.3m²

⑤ 調査方法及び経過

TP4で状態が良好な遺物包含層が確認されたため、TP37～40を設定してその広がりを確認しようと試みたが遺物包含層は所在しなかった。遺物包含層の範囲は限られていると判断したため、2002(平成14)年9月24日～同年9月25日に立会の際に、TP3・4周辺を拡張区として設定し、耕作土を重機で除去して精査し遺物包含層上層の広がりを調査した結果、TP4拡張区で遺構・遺物を確認することができた。

⑥ 基本層序

①表土②床土、自然堆積層③黒褐色粘土④アカホヤ)。黒褐色粘土とアカホヤの間には両層の混合層が存在する。黒褐色粘土又はこれが混入する土層は遺物包含層となる。アカホヤの下は暗黒褐色粘土・淡黒褐色粘土である。

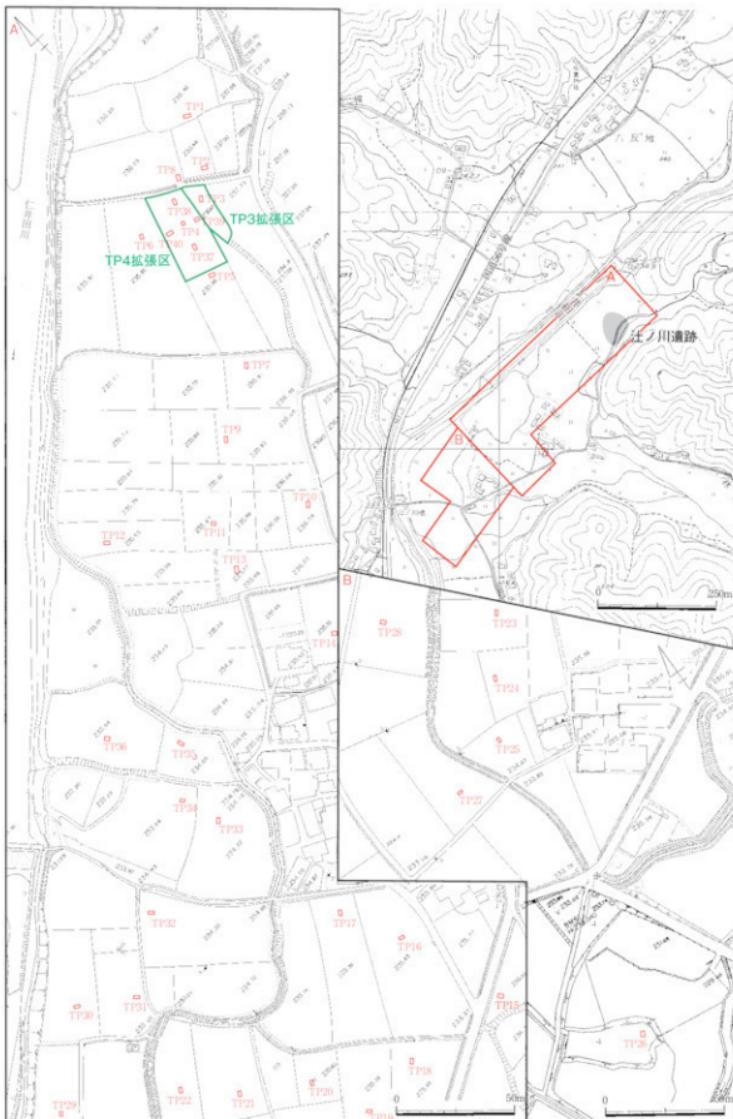
⑦ 出土遺物・検出遺構

TP4

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～Ⅶ層は自然堆積層であり、第Ⅲ層から弥生土器片14点出土する。微隆起突帯を有するものも含む。Ⅳ層からは弥生土器片17点が出土する。微隆起突帯を有するものや平底を呈する底部を含む。第Ⅴ層上面からはP1～3を検出した。遺構の詳細については下記のとおりである。

P1

TP内の北西部で検出した。平面形は橢円形で長径約38cm、短径約22cm、深さ約18cmを測る。



第10図 汗ノ川遺跡位置図・調査区平面図

埋土は第IV層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

P2

TP内の北東部で検出した。平面形は瓢箪形で複数のピットの切り合いも想定したが、断面から単体の遺構であると判断した。長径約68cm、短径約48cm、深さ約26cmを測る。埋土は第IV層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。弥生土器片(6)が1点出土した。櫛状の原体による刻目の下に、微隆起突帯・浮文を有する。

P3

TP内の北東部で検出した。TP4調査時には遺構の半分が調査範囲外であったが、TP4拡張時に全体形を確認した。平面形は円形で径約52cm、深さ約18cmを測る。埋土は第IV層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

TP6

第I層は耕作土である。第II層は盛土であるが、弥生土器片が1点、土師質土器片が1点、陶磁器片が2点出土した。第III～VI層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP12

第I層は耕作土で、備前焼甕が出土した。第II層は盛土である。第III～IV層は自然堆積層であるが、III層からは弥生土器片が4点出土した。

TP33

第I層は耕作土である。第II～V層は盛土である。第VI～VII層は自然堆積層であるが、遺物は出土しなかった。第VII層上面で正体不明遺構を検出したが時期を特定することはできなかった。

TP4拡張区

土坑1基と遺物包含層を埋土とする不定形の遺構と思われるものを確認した。それぞれSK1、SX1として人力で調査した。以下遺構ごとに内容を記す。なお、TP4拡張区の調査は耕作土等を除去した後に実施したため、耕作土層上面のレベルは測量しなかった。TP4の第III層・第IV層がそれぞれ、TP4拡張区の第I層・第II層に相当する。

SK1

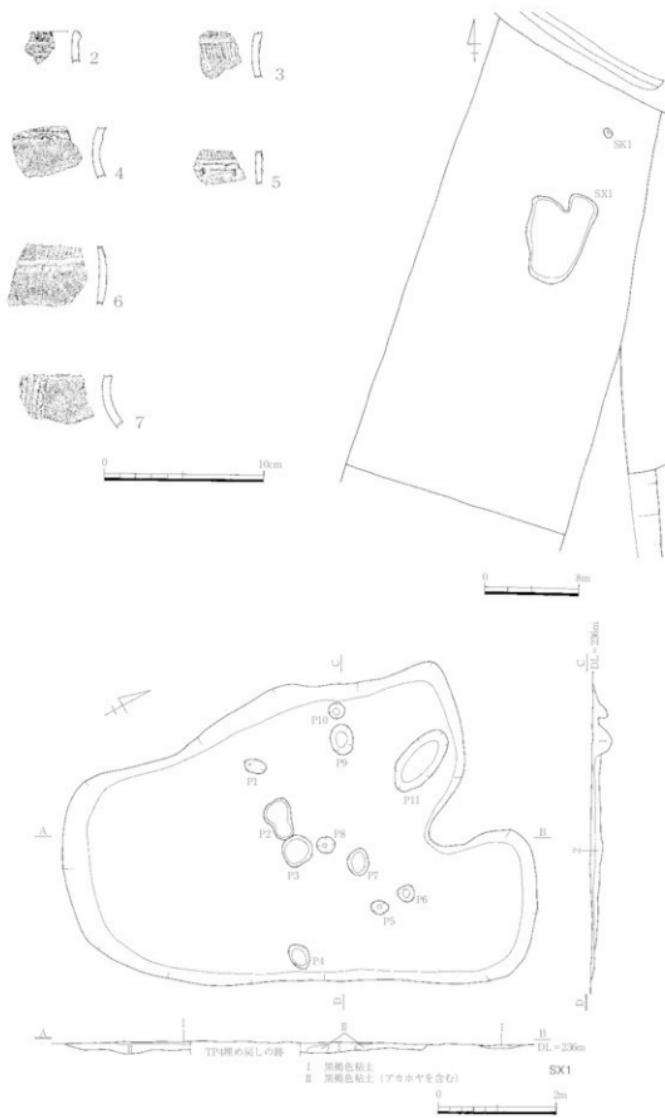
調査区北東部で検出した。平面形は円形で径約70cm、深さ約9cmを測る。埋土は褐灰色粘土で黄褐色粘土を含む。弥生土器片1点と中世のものと思われる青磁が出土した。

SX1

調査区中央部で検出した。平面形は不定形であるが、東西に約540cm、南北に約790cm、深さ20cmを測る。埋土は上層が黒褐色粘土で、下層はこれに地山のアカホヤが混じる。断面図等で判断すると、明瞭な遺構の肩を確認することができないところから、地形の落ち込みに遺物包含層が堆積したものと思われる。遺構の下面からP4～11が検出されている。遺物は第II層から弥生土器片が約40点出土している。(2・3・4・5・7)は弥生土器である。櫛状原体による刻目・微隆起突帯・浮文を有する点が特徴的である。

P4

SX1内の東部で検出した。平面形は梢円形で長径約46cm、短径約32cm、深さ約18cmを測る。



第11図 汗ノ川遺跡TP4拡張区平面図・遺構平面図・遺物実測図

埋土は第Ⅱ層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

P5

SX1内の北東部で検出した。平面形は円形で径約22cm、深さ約6cmを測る。埋土は第Ⅱ層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

P6

SX1内の北東部で検出した。平面形は楕円形で径約28cm、深さ約9cmを測る。埋土は第Ⅱ層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

P7

SX1内の中央部で検出した。平面形は楕円形で長径約46cm、短径約34cm、深さ約9cmを測る。埋土は第Ⅱ層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

P8

SX1内の中央部で検出した。平面形は円形で径約28cm、深さ約4cmを測る。埋土は第Ⅱ層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

P9

SX1内の西部で検出した。平面形は楕円形で長径約52cm、短径約38cm、深さ約19cmを測る。埋土は第Ⅱ層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

P10

SX1内の西部で検出した。平面形は円形で径約24cm、深さ約13cmを測る。埋土は第Ⅱ層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

P11

SX1内の北西部で検出した。平面形は楕円形で長径約124cm、短径約60cm、深さ約16cmを測る。埋土は第Ⅱ層と同じで、アカホヤを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

⑧ 調査成果

SX1は検出時に、住居跡である可能性も期待されたが、断面等からは積極的に人工的な構造物であると判断できる材料は確認できなかった。自然地形の落ち込みに遺物が混入したものと思われるが、遺物はあまり磨耗していないため、周辺に集落等が所在する可能性がある。出土した弥生土器片は前述した特徴から、弥生時代Ⅲ～Ⅳ様式の時期のものであると思われる。

今回の調査対象外であったが、調査区の東側から山際にかけて緩傾斜の微高地が南北に広がっている。付近は高速道路建設計画地となっているが事前の調査が必要である。

(7) 浜の川地区・小向地区

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町仁井田／小向

② 調査区の概要

四万十川の支流仁井田川両岸の河岸段丘上に位置する。浜の川地区は1966(昭和41)年に石礫が表採されて発見された浜の川遺跡が隣接する。仁井田地区は場整備事業に伴い調査を実施した。

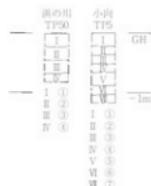
③ 調査期間

浜の川地区 平成10年10月26日～平成10年11月11日

小向地区 平成10年11月21日～平成10年12月8日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

約278m²／約2,330m²



⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定し調査した。

第12図 浜の川地区・小向地区
土層柱状図

⑥ 基本層序

浜の川地区①表土、自然堆積層(②褐色土③淡黄色粘質土④黄色土)：小向地区は①表土、自然堆積層(②淡黄色粘質土③明褐色土④アカホヤ⑤暗褐色土⑥灰色粘質土⑦砂礫)

⑦ 出土遺物・検出遺構

浜の川地区

TP50

小片ではあるが弥生土器片が出土した。

小向地区

TP5

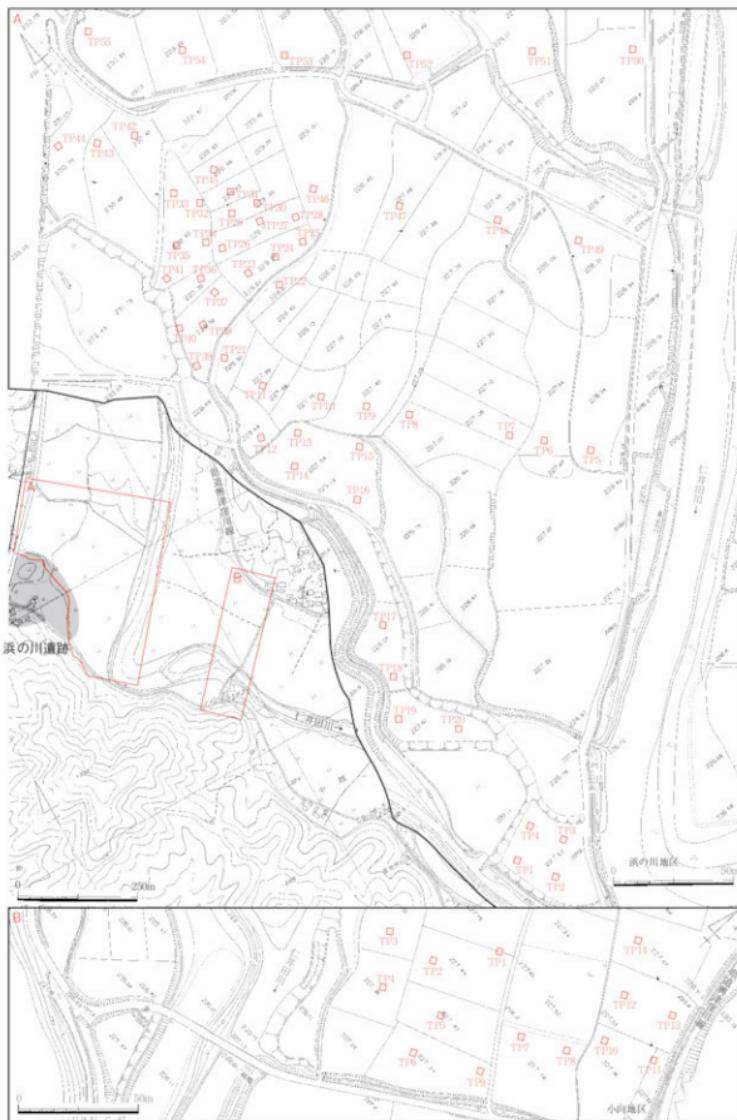
弥生土器片が出土した。土器はローリングを受けている。

TP6

ピットを2個検出した。弥生土器片が出土した。土器はローリングを受けている。

⑧ 調査成果

調査範囲内は遺跡の縁辺部であると考えられる。



第13図 浜の川地区・小向地区位置図・調査区平面図

(8) 東又弘見北地区

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町弘見

② 調査区の概要

四万十川の支流東又川右岸の丘陵上に位置する。県営担い手育成基盤整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

平成15年12月15日～平成15年12月17日

④ 調査面積(調査面積／対象面積)

約82m²／約8,000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。

⑥ 基本層序

①表土②床土、自然堆積層(③アカホヤ④淡灰褐色砂礫⑤淡灰褐色粘土)

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP8

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層上面で正体不明遺構1基を検出。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積層で遺物は出土しない。

TP13

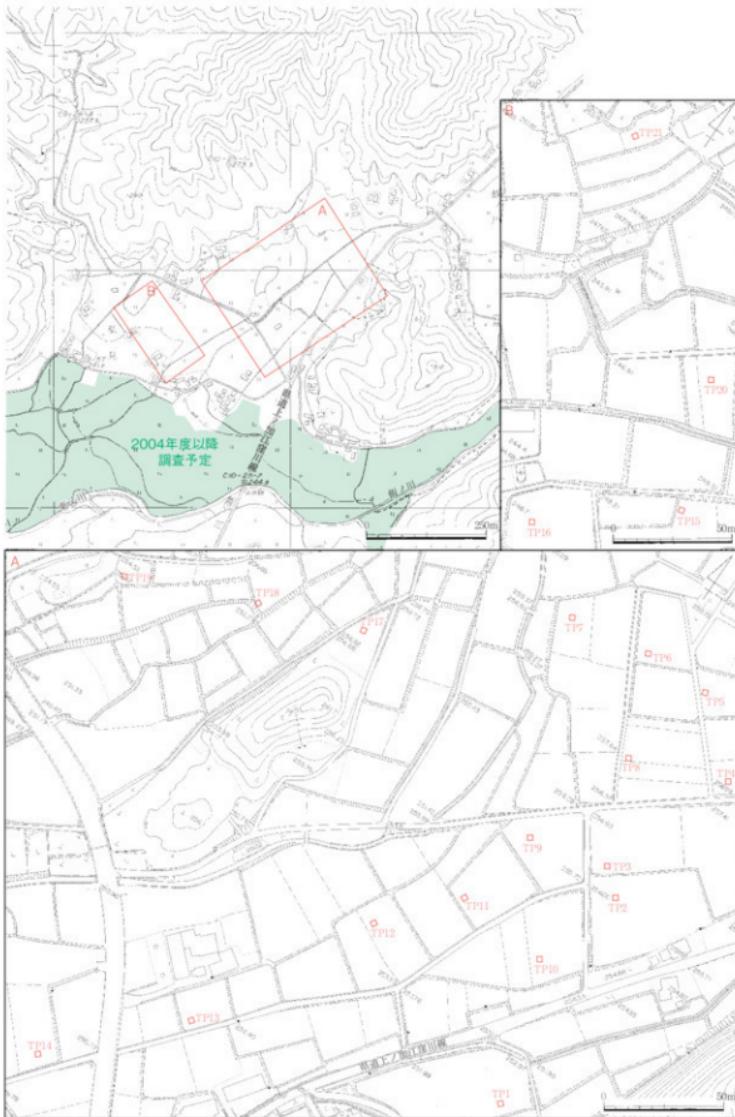
第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層上面でピット1個を検出。第Ⅲ～Ⅳ層は自然堆積層で遺物は出土しない。

TP20

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層上面でピット1個を検出。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積層で遺物は出土しない。

⑧ 調査成果

遺構は耕作土・盛土直下で検出。遺物を伴わず、時期の特定は不可能。



第14図 東又弘見北地区位置図・調査区平面図

(9) 平串遺跡・富岡地区

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町平串・富岡

② 調査区の概要

四万十川の支流仁井田川右岸の河岸段丘上に位置する。平串遺跡は、1992(平成4)年12月14日に実施した分布調査において姫島産黒曜石・青磁・白磁・土師質土器が表探されて発見された。富岡地区は平串遺跡の上流側に位置する。仁井田地区県営は場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

平成12年11月21日～平成12年12月19日

④ 調査面積(調査面積／対象面積)

約266m²／約63,232.57m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。

⑥ 基本層序

耕作土(①灰褐色粘土)、盛土(②灰褐色粘土(黄色粘土を含む))、自然堆積層(③黒褐色粘土④アカホヤ⑤アカホヤ(褐灰色砂質シルトを含む)⑥灰褐色粘土(砂粒を含む)⑦暗褐色粘土⑧褐灰色砂質シルト)。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

⑦ 出土遺物・検出遺構

平串遺跡

TP3

第Ⅰ・Ⅱ層は耕作土・盛土である。第Ⅲ～Ⅶ層は自然堆積によって形成された。第Ⅲ層からは中世陶器片が3点出土した。第Ⅲ層下面にピット状の遺構を検出したが、埋土の締まりがなく堆積後の時間経過が比較的短いものとみられた。

TP6

第Ⅰ・Ⅱ層は耕作土・盛土である。第Ⅲ～Ⅵ層は自然堆積によって形成された。第Ⅲ層下面にピット状の遺構を検出したが、埋土の締まりがなく堆積後の時間経過が比較的短いものとみられた。遺物は出土しない。

TP7

第Ⅰ・Ⅱ層は耕作土・盛土である。第Ⅲ～Ⅵ層は自然堆積によって形成された。第Ⅲ層からは



第15図 平串遺跡・富岡地区位置図・調査区平面図

中世陶器片が1点出土した。第Ⅲ層下面にピット状の遺構を検出したが、埋土の締まりがなく堆積後の時間経過が比較的短いものとみられた。

TP8

第Ⅰ・Ⅱ層は耕作土・盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積によって形成された。第Ⅱ層からは中世の土師質土器片が1点出土した。

TP46

第Ⅰ・Ⅱ層は耕作土・盛土である。第Ⅰ層からは中国製青磁片が1点出土した。第Ⅱ層からは土錘が1点出土した。第Ⅲ層は自然堆積によって形成された。遺物・遺構は検出されなかった。

TP48

第Ⅰ・Ⅱ層は耕作土・盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積によって形成された。遺物・遺構は検出されなかった。第Ⅱ層下面にピット状の遺構を検出したが、埋土の締まりがなく堆積後の時間経過が比較的短いものとみられた。

TP49

第Ⅰ～Ⅲ層は耕作土・盛土である。第Ⅳ～VI層は自然堆積によって形成された。遺物・遺構は検出されなかった。第Ⅴ層下面にピット状の遺構を検出したが、埋土の締まりがなく堆積後の時間経過が比較的短いものとみられた。

富岡地区

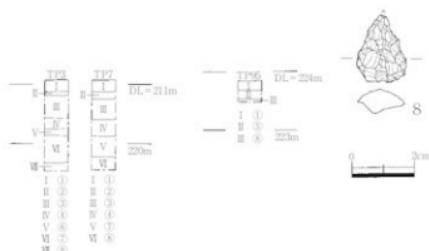
TP95

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積によって形成された。第Ⅱ層のアカホヤからは姫島産黒曜石製の石鎌(8)が1点出土した。

⑧ 調査成果

平串跡については開墾等のために土地が削平を受けているところが多いようである。また、調査対象外である山側の様相については今後の調査を待たなければならない。

富岡地区について姫島産黒曜石が出土したが、豆等の作付けのため調査できなかつたところが多く、未調査地に遺跡の中心が所在する可能性がある。



第16図 平串跡・富岡地区土層柱状図・出土遺物実測図

(10) 宮内遺跡

① 調査場所

高知県高岡郡宮川町宮内458地先

② 調査区の概要

四万十川右岸の河岸段丘に位置する。戦前の頃、後期前半の弥生土器・石包丁・磨製石斧の表採により発見された。県道322号松原宮川線待避所設置のための拡幅工事に伴い高知県教育委員会が調査したものであるが概要を記す。

③ 調査期間

平成10年7月7日

④ 調査面積(調査面積／対象面積)

約20m²／約200m²

⑤ 調査方法及び経緯

任意のTPを設定して調査した。

⑥ 基本層序

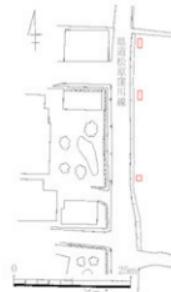
①表土②床土・自然堆積層③灰色粘質土④暗灰色粘質土⑤縞

⑦ 出土遺物・検出構

遺物・遺構とも確認できない。

⑧ 調査成果

調査区内には埋蔵文化財は所在しないが、調査区北方の微高地は遺跡の中心である可能性が強い。



第17図 宮内遺跡位置図・調査区平面図

(11) 神ノ西遺跡

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町神ノ西

② 調査区の概要

四万十川左岸の河岸段丘上に位置する。神ノ西遺跡は1950(昭和25)年、神ノ西部落を通る町道窪川・平串線から四万十川二又瀬に向う農道拡張工事の際に発見された。この周辺の四万十川沿いには「おきぞり」と呼ばれる微高地が河川に平行して連なるが、ここを掘削中地表下50~60cmの位置で堅穴住居跡と思われる遺構が発見された。間口約2m、奥行約3mの遺構が傾斜しながら南北の方向に形成され、最深部に直径約35cmの火窓があったと報告された。火窓の周囲には焼土があり、火窓の中には灰が約10~15cmの層を成して灰が堆積していたということであるが、これは堅穴住居の中央ピットである可能性が強い。弥生土器・磨製石包丁・叩石・凹石等が出土した。

同年、前述の発見地点より東方10m以内の場所で、岡本健児氏(当時窪川高校教員)によって発掘調査が2箇所で実施された(以下TRA・TRBと記す)。TRAは東西1.5m、南北3m、深さ40cm、TRBは東西2m、南北1m、深さ60cmを測った。TRAの第Ⅰ層は表土の黒色腐植土で厚さ12cm、第Ⅱ層は赤褐色粘土で厚さ20cm、第Ⅲ層は砂利であった。第Ⅱ層上面で長さ2.70m、幅1.10mの土坑が検出された。土坑の埋土は第Ⅰ層と同じ黒色腐食土で第Ⅲ層中まで掘り込まれており、平底の土器底部のみ5点が出土した。TRBも同じ層序で第Ⅰ層13cm、第Ⅱ層55cmの厚さを測り、やはり第Ⅱ層上面で長さ2.70m、幅1.10m、表土から底までの深さ68cmを測る土坑を検出した。埋土もTRAの土坑と同じで、完形の弥生土器・叩石・多量の木炭片が出土した。当遺跡で出土した貼付口縁等を特徴とする土器は神ノ西式土器として型式設定され、龍河洞式との関係からIV様式(現在では中期後葉)のものとされてきた。しかし、近年北高田遺跡(土佐市)の資料から、同様の特徴を持つ土器が後期初頭にも存在することが指摘されるようになった。当遺跡の出土土器は、微隆起帯が施されていないところから、後期のものと思われる。(9)の土器も貼付口縁を有し、この部分と上胴部にハケ状工具による刻目が施されている。上胴部の刻目の上と下には1条ずつ水平に細い櫛描き文様が施され、上胴部の文様帯を区画している。頸部と下胴部には実測図には表現されていないがハケ調整が施されている。下胴部には人為的に打ち欠いてできた穴が穿たれているが、カマガ淵遺跡出土の土器にも同様の痕がみられるものがあり、祭祀的な行為が行われた可能性を伺うことができる。また、出土品には小形丸底壺等土師器も含まれていることが報告された。

1968(昭和43)年5月に最初の弥生土器発見地より約300m南の土地で農地整地作業中、深さ約2mの堆積層から粘板岩製の打製石斧が2点出土した。縄文後期のものとみられ、一方は長さ23cm重さ600g、他方が長さ13cm重さ220gを測った。今回の調査区は遺跡の南端部に該当する。

事前踏査により、神ノ西字大平1215-1で土師器4点・縄文土器及び弥生土器3点・青磁1点、同



第18図 神ノ西遺跡出土
遺物実測図(1)

字嵐山173で弥生土器(中後期)26点・須恵器及び土師質土器5点・繩文土器2点・染付1点・同字六反地山方163で弥生土器2点・シモオキゾリ55で弥生土器8点・土師器1点・同字宮の下117で弥生土器6点・唐津・伊万里各2点・青磁1点を表探、1987(昭和62)年9月4日に届出た。鹿川町南部立西地区県営は場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

平成6年10月6日～平成6年11月11日

④ 調査面積

(調査面積／対象面積)

約110m²／約30,000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。遺構が確認されたTPについては随時拡張した。

⑥ 基本層序

①耕作土②黄褐色土(繩文時代後期遺物包含層)③褐色土④黄褐色粘質土

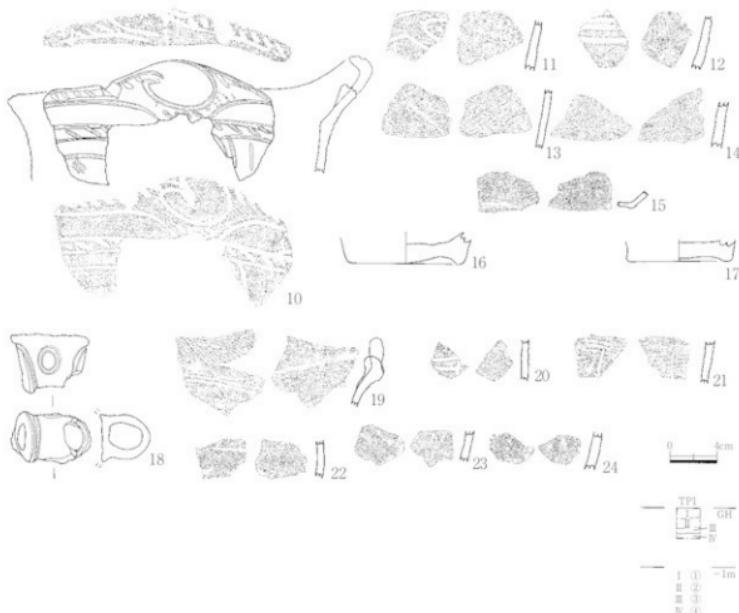
⑦ 出土遺物・検出遺構

TP1

第II層より(10～17)を含めて繩文土器片が24点出土した。(10)は口縁端部に2本沈線による磨消繩文とその間の斜行短沈



第19図 神ノ西遺跡位置図・調査区平面図



第20図 神ノ西遺跡出土遺物実測図(2)

線を有し、波状口縁の頂部は入組文となる。その下に同様の2本沈線・斜行短沈線、さらにRLの縄文原体・2本沈線による磨消縄文が施される。(11)は2本沈線による磨消縄文、(12)は2本沈線を有する。(13)は内面に条痕が施され、(14)は無文である。(15~17)は高台状の平底を呈する底部である。

TP2

第II層より(18~24)を含めて縄文土器片が16点出土した。(18)は把手であり、円形の沈線文を有する。(19)は波状口縁で、肥厚された部分にRLの磨消縄文を有する。(20~22)は沈線で施文されており、(21)は裏面に条痕を有する。(23・24)は接合する。

⑧ 調査成果

縄文時代後期のものと見られる縄文土器片が出土した。磨消縄文や2本沈線の間に斜行の刻み目を施す特徴等から宿毛式に相当すると思われる。

(12) 西原遺跡

① 調査場所

高知県高岡郡離川町西原

② 調査区の概要

四万十川左岸の河岸段丘上に位置する。事前踏査により、西原字永田山333で須恵質土器及び備前28点・青磁8点・弥生土器4点・土師器・白磁・染付各2点・同字太田455で備前3点・同字明石見396-2で青磁及び染付2点・柳ノ庭558-1で弥生土器及び備前22点・瓦質土器及び青磁5点・土師質土器・土錐各2点・同字谷田594で備前擂鉢1点・磁器碗・稜花皿2点を表探、1987(昭和62)年9月4日に届出た。離川西部地区中山間地域総合整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

平成15年6月30日～平成15年7月11日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

約250m²/約166.000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意にTPを設定して調査した。TP54については遺物包含層の広がりを確認するために細長いTPに設定した。調査の結果、土器の細片や遺物を伴わない遺構を検出したため、2003(平成15)年9月22日～同年10月20日に立会の際に、TP抵張区を設定し、耕作土を重機で除去後、精査した。

⑥ 基本層序

耕作土(①灰色粘土)盛土(②灰色粘土(黄褐色粘土を含む)③淡暗褐色粘土(黄褐色粘土を含む))自然堆積層(④黄褐色粘土⑤黄灰褐色粘土⑥黄灰色粘土⑦黄灰色砂質シルト⑧黄灰色砂質シルト(アカホヤを含む)⑨黄灰色砂質シルト(アカホヤを多く含む)⑩アカホヤ⑪灰褐色粘土⑫灰褐色シルト⑬白灰褐色シルト)。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

①～③からは中世以降の遺物が出土する。④からは古墳時代の遺物が出土する。その下は部分的に、灰色シルトが堆積し、弥生時代後期の遺物が出土する。⑩⑪からは绳文時代の遺物が出土する。

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP1

第I層は耕作土である。第II層の盛土からは、14世紀



第21図 西原遺跡位置図・土層柱状図



第22図 西原遺跡調査区平面図(1)



第23図 西原遺跡調査区平面図(2)

頃の青磁 1 点、15世紀頃の芭蕉葉文を有するC類青花 1 点、近世陶磁器 1 点が出土した。第Ⅲ～VI層の自然堆積層は、無遺物である。

TP2

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層上面でピットを12個検出し、P1からは15世紀頃の無文D類青磁片 1 点、P2からは中世土師質土器片 1 点が出土した。第Ⅲ～VI層の自然堆積層は無遺物である。

TP3

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ～Ⅲ層は盛土である。第Ⅲ層からは15世紀頃のD類白磁片(皿)が1点出土、その他、時期不明の陶磁器片 1 点が出土した。第Ⅳ～V層の自然堆積層は無遺物である。

TP12

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層上面で、平面形が橢円形、長径約120cm、短径約95cm、深さ22cmを測る土坑を検出した。中世V期備前焼片(擂鉢) 1 点、近世備前焼片(擂鉢) 2 点、備前焼片(壺) 2 点、同(甕) 2 点、3類青花片(碗) 1 点、唐津焼片(捏鉢) 1 点が出土した。第Ⅲ層は自然堆積層で、土師質土器片が2点出土した。第Ⅲ層下面でその他ピットを4個検出した。

TP13

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土であるが、16世紀末～17世紀初の漳州窯青磁が出土した。第Ⅲ～VII層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは土師器の鉢が出土した。

TP15

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層上面からピットを10個検出し、備前焼と思われる土器が1点出土した。

TP16

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～VI層は自然堆積層で、第V層から珪質頁岩の石核が1点出土した。

TP17

第Ⅰ層の耕作土から土師質土器片が1点出土した。第Ⅱ～VI層の自然堆積層は無遺物である。

TP19

第Ⅰ層の耕作土から、土師質土器片が5点出土した。第Ⅱ層は盛土、第Ⅲ～VII層の自然堆積層は無遺物である。

TP22

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～IV層の自然堆積層は無遺物である。第Ⅲ層上面からピットを2個検出した。

TP26

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層の盛土から、龍泉窯系青磁片(稜花皿) 1 点、時期不明の土器片2点が出土した。第Ⅲ層上面で土坑を検出し、中世土師質土器片 1 点が出土した。第Ⅲ～VI層の自然堆積層は無遺物である。

TP28

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層の盛土から13世紀後半から14世紀初頃の青磁片 1 点、IV期備前

焼片1点、中世土師質土器片5点が出土した。第Ⅲ層上面でピットを11個検出した。第Ⅲ～V層の自然堆積層は無遺物である。

TP29

第I層は耕作土である。第II層の盛土から無文D類青磁片1点、龍泉窯系青磁片1点が出土した。第III～VI層の自然堆積層は無遺物である。

TP46

第I層は耕作土、第II～III層は盛土である。第IV～VI層は自然堆積層である。第VI層より縄文土器細片が26点出土した。

TP47

第I層は耕作土、第II層は盛土である。第III～V層は自然堆積層である。第V層上面でピットを6個検出した。土師質土器が2点出土した。

TP49

第I層は耕作土、第II層は盛土である。第III層上面でピットを3個検出した。第III～VI層の自然堆積層は無遺物である。

TP51

第I層は耕作土、第II～III層は盛土である。第IV層上面から土坑1基、ピット2個を検出した。第IV～VI層の自然堆積層は無遺物である。

TP54

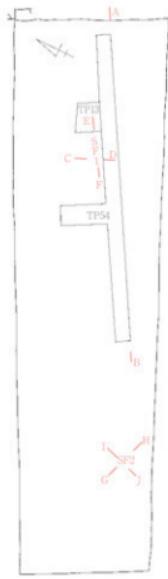
第I層は耕作土、第II層は盛土である。第III～V層は自然堆積層である。第III層からは土師器片39点が出土した。

TP55

第I層は耕作土、第II層は盛土である。第III層上面でピットを3個検出した。第III～V層は自然堆積層である。P1から土鍤が1点出土した。

TP12抜張区

表土掘削後、中世の瀬戸焼天目1点を表探しした。被熱を受けている。



0 10m



第24図 西原遺跡TP14抜張区調査区平面図・セクション図

TP13拡張区

表土掘削後、SF1・SF2を検出した。土師質土器・中世の青磁を表探した。

SF1

土師器が出土した。古墳時代のものと思われる。(25・26)は丸底の小壺である。(25)は口縁部・頸部の内外面にハケ調整を施す。(26)はハケ調整であるが、叩き目も残る。椭円形浮文を有するものや貼付口縁を有するもの、含めて土器片が約40点出土した。また、石皿1点・砥石2点が出土した。石材は砂岩である。

SF2

弥生時代後期のものと思われる土器が出土した。(28~30)は壺である。(29・30)は同一個体の可能性が強い。「く」の字に外反する口縁を有するもの、貼付口縁を有するもの、内外面にハケ調整を施すもの、平底の底部を有するものを含め土器片が約160点出土した。

TP13西拡張区

表土掘削後、15世紀の青磁1点・瀬戸焼梅瓶の口1点を採取した。

TP15拡張区

表土掘削後、土坑1基、ピット87個を検出した。(31)は壺である。(32)は内外面にハケ調整を施す。土師質土器が出土した。

P1

土師質土器が出土した。

P2

土師質土器が出土した。

P3

備前焼や16世紀後半~17世紀初頭の本邦模鉄錢(元祐通宝)2枚が出土した。

P4

15世紀後半の播磨型土師質土器鍋が出土した。

TP16拡張区

ピットを検出したが、遺物は出土しなかった。

⑧ 調査成果

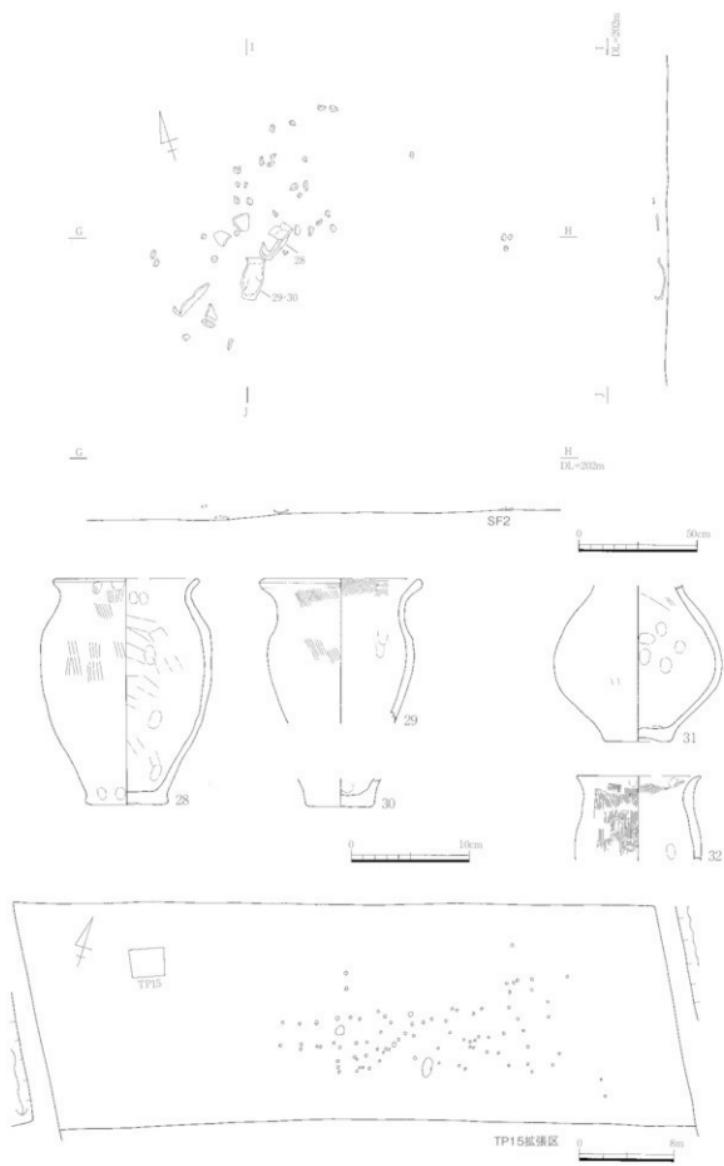
縄文~古墳時代・中近世の遺物が出土した。弥生~古墳時代の祭祀遺構が2基確認された。SF1は古墳時代、SF2は弥生時代後期のものと思われる。竜川町で確認された祭祀遺構としては根元原遺跡に続く2例目となる。調査例の多い四万十川下流域だけでなく上流域にも、祭祀が営まれた場所が複数箇所所在する可能性が想定されるようになった。

中近世の遺物については15世紀・16世紀末~17世紀のものが多く、16世紀前半~半ば頃のものがあまりみられない。西原遺跡南西に位置する西原城には、西原氏が初代清延(吉村氏を名のる)の時代に居城し、1492(明応元)年には奈路城に移る。遺物の減少期とはほぼ合致する点は興味深い。

縄文時代の遺物が確認されたTPの周辺については、2004(平成16)年度以降再確認を実施する。



第25図 西原遺跡TP14拡張区SF1平面図・遺物実測図



第26図 西原遺跡TP14拡張区SF2平面図・遺物実測図・TP15拡張区平面図・遺物実測図

(13) 中神ノ川地区

① 調査場所

高知県高岡郡庄川町中神ノ川

② 調査区の概要

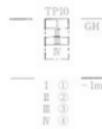
四万十川の支流神ノ川両岸の河岸段丘上に位置する。事前踏査により、中神ノ川字宮ノ西123-3・128-1で土師質土器2点・備前1点を表探、1987(昭和62)年4月1日に届出た。庄川町南部地区県営は場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

平成3年11月13日～平成3年11月24日(若井川神田地区調査期間含む)

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

約72m²/約1,750m²



⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。

第27図 中神ノ川地区土層柱状図

⑥ 基本層序

①表土②床土・整地層、自然堆積層(③アカホヤ④シルト⑤地山)

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP6

ピットを2個検出した。

TP9

ピットを2個検出した。東側のピットは底に根石を敷いた柱穴である。

TP10

第Ⅲ層より時期は不明だが白磁の口縁部が1点出土している。

TP15

耕作土・整地層より、16世紀代のものと思われる白磁の口縁部1点、備前焼片1点が出土した。

TP17

ピットを1個検出した。

⑧ 調査成果

TP2・3・5は以前の河道である。狭地直し等により、遺構が破壊されていることが多いと思われる。



第28図 中神ノ川地区位置図・調査区平面図

(14) 口神ノ川一町切地区

① 調査場所

高知県高岡郡奎川町口神ノ川字一町切

② 調査区の概要

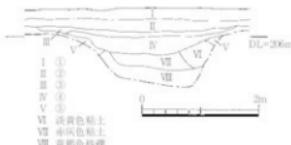
四万十川の支流神ノ川右岸の河岸段丘上に位置する。事前踏査により、口神ノ川字大久保216~224で備前鑿鉢・甕各1点・須恵器3点、同字一町切240~246で細蓮弁文を有する青磁・須恵質土器・備前各1点、同字畠四郎で青磁2点を表採、1987(昭和62)年4月1日に届出た。奎川町南部地区県営ほ場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

昭和63年9月19日~昭和63年10月20日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

約270m²/約72,500m²



第29図 口神ノ川一町切地区セクション図

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。遺構が確認されたTPについては随時拡張した。

⑥ 基本層序

①表土②黄灰色粘土③黒褐色粘質土④黄褐色粘質土⑤アカホヤ。⑤の上面が主要な遺構検出面である。

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP12

溝が1条検出された。

TP13

土師器細片が3点出土した。

TP30

掘立柱建物跡(2間×2間)1棟、その南に溝1条を検出。掘立柱建物跡の柱穴は円形、径30~40cm、深さ48.4~70.3cm、埋土は黒褐色粘質土で締まる。桁行1.80~1.85m間、梁間1.40~1.45m間で、規模等から小屋と思われる。溝は梁方向と同方向である。土師器片3点・備前風陶器片(甕)20点・伊万里片1点が第Ⅲ層黒褐色粘土層から大部分出土。備前風陶器は同一個体である。

⑧ 調査成果

出土遺物等から中世~近世の屋敷跡の存在が考えられる。遺跡の範囲は図のとおりである。



第30図 口神ノ川一町切地区位置図・調査区平面図・遺構平面図

(15) 口神ノ川スガサキ地区

① 調査場所

高知県高岡郡対川町口神ノ川字スガサキ／茶屋奈路・東小川表

② 調査区の概要

四万十川右岸の河岸段丘上に位置する。1980(昭和55)年頃、羽衣神社南100mの水田中から鎌倉期の洲浜秋草飛鳥鏡と14世紀代と思われる古瀬戸の瓶子が出土した。また、事前踏査により、口神ノ川字茶屋奈路2125で縄文土器・弥生土器・備前擂鉢・青磁・瓦質土器各1点、同字東小川表510～516で備前甕1点を表探、1987(昭和62)年4月1日に届出た。対川町南部地区県営は場整備事業に伴い、第1次調査と第2次調査の2期に分けて調査した。

③ 調査期間

第1次調査 平成元年1月17日～平成元年1月24日

第2次調査 平成2年12月1日～平成2年12月21日

④ 調査面積(調査面積／対象面積)

第1次調査 約71m²／約100,000m²

第2次調査 約274m²／約70,000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。遺構が確認されたTPについては随時拡張した。

⑥ 基本層序

①表土②旧耕作土③黄褐色粘質土(灰色混じり)④灰色粘質土(褐色混じり)⑤灰褐色粘質土(炭化物混じり)⑥灰色粘質土(黄色混じり)⑦浅黄色粘質土。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

⑦ 出土遺物・検出遺構

第1次調査

TP8

V層の黄灰色粘質土層上面で土坑2基・ピット数個を検出。弥生土器・手捏土器・中世土師質土器が出土した。弥生土器はいわゆる神西式土器や、外面に叩き目を残すいわゆるヒビノキ式土器を含むと報告された。

第2次調査

TP1

炉跡1基・集石2基・石列3列・炭化物集中箇所10箇所・土坑1基・溝1条・柱穴及びピット群を検出。



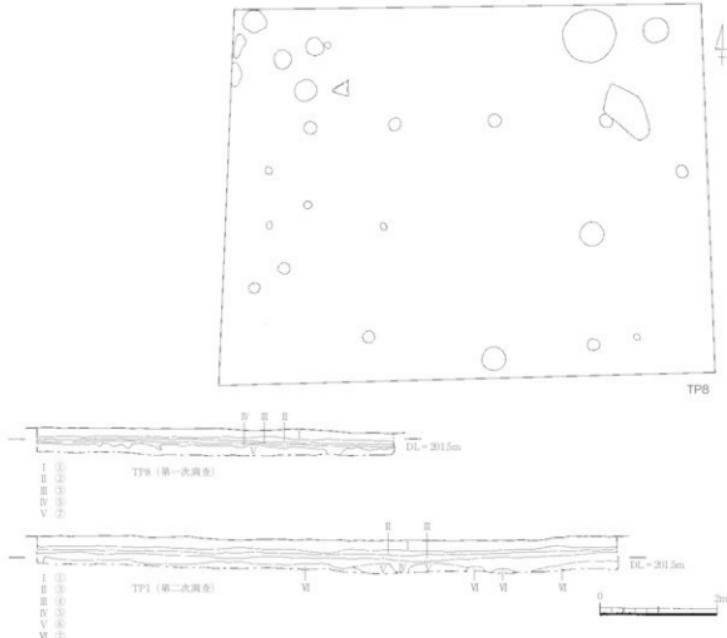
第31図 口神ノ川町スガサキ地区位置図・調査区平面図

多量のスラグや、土師器片・青磁片・銅製品・羽口・坩堝・土錘等が出土した。

SS1は区画となると考えられる石列に囲まれ、ほぼ梢円形(長径2m、短径1.3m)を呈する。出土遺物はないが周辺にスラグを多量に含む炭化物集中箇所がみられ、羽口1点・坩堝数点・鉄・銅製品が出土した。南側に位置する炉跡の付属施設である可能性が高い。TP1拡張区南側のピット群には、礎石を置く柱穴が数個あり、屋敷跡の存在を窺わせる。

⑧ 調査成果

出土遺物等から弥生時代・中世の複合遺跡と報告された。第1次調査後は出土した弥生土器は中期中葉～後期終末のものと判断したが、その後土器編年を見直しが進んでいるため再検討する必要がある。第2次調査で検出された遺構は野焼き跡と思われる。



第32図 口神ノ川町スガサキ地区TP8(第一次)平面図・セクション図・TP1(第二次)セクション図



第33図 口神ノ川スガサキ地区TP1(第二次)平面図

(16) 峰の上遺跡・峰ノ上下屋敷地区

① 調査場所

高知県高岡郡離川町峰ノ上字向屋敷／字下屋敷

② 調査区の概要

四万十川の支流若井川最上流部左岸の舌状丘陵及び河岸段丘に位置する。事前踏査により、峰ノ上字向屋敷254-1で石鏡1点・土師質土器数点・青磁2点、同字宮地577-1で備前擂鉢4点・青磁・白磁溝縁皿各2点・土師質土器1点、同字下屋敷387-2で繩文土器2点・青磁・唐津各1点を表採、1987(昭和62)年5月23日に届出た。離川町南部地区県営は場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

峰の上遺跡 平成3年11月25日～平成3年12月5日

峰ノ上下屋敷地区 平成元年9月5日～平成元年10月6日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

峰の上遺跡 約133m²／約13,6450m²

峰ノ上下屋敷地区 約256m²／約60,000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。遺構が確認されたTPについては随時拡張した。

⑥ 基本層序

峰の上遺跡①耕作土②床土③地山;峰ノ上下屋敷地区①表土②黄灰色粘質土③赤褐色粘質土④黄褐色粘質土。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

⑦ 出土遺物・検出遺構

峰の上遺跡

TP1・4・13は以前の谷、TP3は自然流路の上に整地している。

TP2

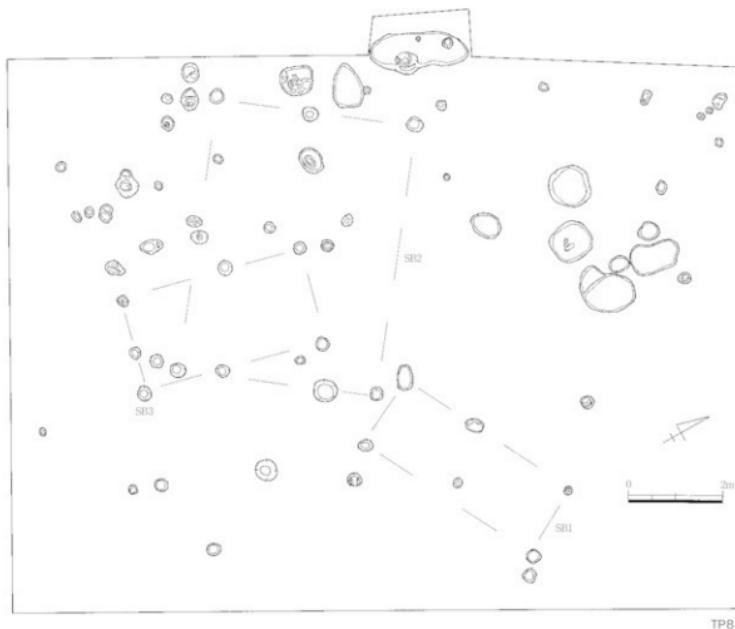
第Ⅲ層より陶質土器片が1点出土した。

TP10

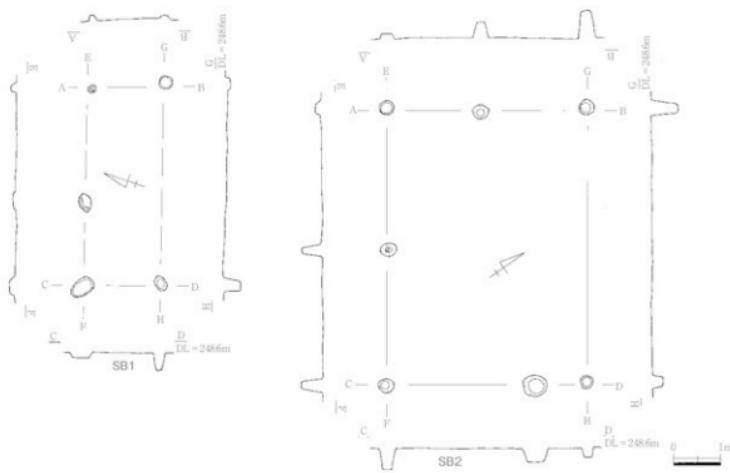
耕作土直下からピットを検出したが、検出面より深さ20～30cmと残りが悪い。土坑(本調査報告書のSK2)も検出した。耕地整理による削平のためか、遺物包含層は確認できない。SK2よりチャート剥片が2点、ピットより土師質土器片(鍋下胴部)1点・16世紀とみられる細蓮弁文を有する青磁片2点・少量の炭化物が出土した。



第34図 峰の上遺跡・峰ノ下上下屋敷地区位置図・調査区平面図



TP8



第35図 峰ノ上下屋敷地区遺構平面図(1)

TP11

ピットを検出したが、埋土は比較的軟弱である。

TP12

ピットを検出したが、埋土は比較的軟弱である。

峰ノ上下屋敷地区

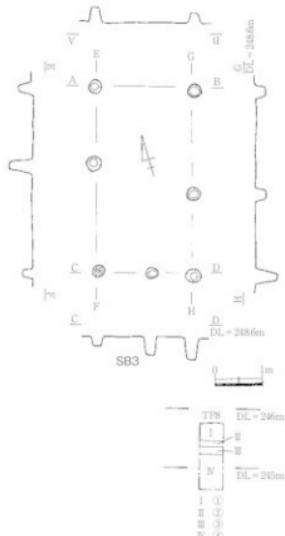
TP8

礎石を伴う多数の柱穴群を検出した。遺構検出面は表土下約20cmで、遺物包含層はすでに削平されているせいか、確認できなかった。柱穴の平面はほぼ円形を呈し、径16~52cmを測る。検出面からの深さは43~56.4cmであり、埋土は黒褐色粘質土でしつかりしていた。これらの柱穴の間隔・並び等から3棟の掘立柱建物の存在が考えられた。2間×2間が2棟、2間×1間が1棟でいずれも小規模のものであった。土師器・青磁片数片等が出土した。

⑧ 調査成果

峰の上遺跡のTP10・12周辺は小丘陵地で小字「ムカイヤシキ」と呼ばれる場所である。過去の狭地直し等のため、旧地形が改変されているが、遺構・遺物が確認されたため、本発掘調査を実施した。本発掘調査は1992(平成4)年6月22日~同年8月29日まで(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターによって実施され、縄文時代の遺物は珪質頁岩製石鏃2点・スクレイバー1点・チャート製石匙1点・チャート剥片1点・姫島産黒曜石石核1点・剥片4点が出土する。石匙は横型で、つまみ部が斜めに付いている形状が縄文後期初頭~前葉の土器を主に出土する松ノ木遺跡出土のものに類例を求める事ができる。中近世の遺物は、15世紀後半~16世紀前半の青磁・白磁・青花、室町後半の備前や土師質土器・陶磁器(肥前系等)が出土する。詳細は『峰の上遺跡』(近森泰子1993)に譲る。

峰ノ上下屋敷地区的遺構は出土遺物等から中世の建物跡であると考えられる。



第36図 峰ノ上下屋敷地区遺構平面図(2)・
柱状図

(17) 若井川神田地区・若井川カキヤマ地区・若井川西ノ前地区

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町若井川字神田／字カキヤマ／字西ノ前

② 調査区の概要

四万十川の支流若井川の河岸段丘に位置する。事前踏査により、若井川字ネコダで瓦質土器1点、同字格生田208-1で須恵器・白磁小皿猪口・備前合子各1点、同字カキヤマで須恵器2点・備前1点、同字ナギノ川402で青磁底部・土師質土器各1点・須恵器2点、同字東田Aで備前甕2点、同字東田Bで須恵器・土師質土器各1点、同字西ノ前で天目茶碗・青磁・備前各1点、同字ナロ641-2で青磁・土師質土器・備前擂鉢各1点を表探、1987(昭和62)年5月20・21日に届出た。窪川町南部地区県営は場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

若井川神田地区 平成3年11月13日～平成3年11月24日(中神ノ川地区調査期間含む)

若井川カキヤマ地区 平成元年8月21日～平成元年8月23日

若井川西ノ前地区 平成2年11月21日～平成2年12月1日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

若井川神田地区 約40m²／約37,380m²

若井川カキヤマ地区 約48m²／約70,000m²

若井川西ノ前地区 約84m²／約50,000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。

⑥ 基本層序

神田地区：①表土②整地層、自然堆積層(③アカホヤ④シルト⑤地山)。かつての沢田(湿田)が多い。カキヤマ地区：①表土②アカホヤ③砂礫。湧水するTPもあった。西ノ前地区：①表土②アカホヤ③浅黄色砂礫。

⑦ 出土遺物・検出遺構

若井川神田地区

TP9

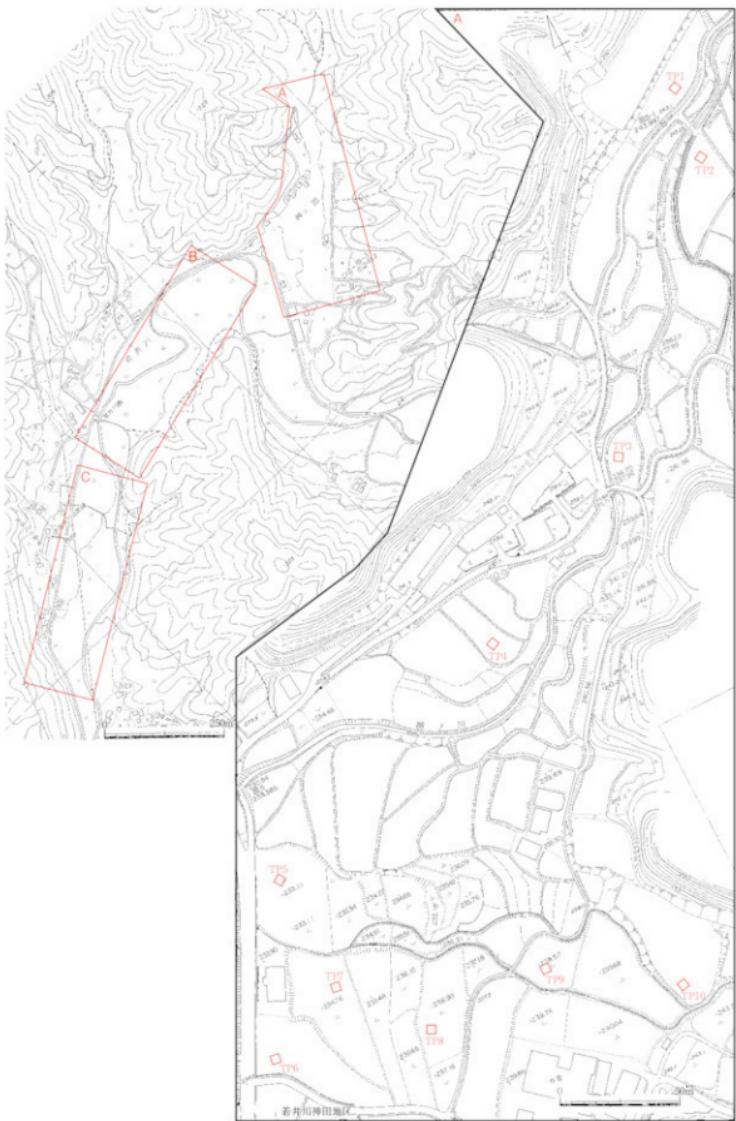
溝状のものが検出されたが、かつて整地をした時の区画のようなものである可能性がある。

若井川カキヤマ地区・若井川西ノ前地区

遺構・遺物とも確認できなかった。

⑧ 調査成果

調査範囲内に埋蔵文化財は所在しないと考えられる。



第37図 若井川神田地区・若井川カキヤマ地区・若井川西ノ前地区位置図・若井川神田地区調査区平面図



第38図 若井川カキヤマ地区・若井川西ノ前地区調査区平面図

(18) 高野大工地区

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町高野字大工

② 調査区の概要

四万十川の支流若井川左岸の河岸段丘上に位置する。事前踏査により、高野字大工93で弥生土器(甕)2点・土師質土器・備前各1点、同字樋の口で青磁2点・備前擂鉢1点を表探、1987(昭和62)年5月20日に届出た。窪川町南部地区県営は場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

昭和63年9月5日～昭和63年9月17日

④ 調査面積(調査面積／対象面積)

約150m²／約44,000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。遺構が確認されたTPについては随時拡張した。

⑥ 基本層序

①表土②旧耕作土③灰黄色粘質土④灰暗褐色粘質土⑤アカホヤ。

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP12

青磁片が出土した。

TP21

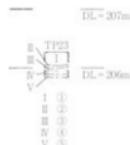
青磁片が出土した。

TP22

青磁片が出土した。

TP23

青磁片が出土した。柱穴9個・溝1条を検出した。



第39図 高野大工地区柱状図

⑧ 調査成果

出土遺物等から中世～近世の屋敷跡の存在が考えられる。遺跡の範囲は図のとおりである。



第40図 高野大工地区位置図・調査区平面図

(19) 天ノ川遺跡

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町天ノ川

② 調査区の概要

四万十川左岸の河岸段丘に位置する。窪川西部地区中山間地域総合整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

平成14年5月30日～平成14年6月12日

④ 調査面積(調査面積／対象面積)

約144m²／約47,276.8m²

⑤ 調査方法及び経過

任意にTPを設定して調査した。

⑥ 基本層序

①表土②床土③黄灰色粘土④暗褐色シルト
⑤淡褐色粘土⑥淡暗褐色粘土⑦暗褐色粘土。
⑧は遺物包含層である。

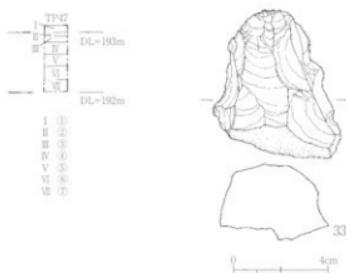
⑦ 出土遺物・検出遺構

TP47

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～Ⅶ層は自然堆積層で、第Ⅲ層から珪質頁岩の石核1点(33)・洞片約30点が出土した。縄文土器と思われる細片も出土した。

⑧ 調査成果

TP47では遺物包含層が確認されたが、周囲の試掘や、2002(平成14)年11月25日及び2003(平成15)年4月7日に実施した立会調査では遺物・遺構を確認できなかった。調査範囲内では遺物包含層の多くは削平されている可能性が強いが、周辺に遺跡の中心部が所在する可能性がある。



第41図 天ノ川遺跡位置図・柱状図・出土遺物実測図



第42図 天ノ川遺跡調査区平面図

(20) 川口遺跡

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町川口

② 調査区の概要

四万十川右岸の河岸段丘上に位置する。川口遺跡は1978(昭和53)年3月、荒木力氏が川口字五十石の国道381号線北斜面で電柱埋設工事中に縄文土器(34~55)を確認して発見した。窪川町南部立西地区県営は場整備事業に伴い調査した。

なお、調査後の1994(平成6)年7月28日~10月9日、郷土考古学研究家田辯猛氏によって縄文後期初頭～中葉末の型式と思われる土器が表採された。(56)は紡錘状の沈線の内側に刺突による文様を施したもので、波状口縁の頂部に紡錘状の沈線を施す中津式の影響を窺うことができる。上流側で表採されたということである。(57~59)は2本沈線またはその間に磨消縄文が施されているところから中津式または宿毛式と考えられる。(61)は継位の多条沈線が施されるが、松ノ木遺跡で類似する文様の土器が出土しており、松ノ木式に相当する可能性が示唆されている。(62)は口縁部の直線化された渦巻文や橋状取手から鐘崎式であると判断できる。(63)はやや厚い口縁部に沈線による「く」の字型の文様が施される。踊鷺山遺跡・三里遺跡でも同様の土器は出土しており、宿毛式または三里式と位置付けられる。口縁部を肥厚する点は九州の市来式・北久根式の影響を受けている可能性がある。(64・65)は横に細長い区画があり、なだらかな山形を形成する。伊吹町式に相当するが、その中でも古段階であるという試論もある。石錐(67)、石錐(68・69)、叩石も表採されており、狩猟・漁労が生業であったことを窺わせる。(67)は珪質頁岩製である。剥片では珪質頁岩を中心にチャート・姫島産黒曜石のものもみられた。

③ 調査期間

平成5年10月4日～平成5年10月29日



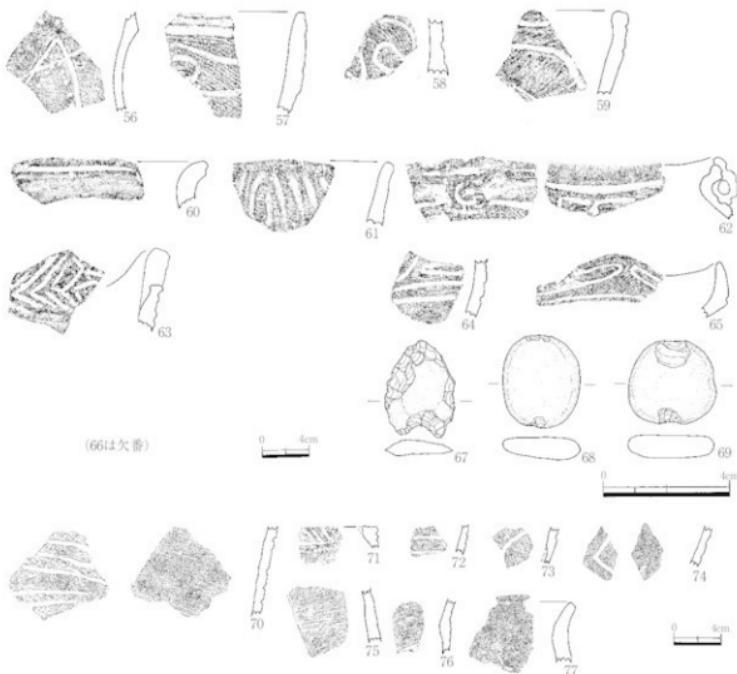
第43図 川口遺跡位置図



第44図 川口遺跡調査区平面図



第45図 川口遺跡出土遺物実測図(1)



④ 調査面積(調査面積／対象面積)

約419m²／約50,000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTP設定して調査した。

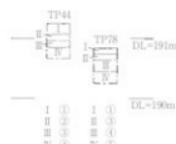
⑥ 基本層序

①耕作土②盛土、自然堆積層(③黄褐色粘質土④青灰色粘質土⑤黄褐色粘質土)。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP16

列状に並ぶ石組みを検出した。



第46図 川口遺跡出土遺物実測図(2)・柱状図

TP18

ピットを1個検出した。

TP44

第Ⅲ層より縄文土器片11点が出土した。(70)は2本沈線による磨消縄文を有する。(74)は直角に曲がる沈線を有する。弥生土器片4点の出土も報告され、叩き目が残るものもみられた。

TP78

第V層上面より溝が1条検出されたためTPを拡幅したが、遺構面が消滅して周辺の状況は確認できなかった。第V層からは縄文土器片10点、姫島産黒曜石の剥片2点が出土した。溝の埋土からも土器の小片が出土した。

TR92

第II層より中世の擂鉢片が1点出土した。

⑧ 調査成果

上に述べたもの以外に(71・72・73・75・76・77)の縄文土器が出土した。(70)は宿毛式、(74)は松ノ木式に相当すると思われる。叩き目の残る土器については、弥生時代後期～古墳時代前葉の間で時期を検討する必要がある。

(21) 越ノ下遺跡・秋丸地区

① 調査場所

高知県高岡郡霧川町秋丸

② 調査区の概要

四万十川右岸の河岸段丘に位置する。越ノ下遺跡は、1994(平成6)年1月18日に踏査した際、叩き目が残る弥生土器と思われる土器片を表探して発見した。霧川町南部立西地区県営は場整備事業に伴い調査した。調査期間中に弘瀬トンネル南方の豆畑で弥生土器10点を表探した。

③ 調査期間

平成7年10月2日～平成7年11月9日

④ 調査面積(調査面積/対象面積)

約603m²/約50,000m²

⑤ 調査方法及び経緯

調査時はⅠ～Ⅲ区に分けていたが本報告書では統一し、TP番号も通し番号とした。

⑥ 基本層序

耕作土(①灰色粘土)盛土(②黄褐色粘土③褐色土)自然堆積層(④赤黄褐色土⑤黄褐色粘質土)。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP13

ピットを1個検出した。

TP46

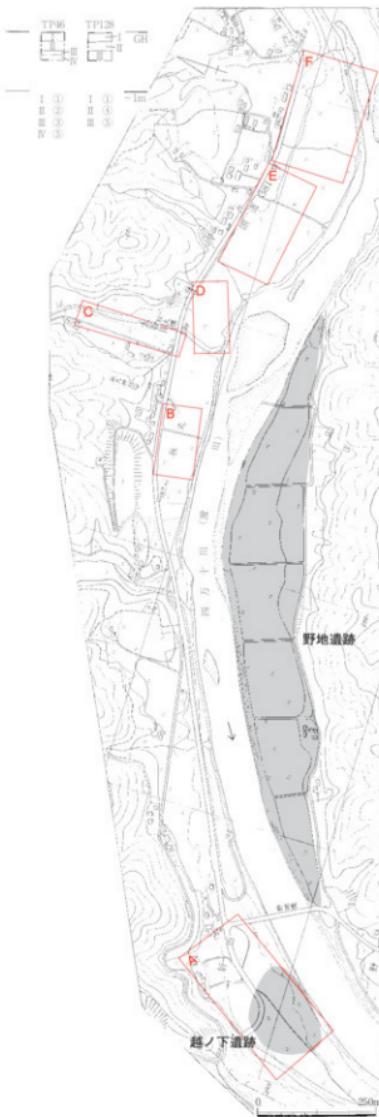
第Ⅲ層の盛土から縄文土器片2点、弥生土器片12点が出土した。

TP128

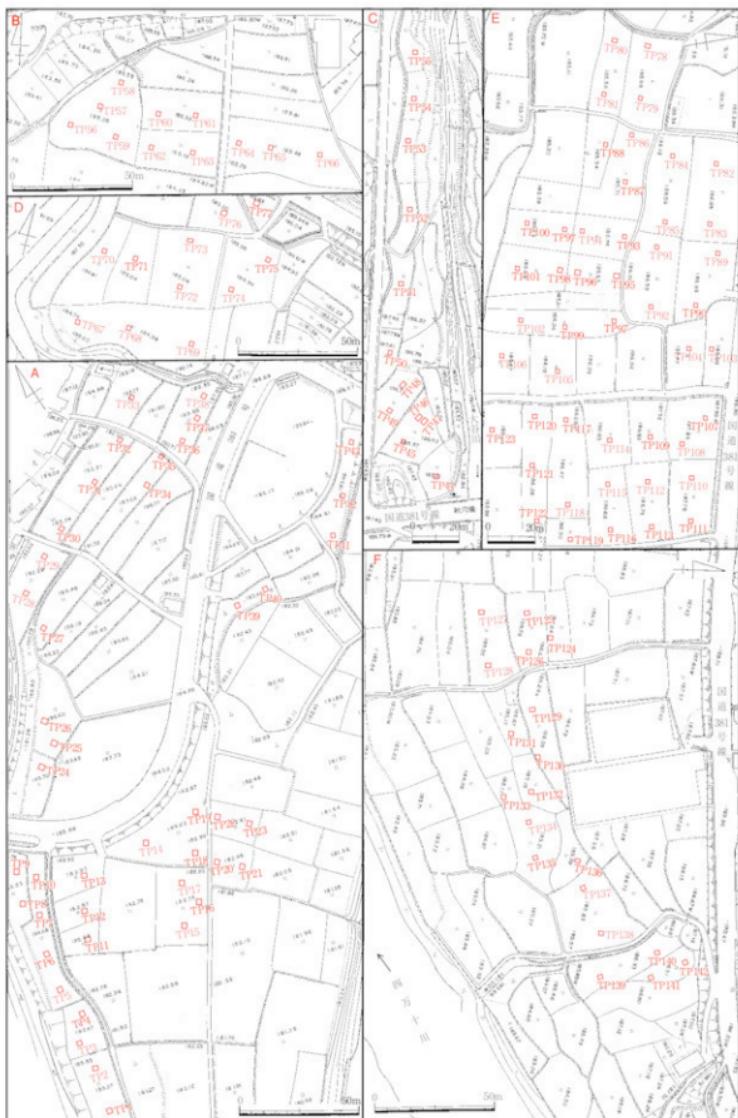
第Ⅲ層より弥生土器片9点が出土した。

⑧ 調査成果

調査区は遺跡縁辺部であると思われる。



第47図 越ノ下遺跡・秋丸地区位置図



第48図 越ノ下遺跡・秋丸地区調査区平面図

(22) 家地川城跡

① 調査場所

高知県高岡郡窪川町家地川

② 調査区の概要

四万十川とその支流家地川川の合流点周辺の河岸段丘上に位置し、家地川城跡の縁辺部であるが、範囲を一部含む。窪川町南部立西地区県営は場整備事業に伴い調査した。

③ 調査期間

平成6年12月5日～平成6年12月12日

④ 調査面積(調査面積／対象面積)

約551m²／約40,000m²

⑤ 調査方法及び経過

任意のTPを設定して調査した。調査時はI・II区に分けていたが本報告書では統一し、TP番号も通し番号とした。

⑥ 基本層序

①耕作土②赤黄褐色土③黄褐色粘質土

⑦ 出土遺物・検出遺構

TP20

備前焼(甕)が1点出土した。

TP65

ピットを2個検出した。

TP127

15世紀後半とみられる青磁稜花皿の口縁部片が出土した。

⑧ 調査成果

調査範囲内に埋蔵文化財は所在しないと考えられる。



第49図 家地川城跡位置図・調査区平面図

2. 調査に至る経緯

雀川町の農地は約1,800haと中山間地域としては比較的広い面積を有し、太平洋に面した南東部の興津・志和地区を除き、四万十川水系の流域に大半が所在する。基幹産業の農業の振興を図るために場整備を重要事項として取り組み、農業者の意向を踏まえながら計画的に進めている。雀川町北部県営は場整備事業・仁井田地区県営は場整備事業・雀川町南部地区県営は場整備事業・雀川西部地区中山間総合整備事業・雀川町南部立西地区県営は場整備事業・県営扱い手育成基盤整備事業等多くの事業を進めてきたが、四万十川本流とその支流である仁井田川流域の農地からは縄文・弥生時代の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、は場整備などの開発行為が行われる場合は、周知の埋蔵文化財包蔵地はもとより、地形的・歴史的要件等を考慮して、未周知の遺跡が存在する可能性が考えられる場所では埋蔵文化財の保護と開発事業との調整を図るために試掘確認調査を実施している。

今回調査を実施した根々崎地区では、水稻を主に生姜、ニラなどが栽培されているが、小幅の農道や小区画のは場、所有農地の地域内分散などが生産性向上の大きな妨げになっているため、近代農業に即したは場形態に改良するべく雀川町と地元農業者が農林水産の補助を受け7.3haのは場整備を行うこととなった。事業名は中山間地域総合整備事業(根々崎工区)は場整備事業である。

開発区域は雀川町のほぼ中央部、四万十川本流とその支流である仁井田川との合流点に位置し、河川によって形成された河岸段丘上に位置する。弥生時代の遺物が散布している遺跡として周知されているカマガ淵遺跡の範囲内であり、付近は遺跡の密集地域であること等から雀川町の弥生時代の中心地である可能性も高いところであった。特に遺跡及び周辺の埋蔵文化財について把握するための調査が必要な地域であった。このため、平成13年度に雀川町教育委員会が調査主体となり高知県教育委員会の指導のもと試掘確認調査を実施するに至った。

3. 調査の経過

2001(平成13)年度の団体営中山間地域総合整備事業は場整備事業は、根々崎工区については工区の北側から順次工事に着手する計画となっており、工区の北半分の農地については工事計画年度の作付けを休止して工事を実施し、工区の南半分については工事計画年度も作付けを行い、収穫後に工事を実施することとなっていた。このため、試掘調査も調査区の北半分については年度当初から実施し、南半分については収穫後に行うこととした。

調査区北半分の試掘調査は当初、開始後1ヶ月では場整備事業が実施される予定であったため期間内終了を最優先して調査した。2001(平成13)年5月14日～同年6月15日まで実施されたが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外で縄文早期～後期の遺物包含層が確認されたため、その周辺は新発見の遺跡であると判断し、遺跡名は根々崎五反地遺跡とした。同遺跡の性格等を確認するための調査は同期間内に実施されたが、2001(平成13)年10月9日～同年10月13日、同区域の工事に着手する際にも立会調査を実施した。今回の調査では根々崎五反地遺跡の範囲に該当する部分をI区とした。更に、試掘調査では遺物が確認されなかった場所でも弥生時代の土坑群と住居跡が確認された。周



第50図 根々崎五反地遺跡・カマガ瀬遺跡調査区平面図

の遺構については工法変更等によって保護することとしたが、貴重な遺跡の性格を把握するため、土坑群の確認された場所はⅡ区として2001(平成13)年10月9日～同年10月13日に、住居跡が検出されたⅢ区では2001(平成13)年10月9日～同年11月19日にそれぞれ確認調査を実施した。

調査区南半分の試掘調査は2001(平成13)年10月9日～同年11月19日に実施したが、比較的広範囲で弥生時代の遺物包含層が確認された。そこで東西に細長いTRを2箇所設定して確認調査を同期間に完了した。2つの調査TRをⅣ区・Ⅴ区とした。なお、両調査区とも遺構を確認することができたため、2001(平成13)年11月20日～2002(平成14)年1月31日に本発掘調査を実施している。

第2節 遺跡の地理的・歴史的環境

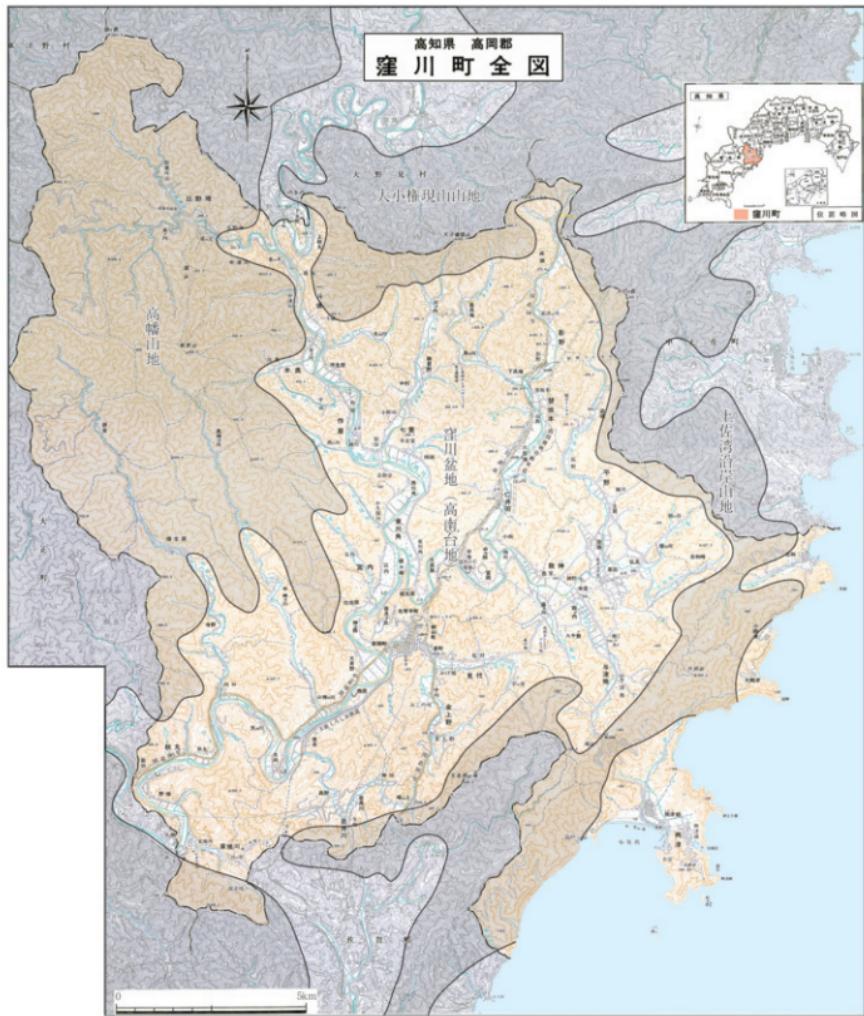
1. 遺跡の地理的環境

雀川町は高知県中西部に所在する。同町は地質学的には仏像構造線を境界として秩父帯と接する四万十帯に属する。四万十帯は中筋構造線を境に白亜記層が分布する北帯と第三紀層が分布する南帯にわかれれるが、雀川町は北帯に属する。四国ではこれらの地質帯はその形成過程が原因で中央構造線とほぼ平行に分布しており、また地質構造の影響を受ける山脈も、同様の方向に連なっている。さて、県西部の四万十帯北帯は白亜紀でも比較的古い時代に形成され北側に分布する新莊川層群と、比較的新しい時代に形成され南側に分布する大正層群に分類される。この2つの層群の境界は横S字型に屈曲しているが、これは四国西南部が形成される過程において東西の方向から強い營力を受けたからであると考えられ、四万十川の流路等、西南四国の地形に大きな影響を与えていたと思われる。大正層群はさらに断層によって下津井層・野々川層・中村層・有岡層といいくつかのマランジュに分かれるが、雀川町の大部分は野々川層が分布している。野々川層は前述した東西方向の營力を受けており、走向は中央構造線の向きよりさらに斜めに傾いた方向となり同町の地勢に影響を与える。

雀川町の地形は複雑であるが、基本的には地質構造の影響を受ける。町域の北西部を占める高幡山地(鈴ヶ森－枝折山山地)と土佐湾沿岸山地(火打ヶ森－六川山山地)は野々川層の走向とほぼ同じ方向に峰を連ねる。町を流れる四万十川も、中流域では野々川層の走向と同方向に流れるが、現在の片坂を中心とした地域が隆起をしたため流路を北西に変え隆起速度の遅い高幡山地を先行侵食しながら北幡地方に流れる。雀川町は土佐湾沿岸山地(火打ヶ森－六川山山地)の東麓で海岸と接するが、沈降海岸であるため海岸平野は狭く、海沿いの陸路は発達しなかった。このため、四万十川流域の河岸段丘がこれにかかる陸路として利用されてきた。四万十帯には薄いチャート層がみられることがあるが、野々川層に限ると砂岩と泥岩のターピダイト互層が大部分を占めるため、剥片石器の石材が豊富であるとはいえない。

雀川町の遺跡は前述したように、四万十川本流に集中する。同じ四万十川流域でも大正町から中村市の山間部までは縄文時代の遺跡がほとんどで、中村市の平野部は弥生時代以降の遺跡の割合が高いのが特徴であるが、雀川町は縄文・弥生両時代の遺跡が分布する。また、四万十川右岸に合流する支流の流域には遺跡はほとんど所在しない。これはその流域が起伏のある高幡山地(鈴ヶ森－枝折山山地)であることに起因すると思われる。これに対して、四万十川左岸に合流する仁井田川や若井川は比較的起伏が緩やかな地域を流れるためか、遺跡が若干分布する。

2001(平成13)年に発掘調査を実施した、根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡は四万十川と仁井田川の合流地点に発達した河岸段丘上に位置する。平坦な地形であるが、仁井田川によりに該当する東側の標高がやや高い。また、根々崎五反地遺跡とカマガ淵遺跡の中間からカマガ淵遺跡北部にかけて、3条の溝状の窪地が認められるが、これはかつて仁井田川の溢流が直接本流の四万十川に流れ込んだ跡であると思われる。



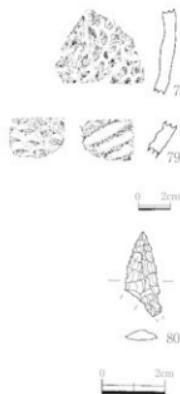
第51図 雨川町地形図

2. 遺跡の歴史的環境

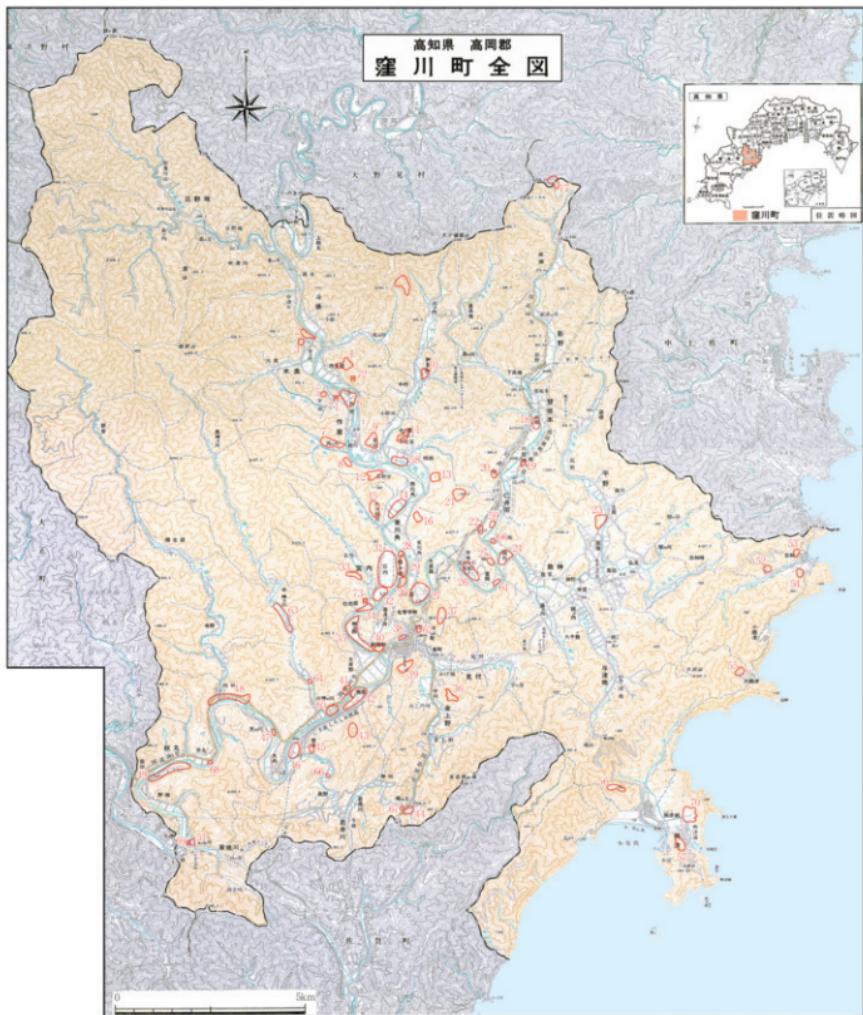
鹿川町の歴史を主に考古学資料から概観する。現在の遺物で最も古い縄文時代早期の土器が出土するのは野地遺跡・根々崎五反地遺跡である。野地遺跡では高山寺式土器(78・79)が表採された。(79)は裏面に斜行沈線が施されている。沈線の断面はU字状である。沈線と沈線の間は平坦で、間隔は沈線の幅とほぼ同じである。高山寺式の編年については細分方法が複数提唱されているが、裏面の沈線間隔が長くなる傾向にある点は共通する。この土器については沈線間の幅が長くなる前の段階であると思われる¹。高山寺式土器との共伴関係については不明だが、石錐(サヌカイト製)(80)・剥片(チャート・珪質頁岩)・叩石が表採された。根々崎五反地遺跡では高山寺式に後続する可能性が強い穂谷式並行と考えられる土器や、厚手無文土器・条痕文土器が出土するが、詳細は後述する。

縄文時代前～中期の遺跡はほとんど該当するものはないが、根元原遺跡では1951(昭和26)年畑の耕作中、両頭石斧が字ハッ頭で表採されている。両頭石斧は関東・中部地方でよく出土する分銅形石斧に似る。分銅形石斧は縄文中期末～後期に盛行する石斧で、土掘具と考えられているが、両頭石斧は先端が鋭い点が異なる。石材はサヌカイトである。形状が有舌尖頭器に酷似した石槍が表採されたことも報告されている。石槍はチャート製で長さ12cmであったということだが現在は所在不明である。その他縄文土器片やチャートの剥片が表採されたことが報告されている。

縄文時代後期には遺跡数が増加する。川口遺跡では中津式～伊吹町式の土器片等が出土するが、詳細については、本書中「川口遺跡」に譲る。仕出原遺跡では1951(昭和26)年、土地改良事業実施の際、字ホッキヨー田で注口土器が表採された。ほぼ完形であるが、注口部は欠損する。波状口縁を呈し、4箇所の頂部の内、対角をなす2箇所に孔が穿たれる。交差しない沈線による鉤型の区画が施されるところから中津式と考える説もある²。色調は黄褐色で厚手である。胎土には石英・長石等の砂粒を含み焼成は良好である。部分的に赤い塗料の付着が残る。打製石斧が表採されたことも報告されている。神ノ西遺跡でも宿毛式に相当すると思われる土器片等が出土するが、詳細については本書中「神ノ西遺跡」に譲る。根々崎五反地遺跡でも宿毛式～松ノ木式と考えられる土器等が出土するが、詳細は後述する。縄文時代晩期の遺跡は現在のところ確認できない。詳細な時期を判断できる遺物を出土しない遺跡としては以下の遺跡が挙げられる。平申遺跡・富岡地区・西原遺跡・峰の上遺跡・天ノ川遺跡・越ノ下遺跡については本書中の各遺跡の発掘結果を述べる頁に譲る。浜の川(仁井田)遺跡は1966(昭和41)年9月に郷土考古学研究家木村剛朗氏によって発見された遺跡で、チャート製石錐4点、チャート製石錐1点の他、チャート・頁岩・姫島産黒曜石の剥片が表採された。琴平遺跡では石錐が2点表採された。若井遺跡ではA地点で石斧、B地点で縄文土器片が表採された。



第52図 野地遺跡出土遺物実測図



第53図 窪川町遺跡地図

表2 富川町遺跡・出土地点・青銅器所蔵場所一覧

遺 跡				出土地点・所蔵場所
1 川の内城跡	21 茶臼山城跡	41 篠ノ原城跡	58 沖代地区	
2 米の川城跡	22 浜の川遺跡	42 西原遺跡	59 浜の川地区	
3 入ル谷山遺跡	23 余路城跡	43 西原城跡	60 小向地区	
4 市生原城跡	24 向川遺跡	44 峰の上遺跡	61 富岡地区	
5 小コノシ遺跡	25 中郷城跡	45 若井遺跡A地点	62 樺山地区	
6 作屋遺跡	26 平事遺跡	46 若井遺跡B地点	63 中神ノ川地区	
7 西の川口遺跡	27 桁元原遺跡	47 天ノ川遺跡	64 口神ノ川一町切地区	
8 西の川城跡	28 桁ノ崎五反地遺跡	48 川口遺跡	65 口神ノ川スガサキ地区	
9 影山城跡	29 カマガ淵遺跡	49 鶴ノ下遺跡	66 高野大工地区	
10 勝賀野城跡	30 桁ノ崎遺跡	50 野地遺跡	67 峰ノ上下屋敷地区	
11 本在家城跡	31 宮内遺跡	51 家地川城跡	68 秋丸地区	
12 志和分城跡	32 筒ノ才能遺跡	52 志和城跡	69 家地川地区	
13 柳瀬城跡	33 宮内城跡	53 志和遺跡	70 興津地区	
14 西川角遺跡	34 仕出原遺跡	54 次ヶ谷遺跡	71 河内神社	
15 青木城跡	35 神ノ西遺跡	55 大鶴津遺跡	72 高加茂神社	
16 東川角城跡	36 金ノ野城跡	56 的尾地城跡	73 高岡神社	
17 白皇城跡	37 天一城跡	57 興津浦城跡		
18 六反地遺跡	38 琴平遺跡			
19 泷ノ川遺跡	39 富川城跡			
20 山の上城跡	40 古美山城跡			

弥生時代の遺跡の中で根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡については後述し、作屋(松葉川中学校校庭)遺跡・沖代地区・辻ノ川遺跡・浜の川地区・小向地区・宮内遺跡・神ノ西遺跡・西原遺跡・口神ノ川スガサキ地区・越ノ下遺跡・秋丸地区については本書中の各遺跡の発掘結果を述べる頁に譲る。向川遺跡は1992(平成4)年実施の分布調査で弥生時代の遺跡であると報告された。樺山地区(現:樺山町9番)では旧共同墓地周辺の高台を掘り崩してできた廃土から小形蛤刃石斧が表採された。西川角遺跡・筒ノ才能遺跡・仕出原遺跡では分布調査によって弥生土器が表採されたことが報告されている。海岸部の遺跡としては志和遺跡等が上げられる。1951(昭和26)年頃志和中学校校庭拡張工事の際、校舎西側の高台を掘り崩した土の中から太型蛤刃石斧が出土した。興津地区でも磨製石斧が表採されたことが報告されており、1994(平成6)年1月11日の分布調査では弥生土器片が確認された。

富川町は県内最多の銅戈・銅矛出土地あるが、銅戈については県内5口中3口・銅矛については県内53口中19口が出土する。銅戈は舶載品またはそれに近似する細形銅戈と、仿製品を形狀等で細分した中細形・中広形・広形・大阪湾型銅戈の計5種に分類できる。富川町のものはいずれも中細形だが、両側刃が平行に近いものをa類、先から間に近づくに従い刃部が曲線を描いて幅が狭まり、間が左右に張り出すようになるものをb類、さらにその度合いが強まるものをc類と細分する方法があり、この細分法では町内の銅戈はa類・b類に該当すると判断している。銅矛も細形・中細形・中広形・広形に分類でき、時代が下がるに従い全長・幅長が長くなり、鎬・耳・節・帶が簡略化される傾向がみられる。富川町のものは中広形・広形のみであり、中広形I式→中広形II式→広形I式と変遷する。富川出土の青銅器は土器編年では、中細形銅戈a類は中期後葉、中細形銅戈b類は後期初頭、中広形銅矛は中期末～後期初頭、広形銅矛は後期に相当すると思われる。以下、富川町出

土と見られる銅戈・銅矛について個別に記す。

(1) 岡内英吉氏所蔵の中細形銅戈 a 類 1 口

岡内氏の前所有者は米奥在住していたそうであり、当人談によると子供の頃には同家にこれを含めて3口あったようである。この銅戈については両面の鋒の着き方が異なることから、片面だけ他の青銅器と接触した形で埋設されたと想定し、後述する河内神社及び高加茂神社所蔵の銅戈と併せて3口一括で米奥またはその周辺から出土したとする説もある³。

(2) 河内神社所蔵の中細形銅戈 a 類 1 口・中広形銅矛 I 式 1 口

河内神社はもとの熊野神社を合祀するが、「南路志闇国之部下巻」には熊野神社に「鏡一鉢一石玉一」が宝物として所有されたことが記されており、銅戈については後に神社所有となった可能性がある。河内神社は一度焼失し、後に掘り起こされた青銅器が宝物となっている。銅戈は焼け、銅矛は焼けなかったが、焼失時の倒壊で折れ穂部の一部を残すのみである。

(3) 高加茂神社所蔵の中細形銅戈 b 類が 1 口、中広形銅矛 II 式が 6 口(内 1 口は袋部のみ残存)

「南路志闇国之部下巻」によると、後述する高岡神社では1657(明暦 3)年に根々崎遺跡で銅矛 5 口が出土する以前には、作屋村の銅矛 5 口を使って祭礼が実施されたが、いつの間にか紛失したと記されている。高加茂神社の銅矛の内 5 本はこの銅矛であるという説もある。

(4) 武田茂水氏所蔵の銅矛 1 口

現在、前述の高加茂神社の総代をされている武田茂水氏の兄が60年前に自宅の裏山の谷状地形を呈する場所から掘り出したものである。袋部を欠損するため、高加茂神社に奉納していたものと同一個体であるという説がある。

(5) ホコノコシ遺跡出土の中広形銅矛 II 式 1 口

1943(昭和 18)年にはホコノコシ遺跡において開墾の途中で出土した。岡本健児氏が 1944(昭和 19)年に実況調査をした折に、土地の古老人に次のような伝説を聞かされたということである。「ホコノコシ山に向かいて右に神谷あり、その右の峰に古くから神様があつて、今もその跡が残る。その神様が向い部落の市生原のお宮に迎えられ、上空を飛びでお出での時その途中でホコを落としたのでホコノコシといふ。」この銅矛は関部・袋部を欠くが、前述の高加茂神社には銅質・色調が同じ銅矛の袋部のみが 1 口所蔵される。伝説の内容も合わせて、この銅矛と高加茂神社の銅矛 1 口は元来一体のもので、高加茂神社の銅矛は全てホコノコシ遺跡から出土したもので、1943(昭和 18)年に出土したものは掘り残しであるという説もある。また、前述の武田氏が銅矛を発見した場所が、高加茂神社所蔵の銅矛が元来埋納された場所であるという説もある。

(6) 根々崎遺跡(高岡神社所蔵)出土の中広形銅矛の II 式 4 口・広形銅矛の I 式 1 口

前述のとおり「南路志闇国之部下巻」「仁井田之社御宝物記」で、かつては作屋村の銅矛を使って祭礼が実施されたが、いつの間にか紛失し、その後、1657(明暦 3)年に神崎村の新田開発のため根々崎村金ガ淵まで井溝を掘った際に現在の銅矛が一括して発見されたと記す。そして、これは以前に祭礼で使われたものが埋められたものであると考え、再び神宝として奉納されるようになったということである。これらの銅矛は現在でも高岡神社の秋祭りの神幸で使われているため傷みは激しく、鉄片で補修している。

(7) 西の川口遺跡出土の中広形銅矛Ⅱ式1口・広形銅矛Ⅰ式4口

1935(昭和10)年に西の川口遺跡で水路工事中、地下約18mの深さから出土した。4口の広形銅矛の鉢を全て南に向けて並べ、その3口目と4口目の間に袋部を南に向けた中広形銅矛を挟み、5口とも耳を上に向かた状態で出土した。重なった5口の銅矛は端から端までが126cm、幅が最大20cmであった。同遺跡では1957(昭和32)年にも銅矛出土土地から約44m離れた水田から石包丁と弥生土器(神西式)が出土した⁴。1970(昭和45)年には岡本健児氏が発掘調査を実施し、銅矛を埋納したとみられる袋状堅穴の一部が確認された。残っていた埋納穴の底部は径92cm、上部径126cmだが、上部より少し下は計62cmでやや窄まっている。深さは1.04mである。

(8) 元小野川熊野三所権現所蔵の銅矛1(2)口

『南路志』によると、小野川の熊野三所権現には元2口の銅矛が奉納されていたが、その内1口の広形銅矛Ⅰ式は長崎梅尾氏が保有している。他の1口は不明である。

雀川町内では古墳の存在は確認されていないが、次に挙げる遺跡では、古墳時代の遺物が確認されている。カマガ淵遺跡については後述し、神ノ西遺跡・西原遺跡・口神ノ川スガサキ地区・川口遺跡については本書中の各遺跡の発掘結果を述べる頁に譲る。大鶴津遺跡では、畿内からの搬入土器である庄内式壺が1点出土した。時期は古墳時代初頭である。根元原遺跡は字ハッ頭の繩文時代石器出土地点が知られているが、産土神大元神社の宮ノ森の下、字森ノ下では、1958(昭和33)年頃、河川より5mほど離れた農地で土取工事中に赤土の部分を30~40cm掘った場所で古墳時代の土師器が発見された。土師器は赤褐色で焼成は堅く、馬場末式と報告されている壺・器台・手捏ね土器が纏って出土したことから、祭祀遺跡であると考えられる。四万十川支流が本流に合流する地点の近くにはこのような祭祀遺跡が多いが、本流増水時に支流が氾濫することが多いため河の神を祭ったということが考えられる。手捏ね土器には初の圧痕が認められることから、農業に携わった人々が居たことが考えられる。越ノ下遺跡では叩き整形が残る弥生土器片が表採された。笠ノ才能遺跡では須恵器片が表採されたことが報告された。当時期の遺跡は笠ノ才能遺跡を除き須恵器出現期以前の遺跡であり、前半までのものがほとんどである。

古代には、826(天長3)年に岩本寺の全身とされる福円溝寺が創設され、その時にはすでに高岡神社も創設され、興津八幡宮も939(天慶2)年に創設されているように社寺の建立の記録等はあるが、雀川における当該期の遺跡は少ない。古代の考古学資料としては吹ヶ谷遺跡で平安時代後期の須恵器がほぼ完形で発見された。小形の壺で切り離しは範切りによるものと見られる。

中近世の記録に残っている埋蔵文化財としては、『皆山集』に興津で出土した中国錢とみられる古錢の入った壺に関する記述があるが詳細は不明である。発掘調査で遺物が出土した入ル谷山遺跡・沖代地区・西原遺跡・中神ノ川地区・口神ノ川スガサキ地区・峰の上遺跡・峰ノ上下屋敷地区・高野大工地区・川口遺跡・家地川地区については本書中の各遺跡の発掘結果を述べる頁に譲る。西川角遺跡では青磁・土師質土器が、平串遺跡では青磁・白磁・土師質土器が表採されている。中世城跡では、室町時代後期までに台頭してきた豪族仁井田五人衆に関連するものが多く、雀川(茂申山)城跡・天一(天日山)城跡は雀川氏、興津浦(与津)城跡・本在家(野口)城跡・青木番城跡・的尾地(与津の地)城跡・東川角(東川津野)城跡・山の上城跡は東氏、影山(三滝)城跡・川の内(川野内)城跡・

茶臼山(川原番)城跡・勝賀野城跡は西氏、西原城跡・奈路(中江・新在家)城跡・鶴ノ巣城跡は西原氏、志和城跡・志和分城跡は志和氏の居城及び配下の城であったとされる。また、米の川周辺を拠点とした南部氏の居城であったのは米の川城跡である。仁井田五人衆は津野氏そして一条氏の支配を受ける。中越城跡は一条氏臣安並氏に与えられた城であると伝えられる。その後窪川の豪族は長宗我部氏の時代に滅んでいく。近世になり山内氏が土佐藩主となると家老林(窪川山内)氏が封ぜられ、吉浜山城を中心に城下町が形成された。仁井田郷は承応年間(1652~1655)頃より新田開発が進められ、根々崎村は「南路志」によると寛文年間(1661~1673)頃、窪川山内氏三代の勝政によって開墾される。1822年(文政5)以降、新規郷土制度による入植で開発は一層進む。

- 註1　(関根哲夫1988)では高山寺式古段階に相当する。(和田秀寿1988)では高山寺式II式に相当する。
- 2　この胴部に施された鉤状の区画文については、松ノ木式における同様の文様に影響を与えたと考え、さらにその祖形を小松川式に求める考え方もある。
- 3　(佐々木馬吉1987)では地元の古老子として、明治初め頃米の川部落から3口1組で出土した銅戈の内1口が高賀茂神社、1口が作屋河内神社、1口が民間で保管されている旨を記している。
- 4　(岡本健児1959)では西の川口遺跡の2出土地点をそれぞれ七里遺跡・作屋遺跡と記述している。同書中の「作屋遺跡」と現在の「作屋遺跡」は別の遺跡である。

第Ⅱ章 調査方法と成果

第1節 調査区北部の試掘調査

1. 調査の方法

1~2×2 mのTPを任意に47箇所設定し、表土層を重機により除去後、人力を併用して遺構・遺物の発見に努め、基本層序を確認し、図面・写真により記録を残した。

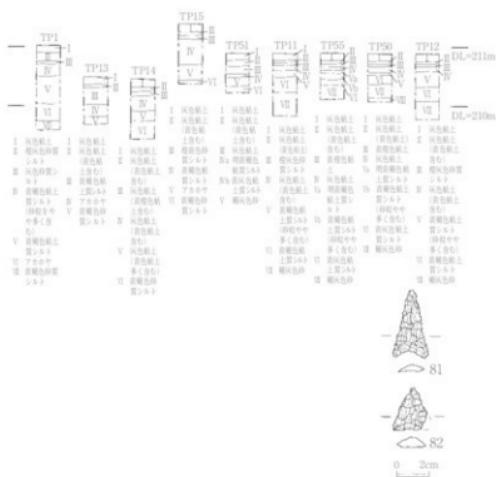
2. 調査の成果

TPI

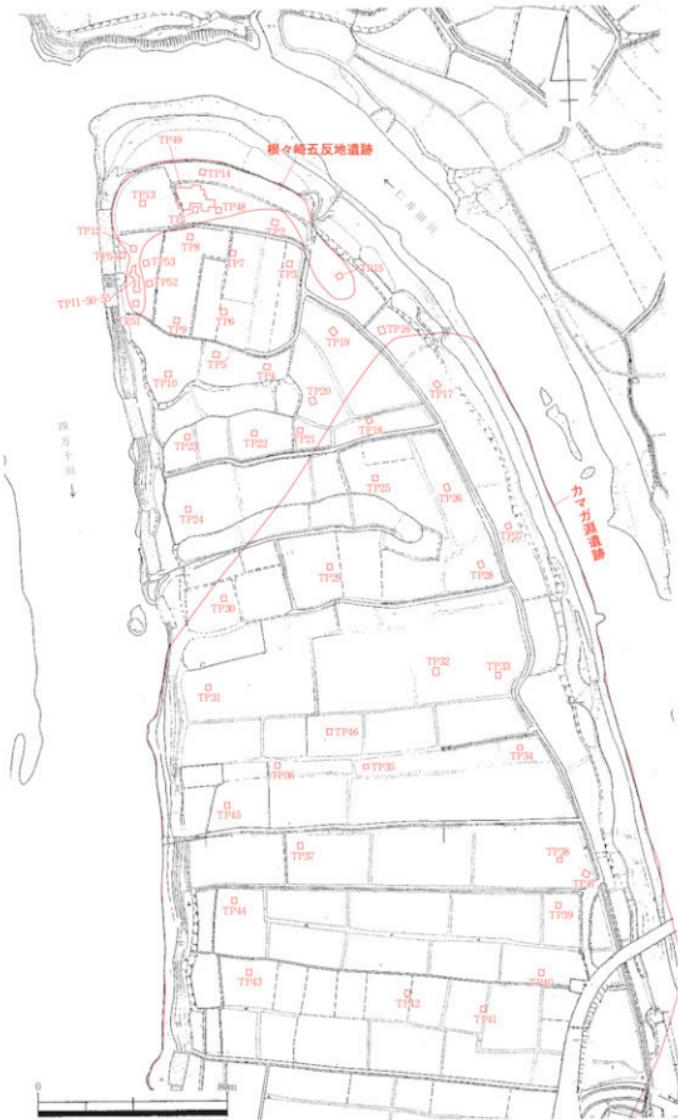
第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層の盛土から縄文土器が出土した。第Ⅲ層も盛土である。第Ⅴ層からは縄文土器が出土した。

TPU

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は床土、第Ⅳ層は旧耕作土である。第Ⅴ層から縄文土器21点、チャート剥片26点、珪質頁岩剥片4点が出土した。



第54図 北部試掘調査土層柱状図・出土遺物実測図



第55図 北部試掘調査調査区平面図

TP12

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は床土である。第Ⅳ層は旧耕作土で、縄文土器26点、石鏃は赤色頁岩製1点(81)、姫島産黒曜石製1点(82)、剥片はサスカイト1点、珪質頁岩4点、赤色頁岩1点が出土、V層はチャート剥片1点、珪質頁岩剥片1点が出土した。

TP13

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は床土である。第Ⅲ層から縄文土器1点、珪質頁岩石核1点、姫島産黒曜石剥片1点が出土した。

TP14

第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ～V層盛土である。第Ⅳ層から縄文土器1点が出土、第VI層から表裏条痕を有する土器口縁部が出土した。

TP15

第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層床土である。第Ⅲ層は珪質頁岩製スクレイパー1点が出土、第Ⅳ層は縄文土器8点が出土した。

TP38・TP47は土坑やピットが検出されたが、埋土が灰・黄・黒褐色の混合で締まりがなく新しいものとみられた。上記のTP周辺をI区として確認調査を実施した。

第2節 調査区南部の試掘調査

1. 調査の方法

2×2mのTPを任意に30箇所設定し、表土層を重機により除去後、人力を併用して、遺構・遺物の発見に努め、基本層序を確認し、図面・写真により記録を残した。

2. 調査の成果

TP1

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ・第Ⅲ層の搅乱を確認した。弥生土器1点が出土した。

TP5

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層から弥生土器4点が出土した。

TP7

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層から柱穴と思われる遺構と弥生土器5点、15世紀の土師質土器杯1点を確認した。遺構は無遺物のため、時代の特定はできないが、比較的新しいと思われる。

TP8

第Ⅰ層は耕作土である。耕作土直下から弥生土器が12点出土した。

TP15

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は床土である。第Ⅲ～Ⅳ層から土器片が出土した。

TP16

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層から遺構を検出したが、無遺物のため時代は特定できなかった。

TP19

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層から土器が出土した。

TP22

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層の盛土から弥生土器2点、土師質土器2点が出土した。第Ⅱ層は北方から南方へ斜めに盛られた状況であり、ここに流路等が存在した可能性がある。

TP23

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層から弥生土器1点と遺構を検出した。遺構は無遺物で時代を特定することができなかった。

TP24

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層から弥生土器7点と遺構を確認した。

TP25

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層から土器3点が出土した。

TP27

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～Ⅳ層は搅乱が見られる。土器4点が出土した。

TP28

第I層は耕作土、第II層は盛土である。第III～IV層から土器5点が出土した。

TP30

土師質土器2点が出土した。



第56図 南部試掘調査調査区平面図

第3節 I 区の確認調査

1. 調査の方法

本章第1節で記した通り、調査区北部で実施した試掘調査で遺物包含層が確認されたTPの周辺にはTP48~55を設定して確認調査を実施した。TP49については縄文時代後期とみられる遺物の出土量が多いため、TPを拡大して調査した。遺物については出土層位を確認しながら取り上げを行い、平面位置については簡易なグリッド(第58図を参照)を設定して確認した。TP49及びTP11・50・55周辺については工事立会の際にも隣接した場所にTP拡張区を設定して確認調査を実施した。次項ではTP48~49及びその周辺をI N区、TP50~55及びその周辺をI W区として内容を報告する。

2. 調査の成果

(1) I N区

遺物・遺構を確認することができたのはTP48・49である。面積を拡張し、グリッドを設定して調査した。





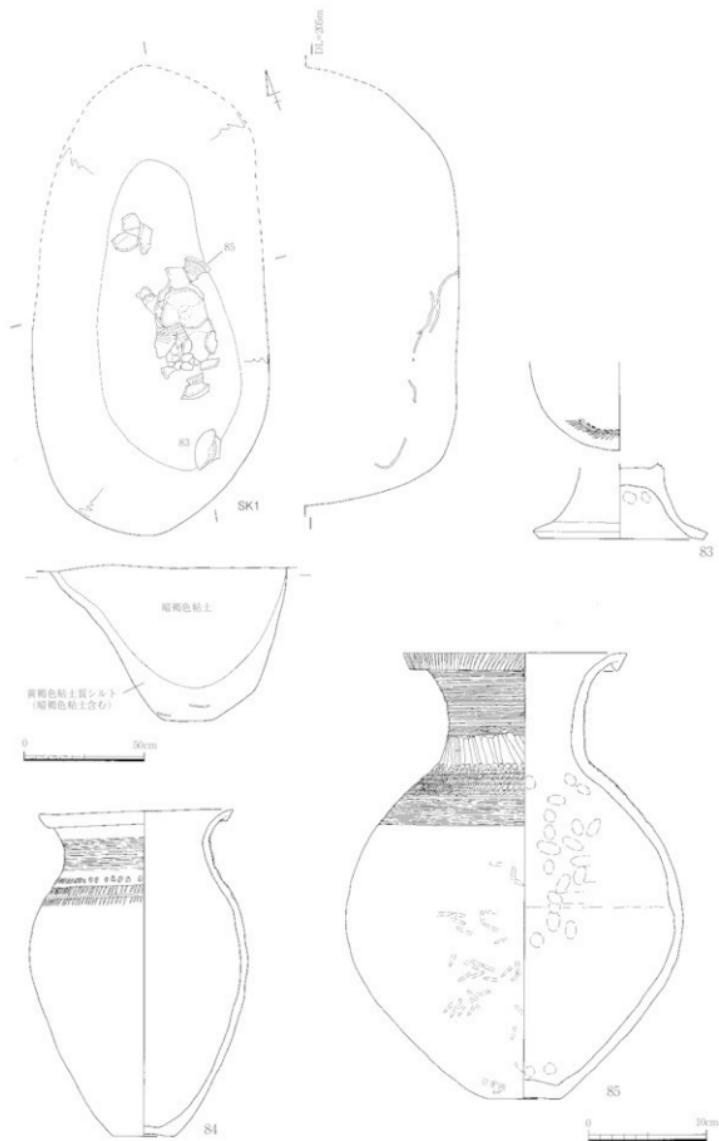
第58図 IN区平面図・TP49セクション図

TP48

第II層から縄文土器6点、珪質頁岩剥片1点が出土した。第III層から縄文土器2点、珪質頁岩剥片2点が出土した。

TP49

第I層は耕作土である。第II～V層は盛土である。第VIa～VIb層は縄文時代後期の遺物包含層である。元来同じ層であったものが、a層のみ上層の影響を受けて色調等が変化したものとみられる。第VII層は自然堆積によって形成された層であるが遺物・遺構は検出されなかつた。また、第VIa層上面でSK1が検出され、中から弥生後期前葉の土器が出土した。以下SK1と遺物包含層



第59図 IN区TP49SK1平面図・出土遺物実測図

に分けて遺物等について記す。(層序はCD間のセクションのものである。)

SK1

検出時に一部掘り過ぎたため不正確ではあるが、平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ20°傾く。長径約200cm、短径約100cm、深さ64cmを測る。埋土は暗褐色粘土で、底は暗褐色粘土を含む黄褐色粘土となる。ほぼ完形の壺(85)・甕(84)・蓋(83)が1点づつ出土した。土坑の底から壺が甕の上に重なるような状態で出土し、蓋は土坑壁面の上から出土した。蓋は口縁部外面に円形浮文と刻目を有し、法量から壺とセットのものと思われる。甕は肩部に棒状浮文・刻目・櫛描文を有する。甕は肩部に棒状浮文と刻目を有し、ほぼ完形であるが下胴部の一部を欠く。廃棄時に意識的に欠いたものか、その後失われたものは不明である。壺・甕・蓋は共に貼付口縁を有しており、後期前葉のものと思われる。

遺物包含層

縄文土器・石器が出土した。以下順に記す。

縄文土器 グリッド別にはD4が最も多く約380点出土した。以下K1類～K12類に形態分類して記す。

○第K1類

口縁部外面を主に施文するもの。(86～97)が相当する。(86・87・88)は口縁部の下に2本沈線による区画文が施される。(89・90)も2本沈線による施文が施される。(91)は口縁部の下に2本沈線が施され、その間に刺突文を有する。

(92～96)は口縁端部外面を巡る沈線が施される。(92)は2本または3本沈線による区画文を施文する。沈線の間には磨消縄文が施される。(93)は口縁端部外面を巡る2本沈線を有し、その間に隆帯を有する。(94・95・96)は沈線の間に磨消縄文が施される。(95)は口縁端部外面を巡る3本沈線をする。(96)の口縁部端部は面を成し、縄文が施される。(97)の口縁部は被厚されており、2本沈線による文様が施される。波状口縁である。

○第K2類

口縁端部外面に刻目が施されるもの。(98～104)が相当する。(98・99・100)は沈線の間に磨消縄文が施される。(98・99)は口縁部と文様帶を繋ぐ沈線を有する。(101～104)は2本沈線が施文されている。

○第K3類

口縁端部上面に刻目が施されるもの。(105～114)が相当する。(105～109)は口縁端部外面を巡る沈線が施される。(105)は沈線で区画された磨消縄文帶に短沈線が施される。(106・110)は沈線で区画された部分に短沈線が施される。(112・113)は口縁部がやや拡張されている。(114)は橋状把手状突起を有する。

○第K4類

口縁端部に沈線を施すもの。(115～127)が相当する。(115～124)は口縁端部外面にも沈線が施される。(115)は沈線で区画された磨消縄文帶を有する。円形の区画文の中に焼成前に穿たれた穿孔を有する。(117・118)は口縁端部から垂下沈線が伸びる。(119・120)は2本



第60図 IN区TP49包含層出土遺物(1)

沈線の間に磨消繩文が施される。(126・127)は口縁端部に円形の沈線を施し、頂部を表す。
(126)は磨消繩文を有する。

○第K5類

口縁端部に刻目と沈線を施すもの。(128~131)が相当する。(128)は内面に条痕を施す。
(130・131)は口縁部がやや拡張されている。(131)は波状口縁である。

○第K6類

胴部に曲線的な区画文を有するもの。(132~143)が相当する。(132・133・134・135)は同心円状の区画文を有し、2本沈線の間に磨消繩文が施される。(136・137)は胴部に磨消繩文



第61図 IN区TP49包含層出土遺物(2)

が施された入組文を有する。(138・139)は沈線の間に擬縄文を施す。(140・141・142)は2本沈線の間に短沈線を施す。(143)は磨消縄文が施されたJ字文を有する。

○第K7類

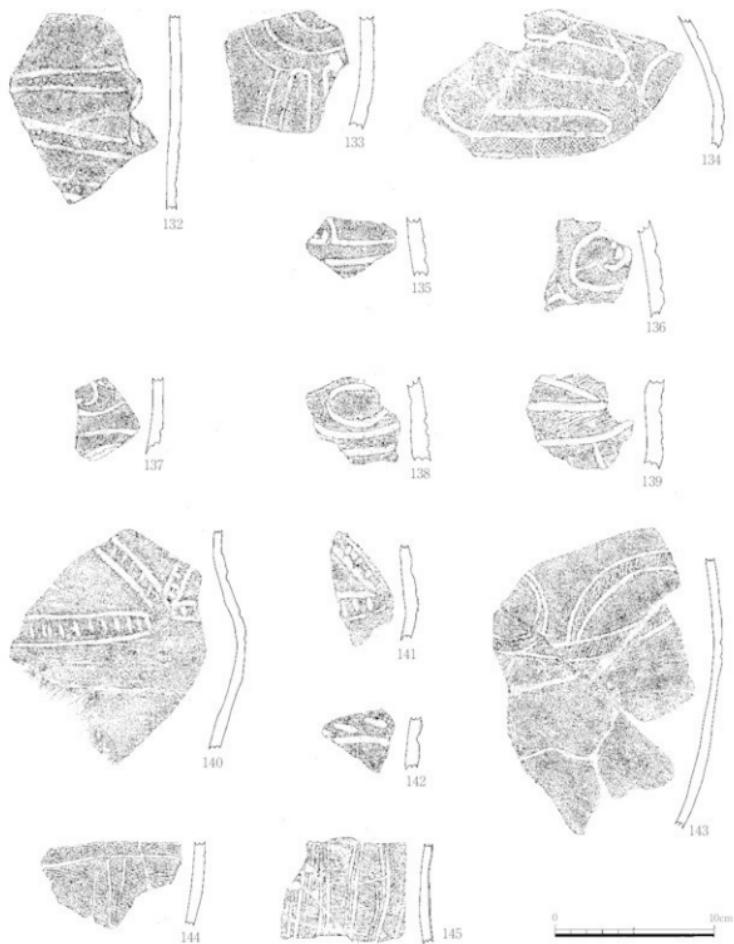
胴部に直線的な文様を有するもの。他の分類へ纏めることが難しいため、類を設けた。(144・145)が相当する。

○第K8類

平行沈線を有するもの。松ノ木式の浅鉢に多いものが入る。(146~152)が相当する。(146~149)の沈線は比較的浅い。(150・151・152)の沈線は比較的深い。(152)の沈線は波形である。



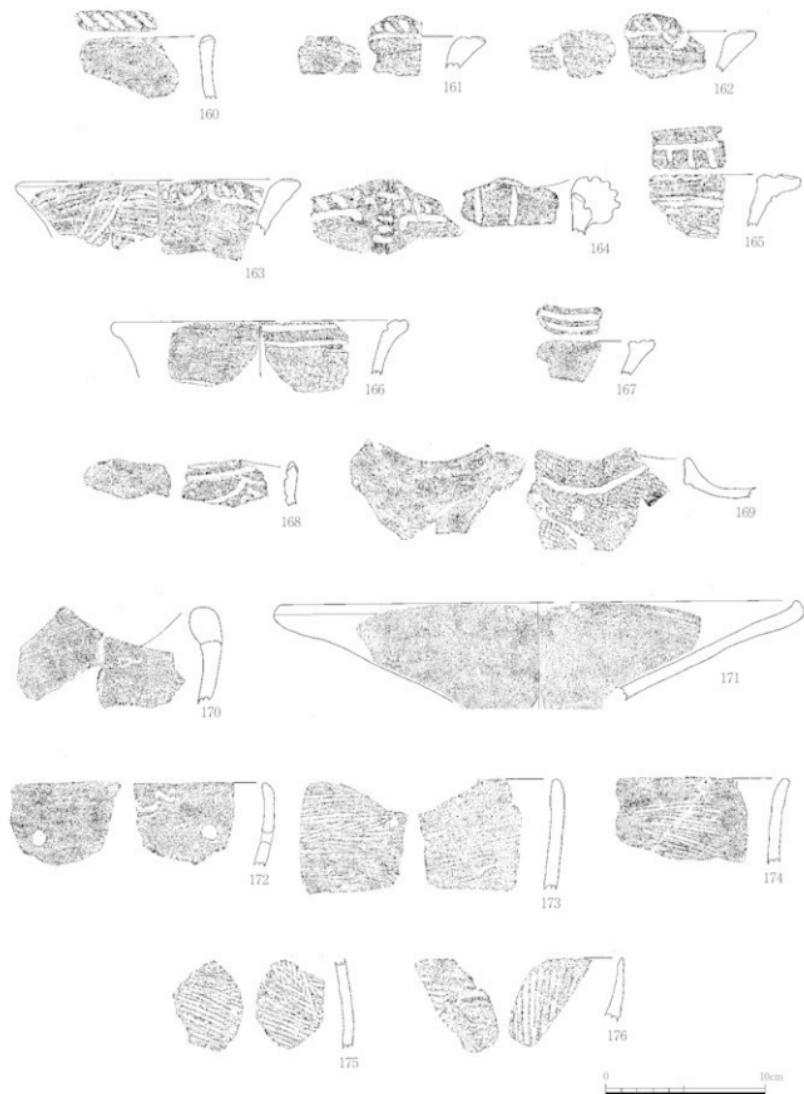
第62図 IN区TP49包含層出土遺物(3)



第63図 IN区TP49包含層出土遺物(4)



第64図 I N区TP49包含層出土遺物(5)



第65図 IN区TP49包含層出土遺物(6)



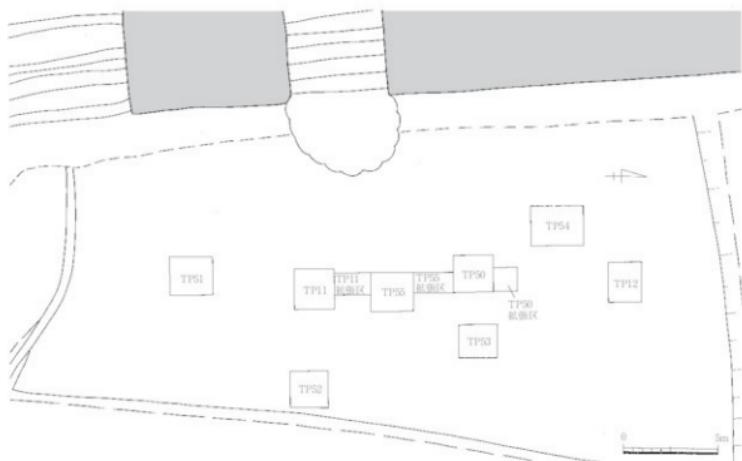
第66図 IN区TP49包含層出土遺物(7)

○第K9類

頸部の無文が進行しているもの。(153~159)が相当する。(153)の口縁端部には瘤状の頂部が形成される。口縁端部には刻目と沈線が施され、口縁端部外面にも沈線を有する。(154・155・156)は口縁端部に形成された瘤状の頂部の省略化が進む。(155)の口縁端部には刺突文と沈線が施される。胴部に直線的な区画文を有する。(154・156)の口縁端部には2条の沈線が施され、内面には段を有する。(154)は胴部に直線的な区画文を有し、擬繩文による磨消繩文が施される。(158・159)は口縁部が稜を成して内湾する。

○第K10類

口縁端部の文様が内面に施されるもの。(160~169)が相当する。(160)は刻目が施される。(161~165)は刻目と沈線が施される。(162・163)は円形の沈線文を有する。(163・164)は口縁端部から2本垂下沈線が伸びる。(165・167)は口縁端部内面が拡張される。(165)は口縁



端部外面にも沈線を有し、外面には擬縄文が施される。(166~169)は口縁部内面に2条または1条の沈線が施されるもの。

○第K11類

無文または条痕のみ施されたもの。(170~176)が相当する。(170・171・172)は無文である。(170)は波状口縁を有し、端部は被厚される。

○第K12類

底部である。(177~182)が相当する。すべて平底であるが(180・181・182)は上底となっている。

石器

(183)は磨製石斧であり、石材は緑色岩である。E5から出土した。(184・185)は石鏟であり、石材は前者がチャート、後者がサスカイトである。C5・D4から出土した。(186・187)は石錘である。B3・C5から出土した。砥石(188)・叩石はともにE5から出土した。磨石(189)はD3・4から出土した。剥片は珪質頁岩が最も多く約50点出土し、チャートは6



第67図 I W区平面図・出土遺物実測図

点、姫島産黒曜石は3点出土した。

(2) I W区

TP50・51・55から遺物が出土している。

TP50

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は床土である。第Ⅲ～Ⅶ層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅵ層からは厚手無文土器(190)が15点出土した。織維痕がみられる。チャート剥片が約110点、珪質頁岩剥片が3点出土した。

TP51

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は床土である。第Ⅲ層は旧耕作土である。第Ⅳa～V層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅳb層からは遺物が出土した。

TP55

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は床土である。第Ⅳ層は旧耕作土である。第Ⅴa～Ⅶ層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅵ層からは遺物が出土した。

TP11拡張区

チャート剥片2点が出土した。

TP50拡張区

チャート剥片2点、珪質頁岩剥片2点が出土した。

TP55拡張区

黄灰色粘土質シルト層からは縄文時代早期の土器片(191・192・193)が出土した。振幅が大きい山形文を有する胴部(191)、2条の刻目突帯の間に2条の細長い隆帯を付けさらにその上に刻目を施した口縁部(192)、横位の押引文に山形文を模した沈線文を組み合わせた文様を有する土器(193)、チャート剥片が1点出土した。

第4節 II区の確認調査

1. 調査の方法

II区は試掘調査では遺物包含層を確認することができなかった。しかし、工事着手後土坑が確認されたため、この周辺について造構検出作業を行った結果、土坑及び正体不明造構が検出された。検出された造構についてはすべて調査し、必要に応じて測量・写真撮影を行った。

2. 調査の成果

II区では11基の土坑と1基の正体不明造構が確認された。試掘調査の結果からみて、遺物包含層についてはすでに削平されていたものと思われる。以下、造構ごとに詳細を記すこととする。

SK1

調査区南西部で検出された。平面形は楕円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約116cm、短径約90cm、深さ16cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。

(194)は小型の壺である。整形は荒く内外面とも指頭圧痕が多く残る。(195～200)は壺である。内外面にハケ調整がみられる。(195～198)は口縁部または上胴部に最大径を有する。口縁部は概ね緩やかに外反するが、(198)はやや「く」の字に近い形で外反する。(199・200)は上胴部より上部を欠くが、最大径は胴部中央に近い。(199)はやや尖った丸底で、(200)は小さい平底で厚い。(201・202)は底部で内外面にハケ調整がみられる。丸底である。(203)は鉢であり、外面に叩き目が残り、内面はハケ調整がみられる。その他口縁部が出土した土器では、緩やかに外反するものと、「く」の字に外反するものがある。底部では丸底のものが多い。調整を見ると内外面ともハケ調整を施しているものが多いが、叩き目が残るものも見受けられる。1点微隆起突堤の下に棒状浮文を有するものがあり、図示しなかった土器にも微隆起突堤を有するものがあるが、これは、他の出土土器との比較から混入による可能性が強いと思われる。石器では叩石(204)・砾石・台石が出土した。

SK2

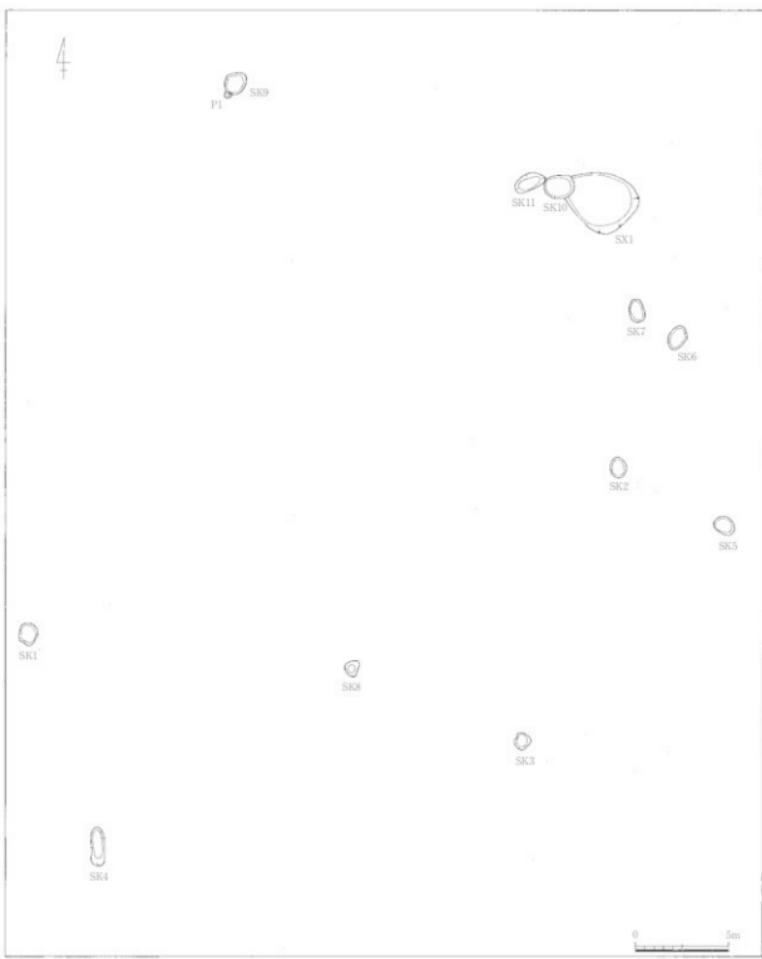
調査区東部で検出された。平面形は楕円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約108cm、短径約84cm、深さ43cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。

(205)は壺の口縁部である。緩やかに外反する。外面にハケ調整が施される。(206・207・208)は壺である。(206)は口縁部が緩やかに外反し、外面にハケ調整が施される。(207・208)は上胴部に最大径を持つ。内外面にハケ調整が施される。(208)は口縁部が「く」の字に外反し、わずかに叩き目を残す。(209)は平底の底部で(210・211)は丸底の底部である。ともに内外面にハケ調整が施される。

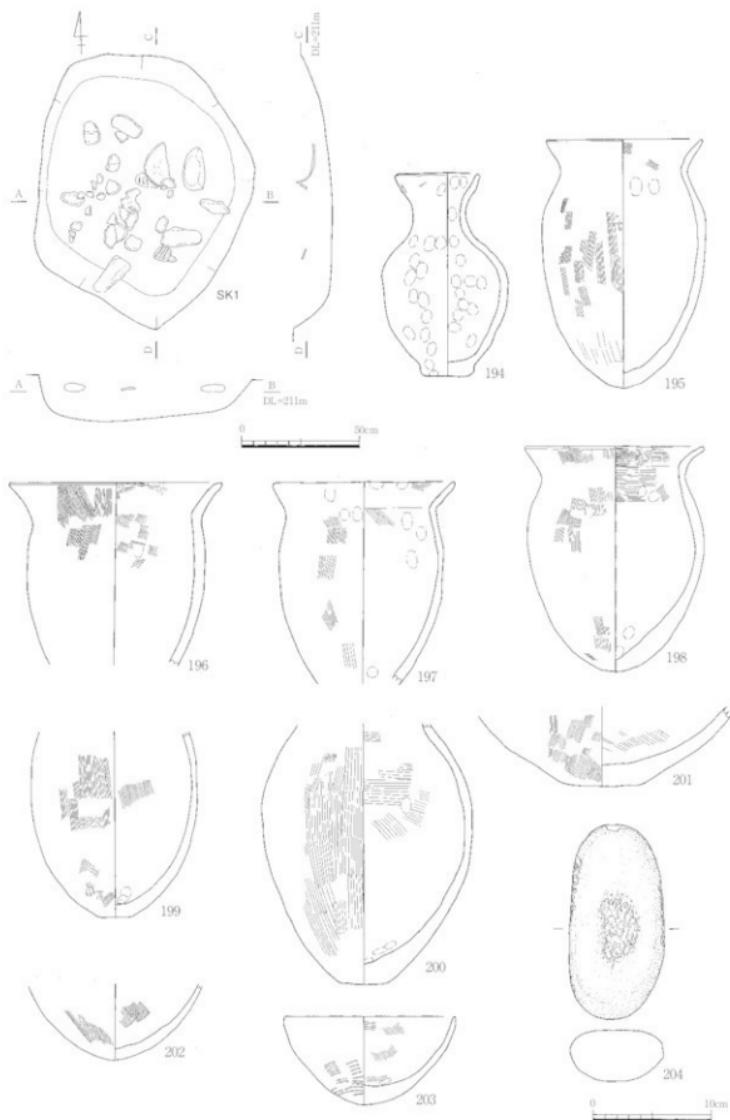
SK3

調査区南東部で検出された。平面形は隅丸方形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約90cm、短径約84cm、深さ14cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。

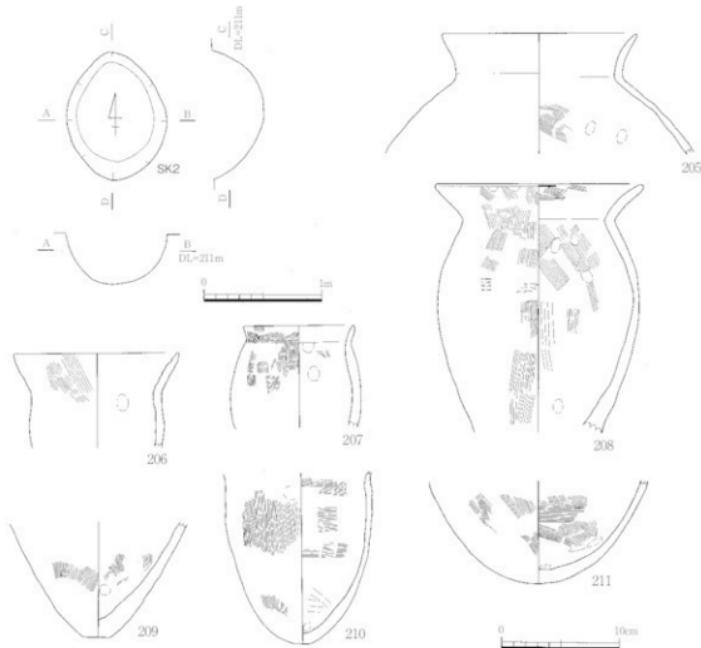
(212・213・214)は口縁部である。(212)は二重口縁である。(213)は「く」の字に外反する。内面にハケ調整が施される。(214)はやや尖った丸底を呈する。



第68図 II区平面図



第69図 II区SK1平面図・出土遺物実測図



第70図 II区SK2平面図・出土遺物実測図

SK4

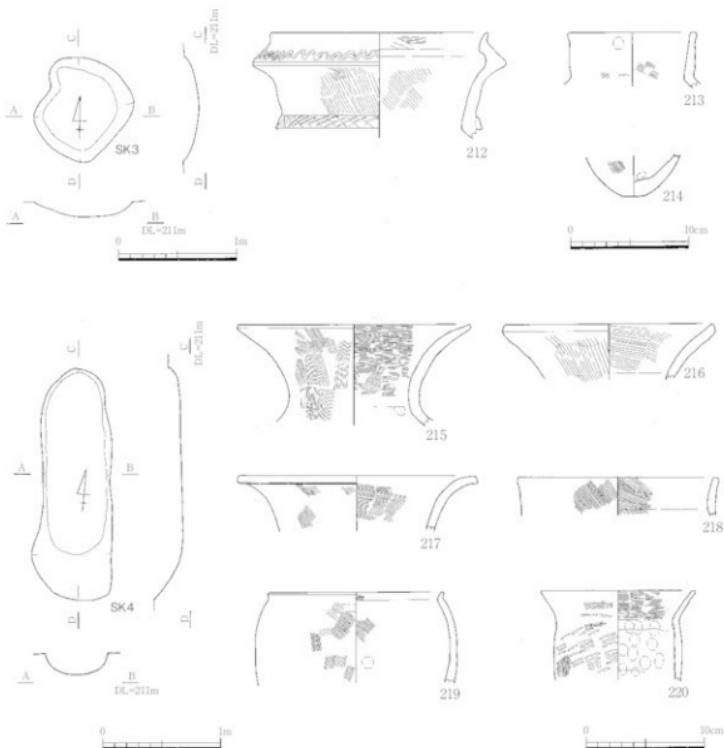
調査区南西部で検出された。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より西へ5°傾く。長径約90cm、短径約84cm、深さ14cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。

(215~217)は壺である。(220)は甕である。(215~219)は内外面にハケ調整が施される。(220)は外面に叩き目が残る。

SK5

調査区東部で検出された。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より西へ70°傾く。長径約118cm、短径約84cm、深さ20cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

(221・222・224)は壺であり、内外面にハケ調整が施される。(223)は壺である。口縁緩やかに外反し、上胴部に最大径を有する。内外面にハケ調整が施される。(225)は口縁部に刻目を有し、微隆起突帯を施されるものである。他の出土遺物との比較から、混入されたものであると思われる。(226~235)は底部であり、多くは内外面または外面にハケ調整が施されるが、(234)は叩き目が残る。(236)は外面に叩き目が残り、ハケ調整もみられる。(237~240)は鉢である。内面にハケ調整が施される。



第71図 II区SK3・SK4平面図・出土遺物実測図

SK6

調査区東部で検出された。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ30°傾く。長径約127cm、短径約84cm、深さ12cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。

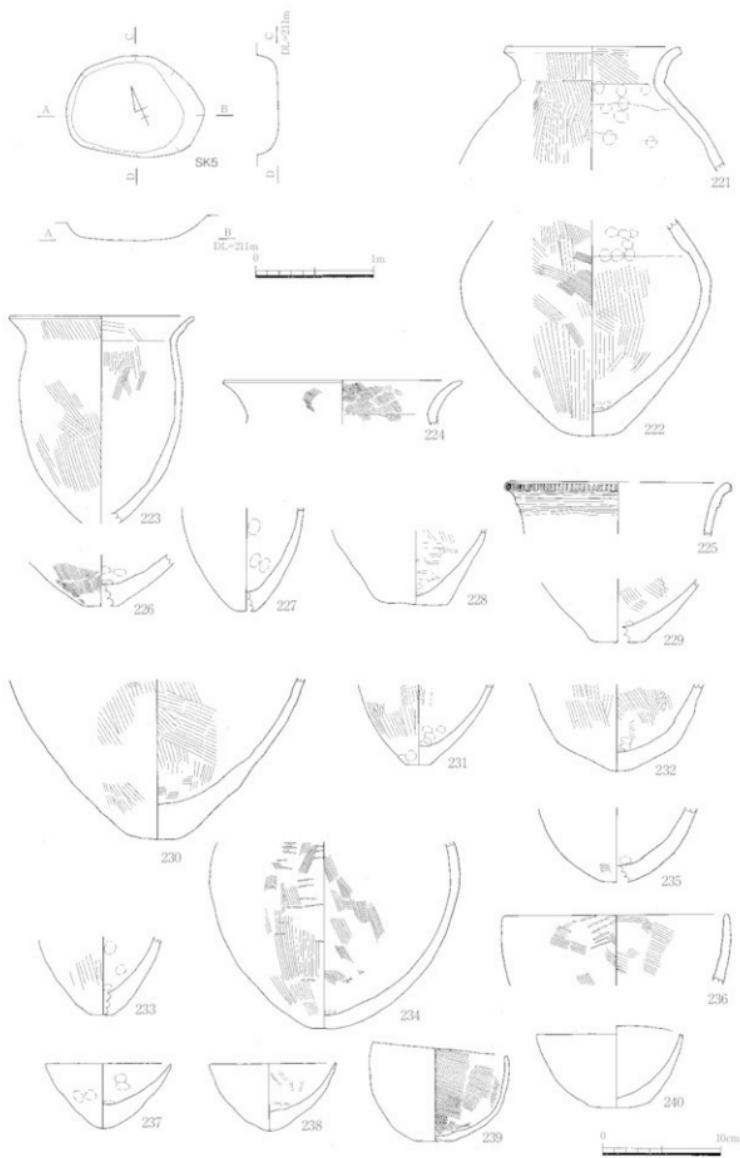
(241～253)は甕である。口縁は緩やかに外反し、口縁～上胴部に最大径を有するものが多い。底部は小さい平底である。内外面ともにハケ調整がみられる。(250～253)は外面胴部に叩き目を残す。

SK7

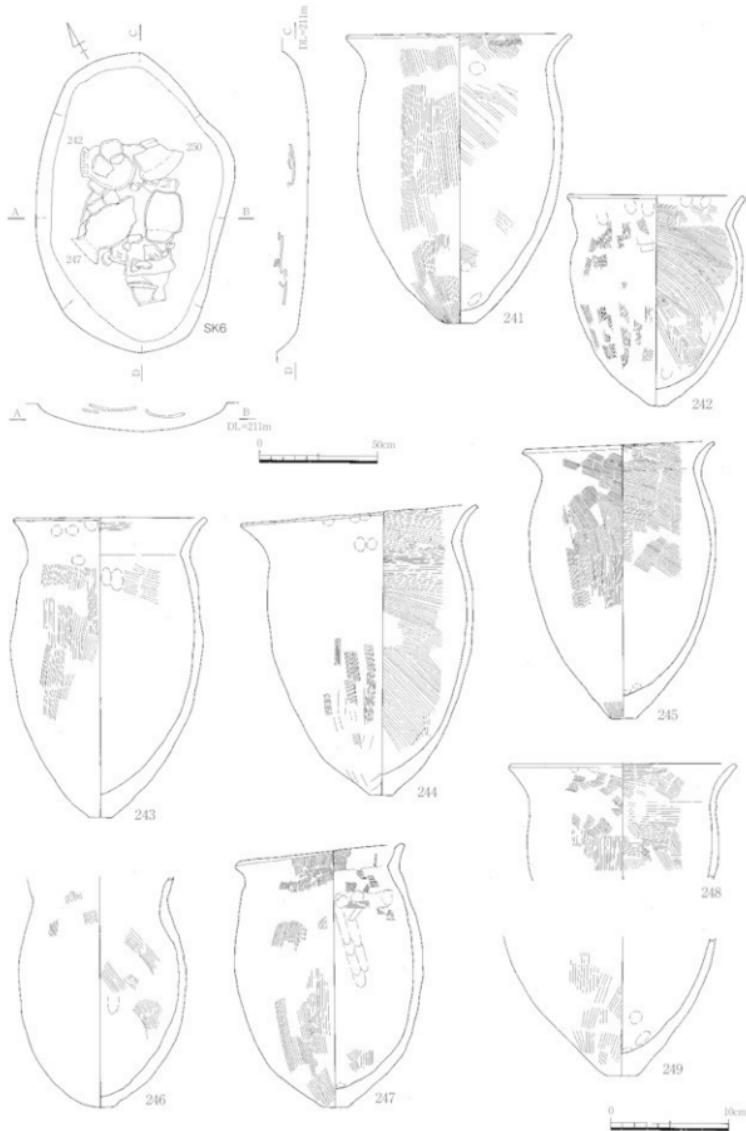
調査区東部で検出された。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ13°傾く。長径約116cm、短径約76cm、深さ20cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK8

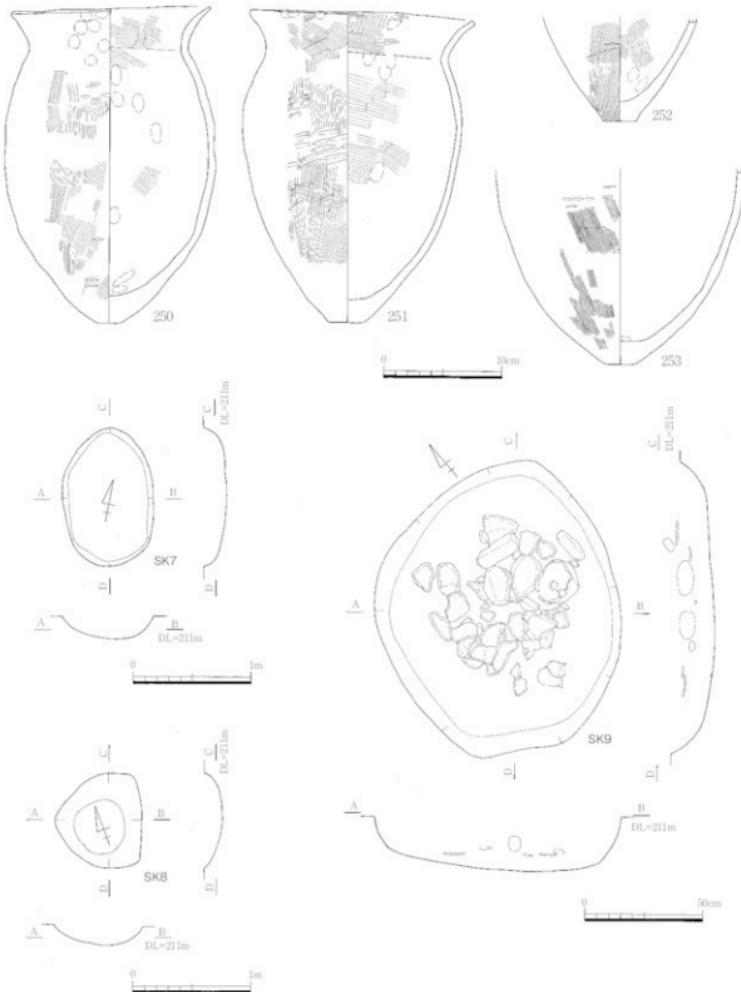
調査区南部で検出された。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ15°傾く。長径約80cm、



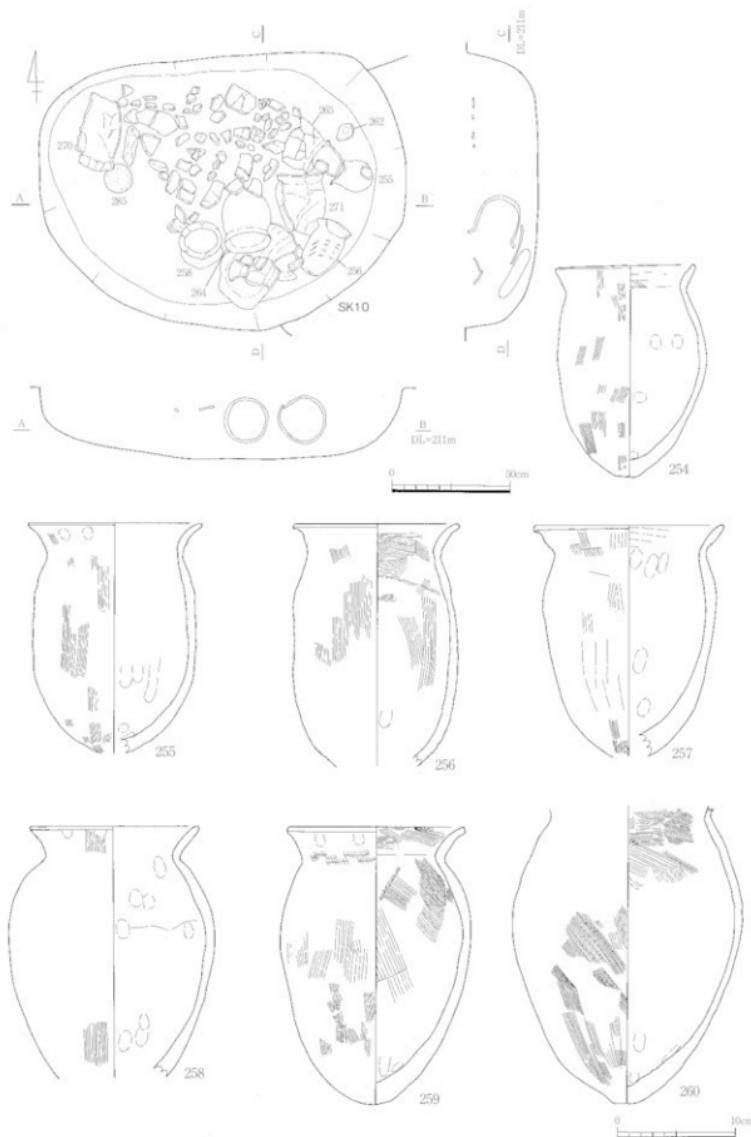
第72図 II区SK5平面図・出土遺物実測図



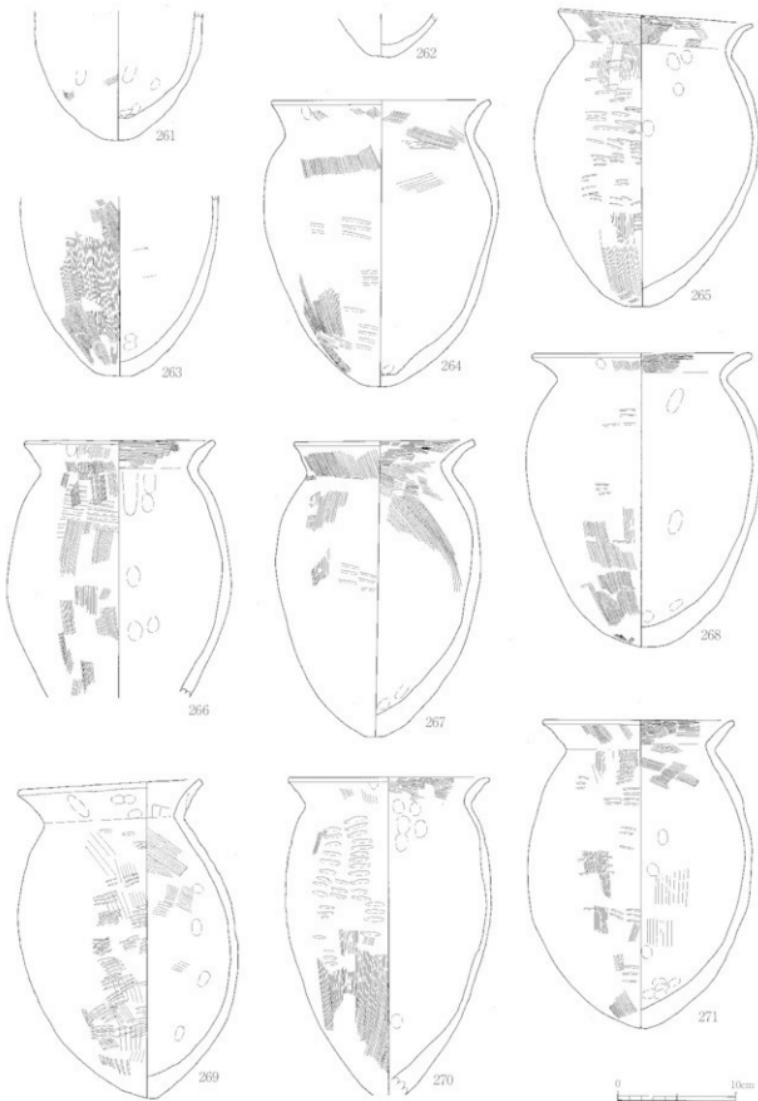
第73図 II区SK6平面図・出土遺物実測図(1)



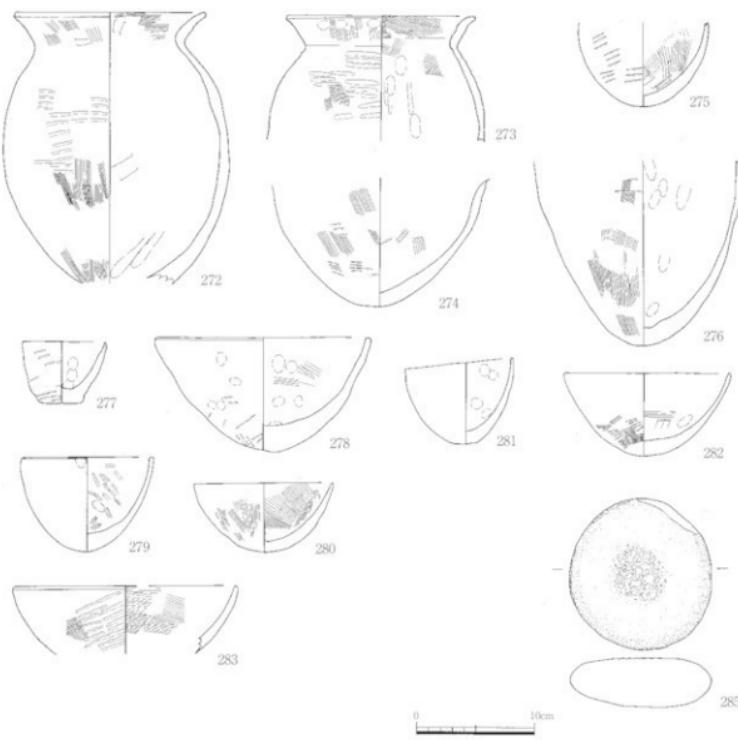
第74図 II区SK6出土遺物実測図(2)・SK7・SK8・SK9平面図



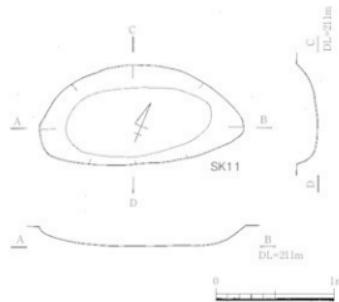
第75図 II区SK10平面図・出土遺物実測図(1)



第76図 II区SK10出土遺物実測図(2)



(284は欠番)



第77図 II区SK10出土遺物実測図(3)・SK11平面図

短径約74cm、深さ20cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK9

調査区北西部で検出された。P1を切る。平面形は楕円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約127cm、短径約104cm、深さ23cmを測る。

多くの自然石が投げ込まれていた。

SX10

調査区北東部で検出された。SX1を切る。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より90°傾く。長径約153cm、短径約118cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。SX1を切る。

(254~276)は壺である。(254~263)は主にハケ調整が施されるものである。口縁部は緩やかに外反するものに混じって、(258・259)のように「く」の字に外反するものもみられる。(264~275)は外面に叩き目が残るものである。口縁部は「く」の字に外反する。底部は(272・274)のように丸底のもものもみられる。高知県西部に多い、厚底の底部もみられる。(277~283)は鉢である。(277・278・282・283)は叩き目が残る。(277)は平底であるが、残りは丸底である。(285)は叩石であり、表裏に敲打痕がみられる。

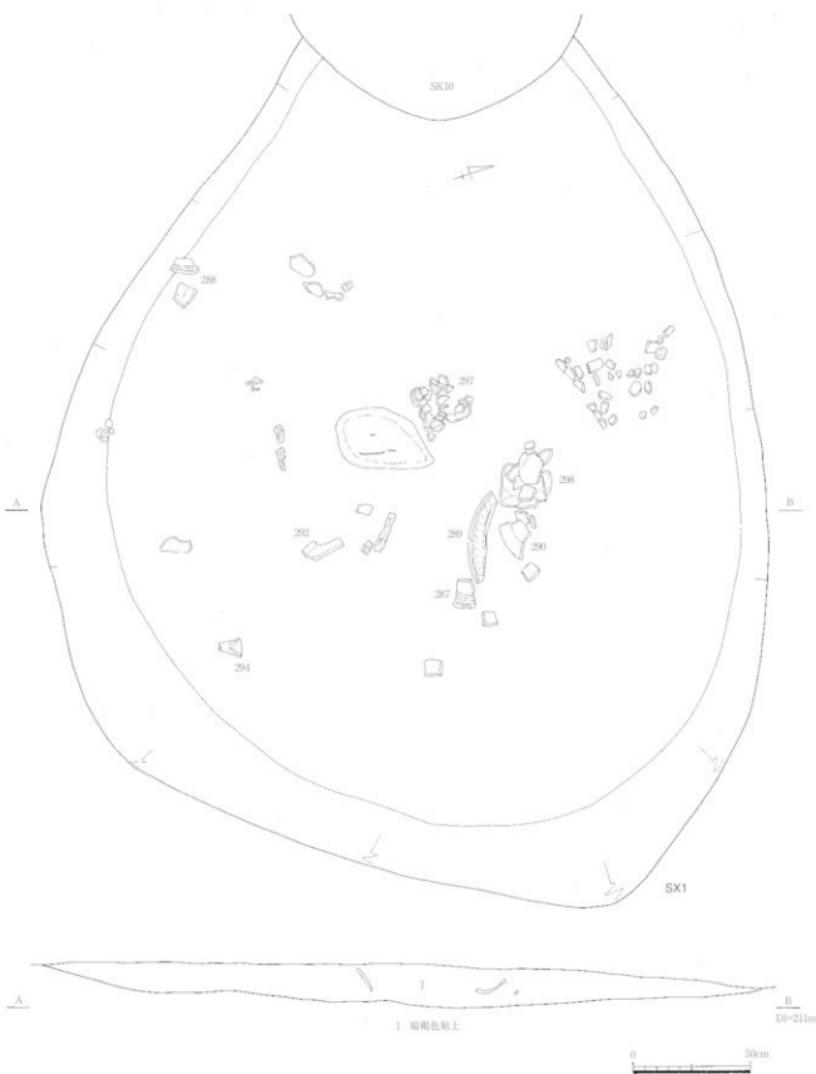
SX11

調査区北東部で検出された。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より70°東に傾く。長径約153cm、短径約84cm、深さ18cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。

SX1

調査区北東部で検出された。SK10に切られる。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ70°傾く。長径約368cm、短径約355cm、深さ19cmを測る。埋土は暗褐色粘土である。

(286~298)は壺である。(286・288・290・291)は口縁部下端に刻目があり、(286・289)は上胴部に円形浮文・微隆起突帯が集中配置される。(287)は口縁部に板状工具による刺突文を施し、その下に円形浮文・微隆起突帯が集中配置される。(290)は口縁端部に刻目を有する。(292)は頭部に櫛描文・楕円形浮文を有する。(296)は櫛描文・竹管文が施される。(298)は口縁が外反し、胴部中央に最大径有する。



第78図 Ⅱ区SX1平面図・セクション図



第79図 II区SX1出土遺物実測図

第5節 III区の確認調査

1. 調査の方法

III区については耕作土を残して造成する工法で工事を実施する範囲ではあったが、周囲の立会調査や試掘調査の結果から、遺構が存在する可能性が強く、遺跡の正確を把握するためには確認調査を一部実施する必要があると判断したため、耕作土をはぎ取って遺構検出をした。この結果堅穴住居が検出されたため、住居のみ遺構掘削して調査をすることになった。周辺にも遺構が所在することが想定されたが、工法から遺構が保存されると判断した。

調査した遺構は堅穴住居跡のみであるが、検出時の規模・形状より数棟の切り合いであると想定された。しかし、各住居跡の埋土の違いを見分けることができなかつたため、切り合った住居跡を全体的に掘削することとなった。遺物の取り上げについても、出土層位を正確に捉えることができなかつたため、ほぼ同じ高さごとに4回に分けて掘削している。本報告書では1回目で掘削した部分を上層、2回目を中層、3回目を下層、4回目を最下層と記すが、セクション図のどの層に該当するかは不明確である。

2. 調査の成果

前述した通り堅穴住居跡の切り合いは、平面的に捉えることができなかつた。セクション図からピット等遺構を検出できる面が生活面であると考えると、3～4回の建替えを想定することができる。新しいものから順にST1～4とすると、セクション図の第I～III層がST1、第IV～VI層がST2、第VII～IX層がST3、XI～XII層がST4に相当すると思われる。第X層は土坑埋土である。第XIII層は住居跡埋土と地山の転移層である可能性が強い。また、XI・XII層が異時期の住居跡の埋土である可能性もある。

遺物では弥生～古墳時代の土器片が約230点出土しているが、正確な出土層位は把握されていない。以下、出土遺物について述べる。

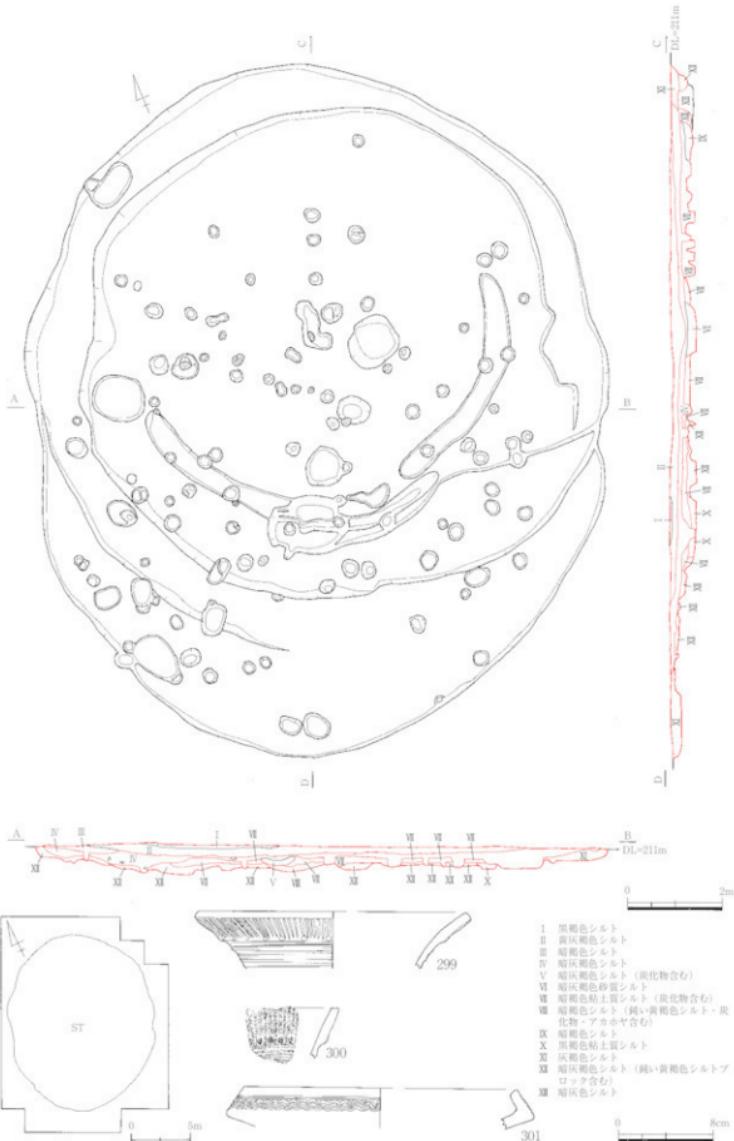
板状工具の押圧による刻目、縦に搞んだ円形浮文、微隆起突帯を有する土器(299)は主に上層で出土しており、中層・下層でも若干出土する。

(303)のようにハケ調整が施された土器は中層・下層・最下層から出土する。

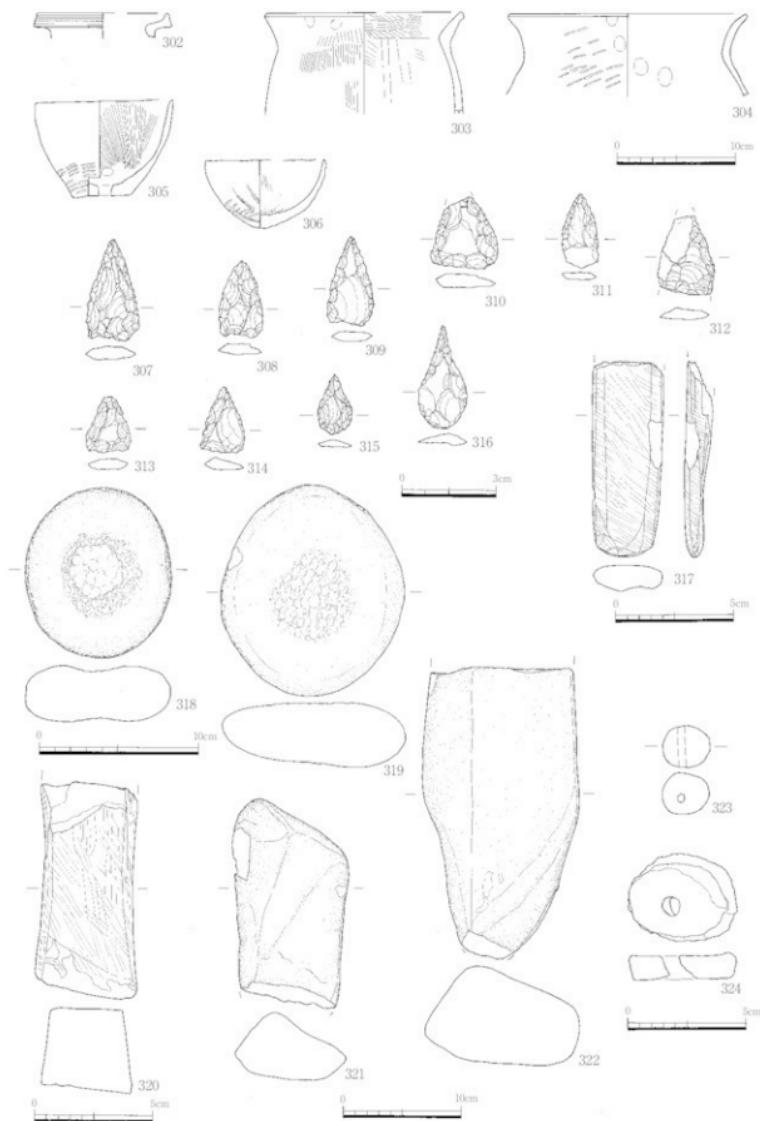
叩き目の残る土器も上層～最下層から出土する。(304)は壺である。(305・306)は鉢である。(305)の口縁部は緩やかに内済、平底で焼成前に孔が穿たれる。外面は叩き目が残る。内面はハケ調整が施される。(306)は丸底でやはり外面は叩き目が残る。

(302)のような凹線文を施された土器も出土している。

その他では石鎚(307～316)や、扁平石斧(317)、スクレイパー、剥片石器、叩石、凹石(318・319)、砥石(320・321・322)、土玉(323)、用途不明の石製品(324)、鉄製品が出土する。(307・312・315・316)は赤色頁岩製、(310・311)は珪質頁岩製、(308・309・313・314)はサスカイト製である。(317)は粘板岩製、(318・319)は表裏に1箇所ずつ敲打痕が集中する。スクレイパーは表探し



第80図 III区平面図・ST平面図・出土遺物実測図(1)



第81図 III区ST出土遺物実測図(2)

たものである。珪質頁岩製で加工は片面だけである。

堅穴住居が機能した時期については、出土遺物から弥生時代中期後葉～古墳時代の可能性が考えられる。しかし、この中で最も古い弥生時代中期後葉と思われる微隆起突帯を有する土器は、下層からではなく、主に上層からの出土であるため、混入した可能性が考えられる。ハケ調整が施された土器や、叩き目が残る土器の出土状況、この遺跡での出土状況から考えて、堅穴住居は弥生時代後期～古墳時代に機能した可能性が強いと考えられる。

堅穴住居の特徴としては石器の出土が多いところである。石鎌や扁平石斧が出土しているが、この住居からは砥石も出土しているところから、工房としての役割を果たす空間があった可能性が考えられる。

第6節 IV区の確認調査

1. 調査の方法

IV区はTPによる調査で遺物・遺構が確認されたため、遺跡の広がり等を把握するために、事業実施区域を東西に横断する形で細長いTRを設定して確認調査を実施し、遺構検出をした。また、TRの南端に溝状遺構が検出されたため、調査区の中央部については南に幅を広げて調査した。検出された遺構については工事の影響を受けると判断されたため、本発掘調査を実施した。

2. 調査の成果

調査の成果について、以下遺構ごとに記す。

SB1

IV区中央部に位置する。規模は2間×2間で梁間約1.24~1.88m、桁行3.56~4.24mである。柱穴は円形で径約14~20cm、深さ約16~29cmを測る。棟方向は真北より西へ83°傾く。これは近接するSD1やSD2、SB2の向きとはほぼ同じ方向であり、同時期に機能していた可能性を窺わせる。

SB2

IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置する。規模は2間×3間で梁間約1.52~2.12m、桁行1.60~2.32mである。柱穴は円形で径約20~60cm、深さ約38~68cmを測る。棟持柱を有する。棟方向は真北より西へ84°傾く。これは近接するSD2やSD1、SB1の向きとはほぼ同じ方向であり、同時期に機能していた可能性を窺わせる。

SD1

IV区中央部の南端に位置し、東西に調査区外に延びる。弥生土器または古式土師器が約150点出土するが、平底を呈する底部や叩き目が残る口縁部が確認できる。また、10世紀末~11世紀のものと思われる攝津型土師器羽釜の口縁部(325)が出土するが、出土数から混入の可能性が強い。

SD2

IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置し、東西に調査区外に延びる。

SK1

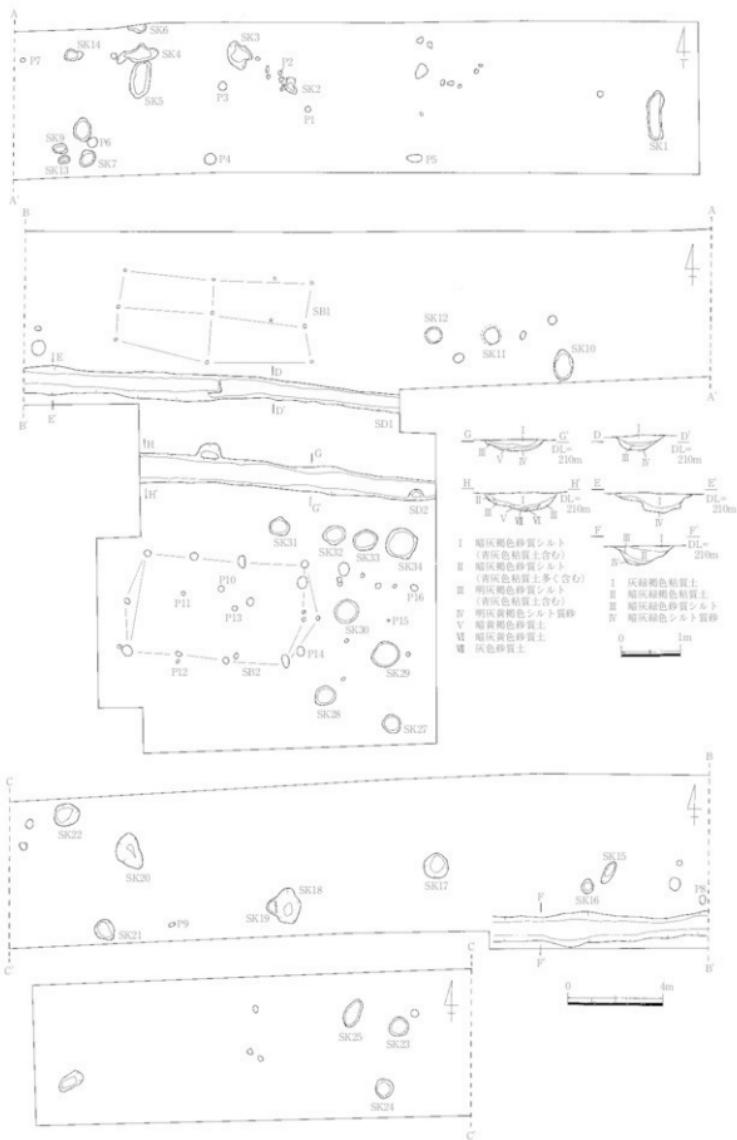
IV区東端に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約208cm、短径約71cm、深さ約37cmを測る。埋土は灰褐色砂質シルトである。

(326)は蓋である。(327~335)は壺である。外面または内外面に密にハケ調整が施される。(327~330)は貼付口縁を有し、(331~335)は口縁部が緩やかに外反する。(336)は高杯である。(337~338)は鉢である。平底を呈する。(339~341)は平底の底部である。

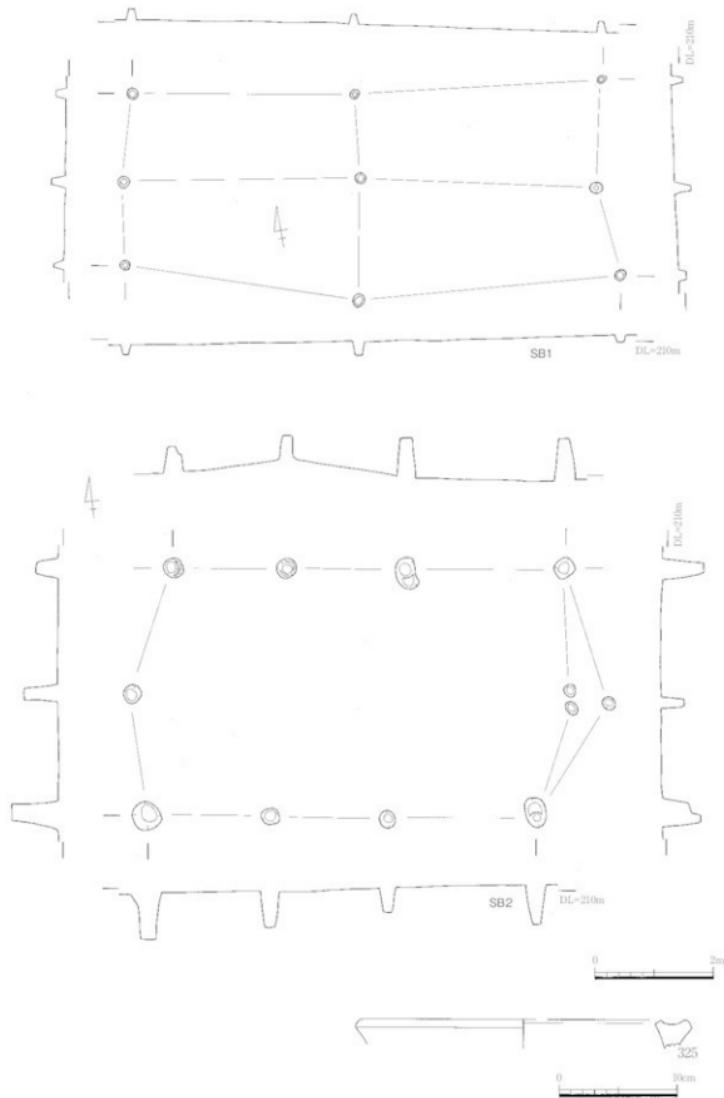
(342)は壺である。貼付口縁を有し、内外面にハケ調整を施す。

SK2

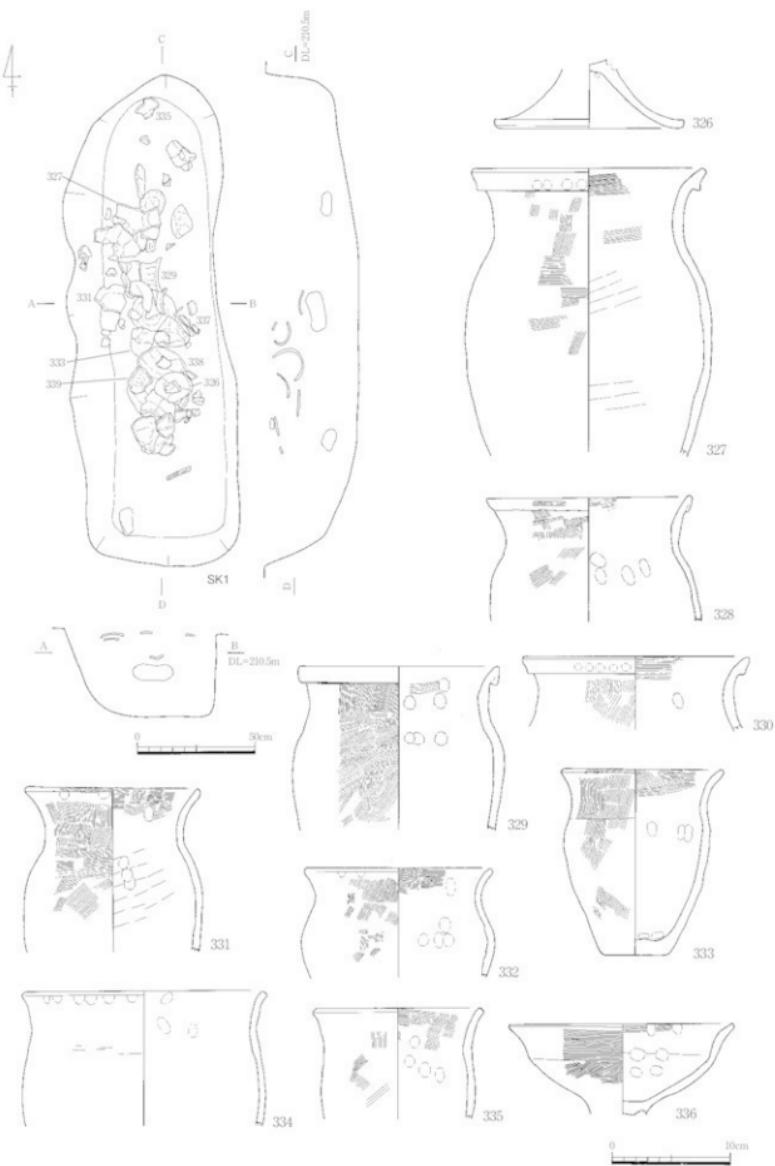
IV区東部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より東へ25°傾く。長径約58cm、短径約56cm、深さ約6cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。



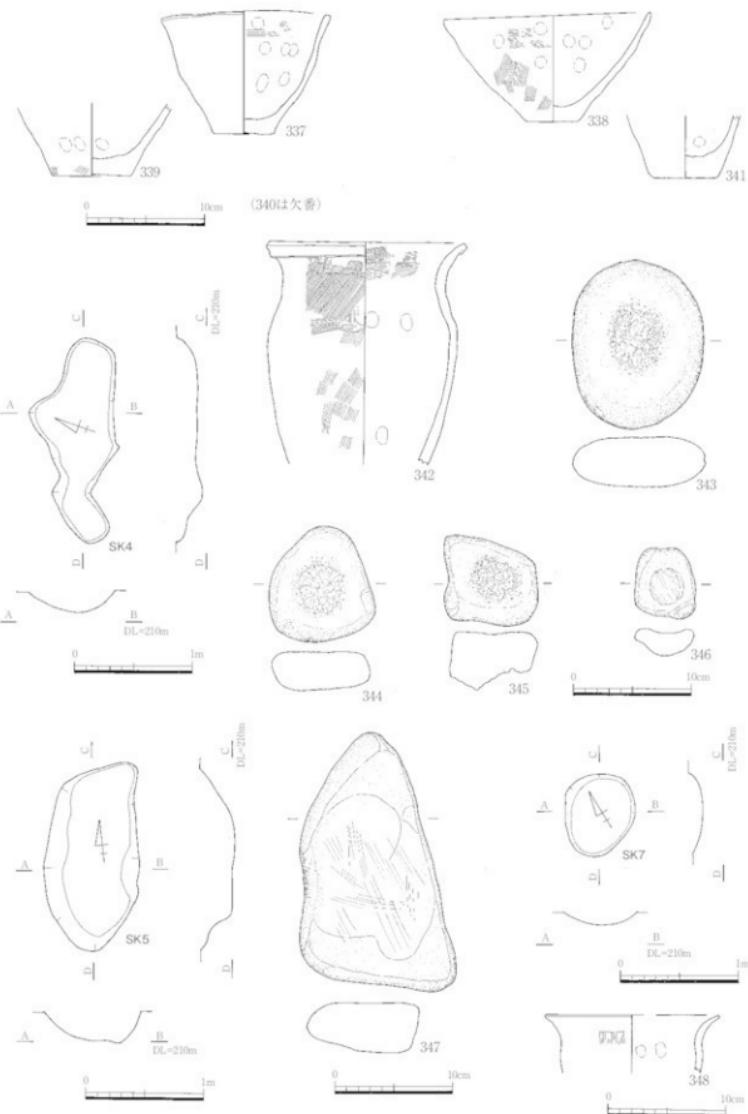
第82図 IV区平面図



第83図 IV区SB1・SB2平面図・SD1出土遺物実測図



第84図 N区SK1平面図・出土遺物実測図(1)



第85図 IV区SK1出土遺物実測図(2) SK4・SK5・SK7平面図・出土遺物実測図

SK3

IV区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ20°傾く。長径約120cm、短径約94cm、深さ約10cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK4

IV区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ75°傾く。長径約174cm、短径約71cm、深さ約19cmを測る。埋土は灰黄色粘土である。

(343)は叩石である。(344～346)は凹石である。

SK5

IV区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ8°傾く。長径約152cm、短径約82cm、深さ約25cmを測る。埋土は灰黄色粘土である。

(347)は砥石である。

SK6

IV区東部北壁際に位置し、一部は調査区外に所在するため、全体の平面形は不明である。深さは約11cmを測る。埋土は暗灰茶色粘土である。

SK7

IV区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ27°傾く。長径約70cm、短径約59cm、深さ約12cmを測る。埋土は灰色粘土である。

(348)は甕であるが、外面にハケ調整が施される。貼付口縁も出土する。

SK8

IV区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約100cm、短径約64cm、深さ約20cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK9

IV区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ83°傾く。長径約60cm、短径約44cm、深さ約12cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK10

IV区中央部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約256cm、短径約162cm、深さ約84cmを測る。埋土は不明である。

(350～353)は甕である。(350)は貼付口縁を有する。(351～353)の口縁部は外反し、ハケ調整が外面全体と口縁内面に施される。

SK11

IV区中央部に位置する。平面形は円形である。径約87cm、深さ約58cmを測る。埋土は灰黄色粘土である。

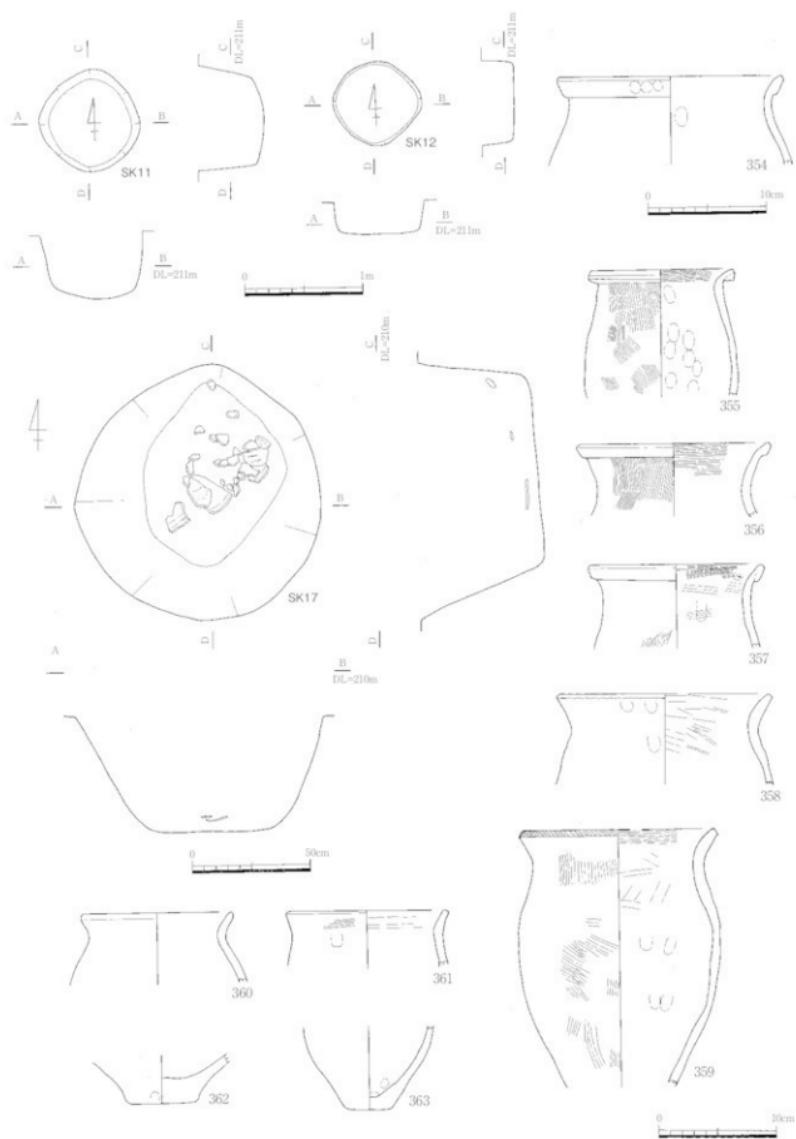
SK12

IV区中央部に位置する。平面形は円形である。径約74cm、深さ約29cmを測る。埋土は灰黄色粘土である。

(354)は甕である。貼付口縁を有する。



第86図 IV区SK8・SK10平面図・出土遺物実測図



第87図 IV区SK11・SK12・SK17平面図・出土遺物実測図

SK13

IV区東部に位置する。平面形は隅丸方形で、主軸方向は真北より東へ85°傾く。長径約42cm、短径約30cm、深さ約11cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK14

IV区東部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より東へ73°傾く。長径約78cm、短径約50cm、深さ約14cmを測る。埋土は上層が暗茶色粘土で、下層が灰褐色粘土である。

SK15

IV区中央部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より東へ30°傾く。長径約11cm、短径約39cm、深さ約15cmを測る。埋土は上層が灰褐色粘土であり、下層には灰黄色粘土が混じる。

SK16

IV区中央部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より東へ20°傾く。長径約63cm、短径約51cm、深さ約10cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK17

IV区中央部に位置する。平面形は円形である。径約106cm、深さ約49cmを測る。埋土は上層が灰褐色粘土で、下層は灰色粘土が混じる黄褐色粘土である。

(355～363)は甕である。ハケ調整を施すものが多い。(355～357)は貼付口縁を有する。(362・363)は底部であり、平底を呈する。

SK18

IV区西部に位置する。SK19に切られる。平面形は梢円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約148cm、短径約105cm、深さ約35cmを測る。埋土は上層が灰色粘土で、下層が灰褐色粘土である。

(364・365)は壺である。(364)は貼付口縁を有する。(365)は長頸壺である。(366・367)は甕である。(368)は鉢である。平底で外面にハケが施される。(369)は高杯の脚部である。

SK19

IV区西部に位置する。SK18を切る。平面形は円形である。径約70cm、深さ約12cmを測る。埋土は灰色粘土である。

SK20

IV区西部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より西へ23°傾く。長径約158cm、短径約100cm、深さ約18cmを測る。埋土は上層が灰褐色粘土で、下層は褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

(370)は壺であり、貼付口縁を有する。

SK21

IV区西部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より西へ46°傾く。長径約96cm、短径約83cm、深さ約20cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

(371)は平底の底部である。

SK22

IV区西部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より東へ75°傾く。長径約117cm、短径

約97cm、深さ約28cmを測る。埋土は灰褐色粘土に黄褐色粘土が混じり、下層は小礫が混じる。

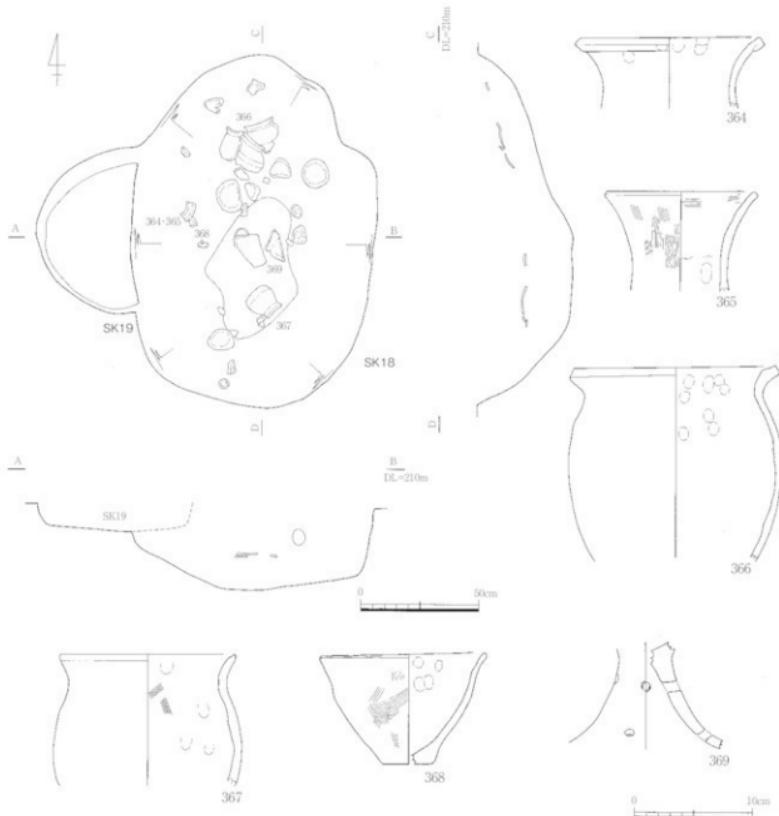
(372)は口縁部である。図示できなかったが、平底の底部も出土した。

SK23

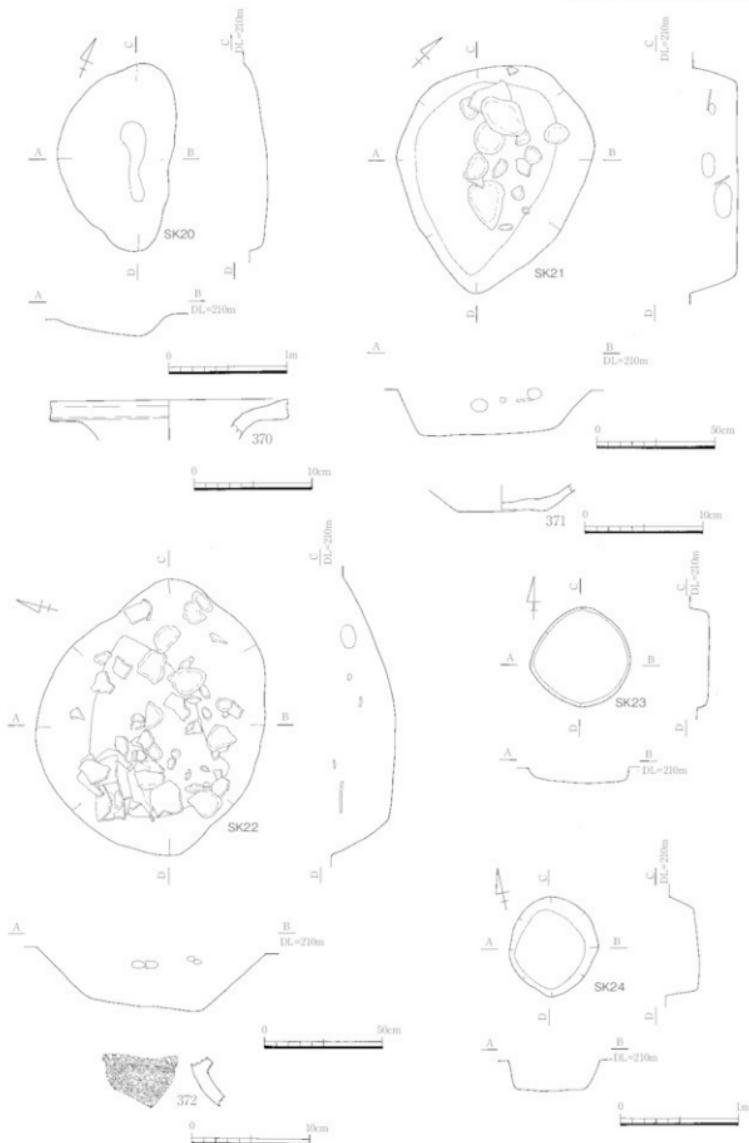
IV区西部に位置する。平面形は円形である。径約86cm、深さ約14cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。緩やかに外反する口縁部が出土する。ハケ調整が施されるものもある。平底を呈する底部が出土する。

SK24

IV区西部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より東へ9°傾く。長径約84cm、短径



第88図 IV区SK18・SK19平面図・出土遺物実測図



第89図 IV区SK20・SK21・SK22・SK23・SK24平面図・出土遺物実測図

約76cm、深さ約26cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK25

IV区西部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ22°傾く。長径約128cm、短径約76cm、深さ約9cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

(373)は壺である。(374)は甕である。ともにハケ調整が施される。

SK26

IV区西部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ55°傾く。長径約119cm、短径約59cm、深さ約29cmを測る。埋土は不明である。貼付口縁を有する土器が出土する。

SK27

IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置する。平面形は円形である。径約80cm、深さ約9cmを測る。埋土は灰褐色粘土に黄褐色粘土が混じる。

SK28

IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ85°傾く。長径約84cm、短径約78cm、深さ約29cmを測る。埋土は灰褐色粘土に黄褐色粘土が混じる。平底を呈する底部が出土する。(375)は砥石である。

SK29

IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ75°傾く。長径約120cm、短径約110cm、深さ約30cmを測る。埋土は灰褐色粘土に黄褐色粘土が混じる。

SK30

IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ42°傾く。長径約100cm、短径約91cm、深さ約31cmを測る。埋土は灰褐色粘土に黄褐色粘土が混じる。

SK31

IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ82°傾く。長径約88cm、短径約76cm、深さ約14cmを測る。埋土は灰褐色粘土に黄褐色粘土が混じる。

SK32

IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ86°傾く。長径約96cm、短径約76cm、深さ約20cmを測る。埋土は灰褐色粘土に黄褐色粘土が混じる。

SK33

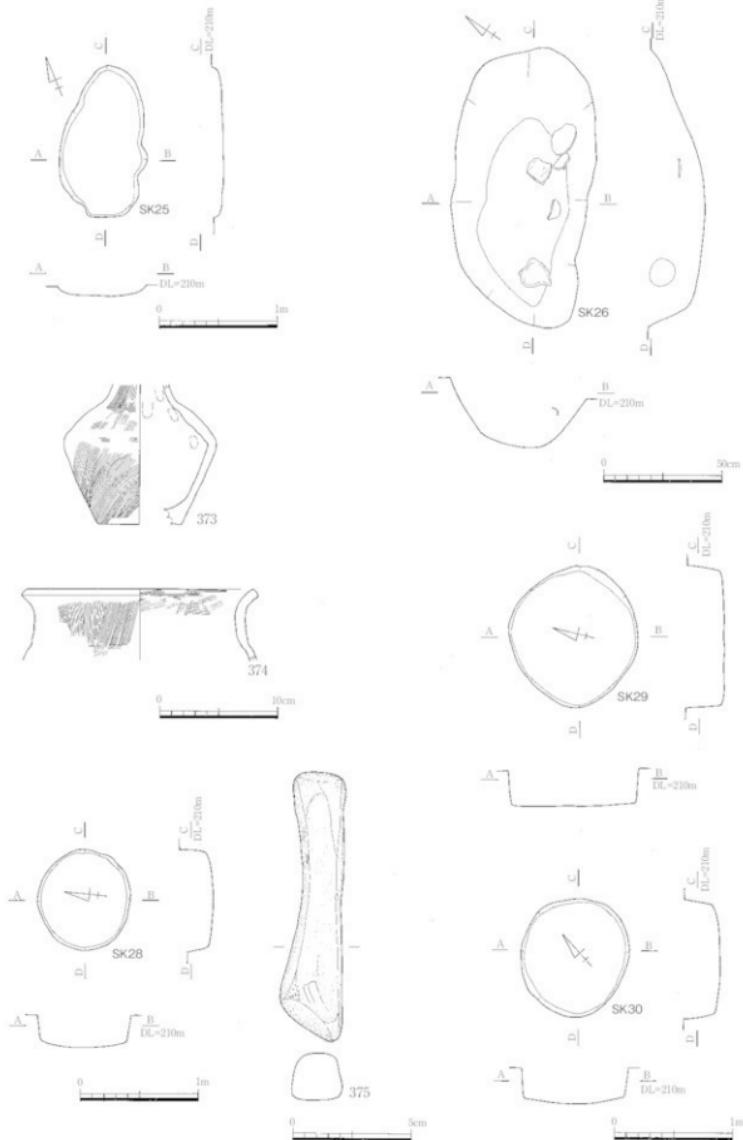
IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ66°傾く。長径約106cm、短径約82cm、深さ約10cmを測る。埋土は灰褐色粘土に黄褐色粘土が混じる。

SK34

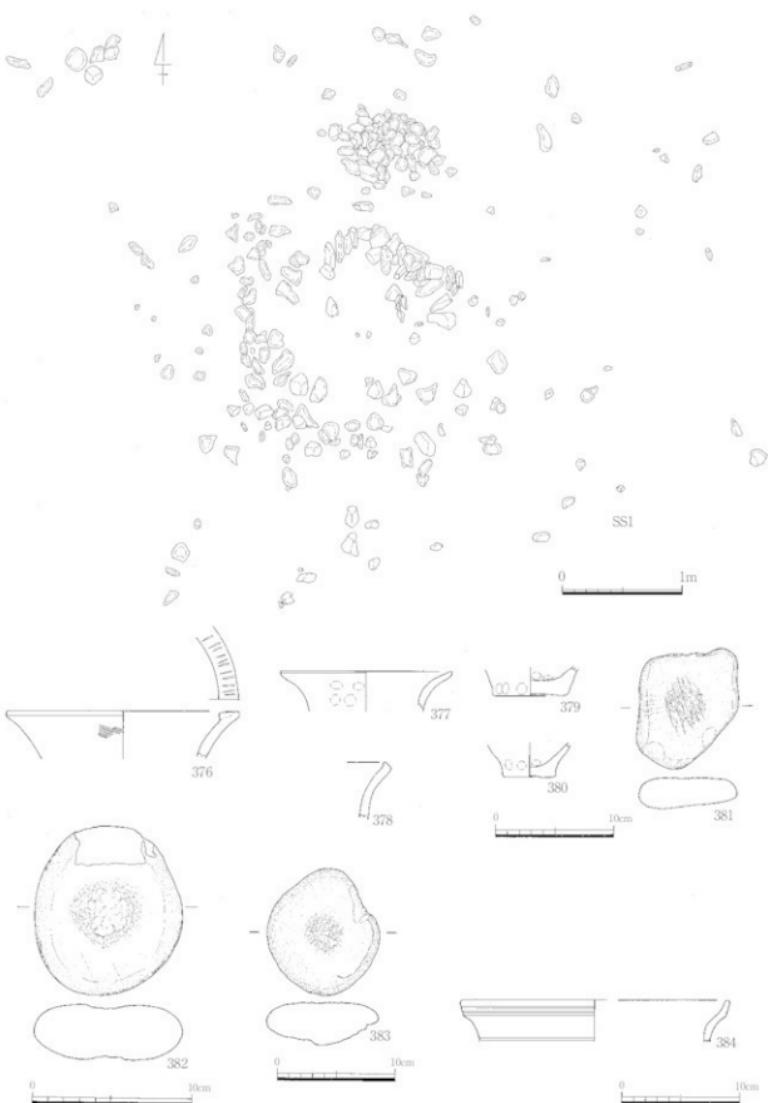
IV区中央部から南側に張り出した調査区に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ70°傾く。長径約138cm、短径約132cm、深さ約18cmを測る。埋土は灰褐色粘土に黄褐色粘土が混じる。

SS1

IV区中央部に位置する。砂岩が大部分で約1/5が意図的に割られている。被熱を受けた石みられる。(376~378)は口縁部である。(376)は貼付口縁を有する。口縁部には緩やかに外反するものもみ



第90図 IV区SK25・SK26・SK28・SK29・SK30平面図・出土物実測図



第91図 IV区SS1平面図・出土遺物実測図・包含層出土遺物実測図

られる。(379・380)は底部である。平底のものが多い。(381~383)は凹石である。表裏または表面に1箇所ずつ敲打痕が集注する。砥石も出土した。

P1

IV区東部に位置する。平面形は円形である。径約25cm、深さ約20cmを測る。埋土は黄褐色粘土に褐色粘土が混じる。

P2

IV区東部に位置する。平面形は円形である。径約24cm、深さ約10cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

P3

IV区東部に位置する。平面形は円形である。径約34cm、深さ約42cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。ハケが施された貼付口縁が出土した。

P4

IV区東部に位置する。平面形は円形である。規模は不明である。埋土は灰褐色粘土である。

P5

IV区東部に位置する。平面形は梢円形である。規模は不明である。埋土は灰褐色粘土である。

P6

IV区東部に位置する。平面形は円形である。径約44cm、深さ約70cmを測る。埋土は不明である。叩き目が残る胴部が出土した。

P7

IV区東部に位置する。平面形は円形である。径約20cm、深さ約14cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

P8

IV区中央部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約38cm、短径約30cm、深さ約54cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

P9

IV区西部に位置する。平面形は梢円形で、主軸方向は真北より東へ60°傾く。長径約40cm、短径約20cm、深さ約75cmを測る。埋土は不明である。

包含層出土遺物

(384)は縄文土器の口縁部である。伊吹町式のものと思われる。

第7節 V区の確認調査

1. 調査の方法

V区もTPによる調査で遺物・遺構が確認されたため、遺跡の広がり等を把握するために、事業実施区域を東西に横断する形で細長いTRを設定して確認調査を実施し、遺構検出をした。検出された遺構については工事の影響を受けると判断されたため、本発掘調査を実施した。

2. 調査の成果

調査の成果について、以下遺構ごとに記す。IV区に比べて土坑の数は多いが、遺物が出土する遺構は少ない。

SB1

V区東部に位置する。規模は2間×2間で梁間約1.04～1.12m、桁行1.80～1.88mである。柱穴は円形で径約8～24cm、深さ約4～14cmを測る。棟方向は真北より東へ84°傾く。

SD1

V区中央部から西部、そして調査区外に延びる。底部(385)が出土しており、ハケ調整が施されている。

SD2

V区西部に位置する。

SK1

V区北東端に位置し、一部は調査区外に所在するため、全体の平面形は不明である。主軸方向はほぼ真北である。短径約40cm、深さ約18cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

SK2

V区東端に位置する。SK3を切る。平面形は円形である。径約86cm、深さ約22cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

SK3

V区東端に位置する。SK2に切られる。平面形は円形である。径約58cm、深さ約5cmを測る。埋土は上層が灰褐色粘土で、下層が黄灰褐色粘土である。

SK4

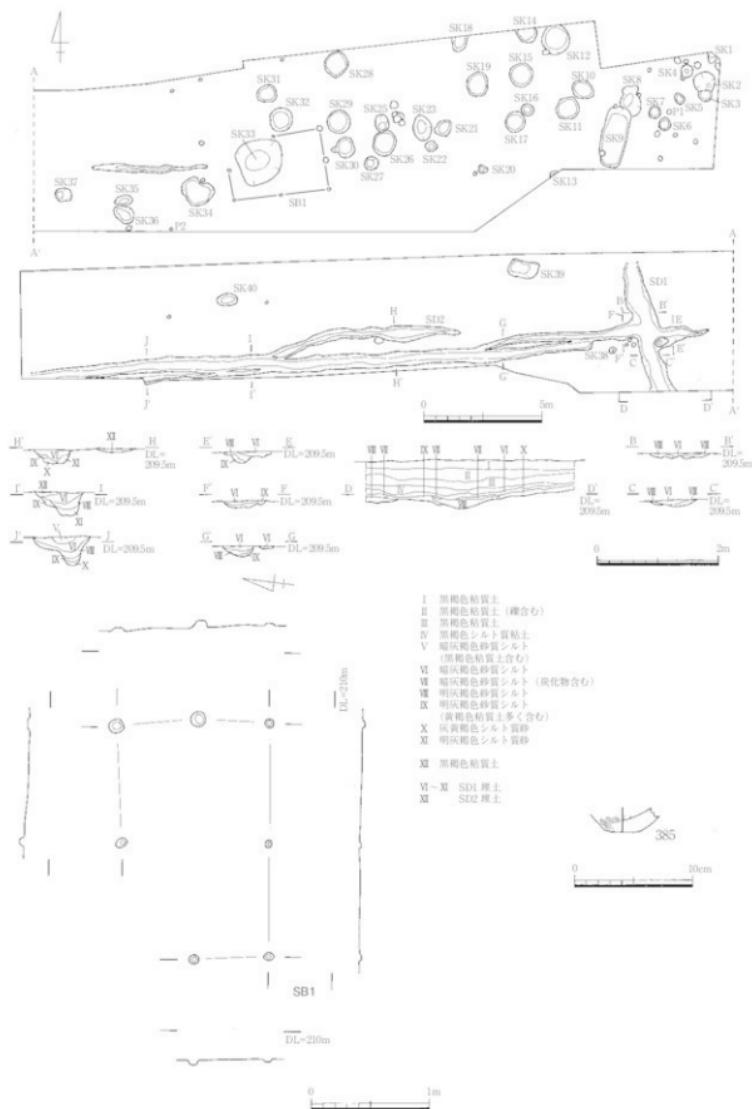
V区東部に位置する。平面形は円形である。径約58cm、深さ約36cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

SK5

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約48cm、深さ約20cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

SK6

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約56cm、深さ約13cmを測る。埋土は灰色粘土である。



第92図 V区平面図・SD1・SD2セクション図・出土遺物実測図・SB1平面図

SK7

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約52cm、深さ約10cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

SK8

V区東部に位置する。SK9に切られる。接する2個のピットとの切り合い関係は不明である。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ35°傾く。長径約102cm、短径約83cm、深さ約22cmを測る。埋土は上層が暗灰褐色粘土で、下層が黄灰色粘土である。甕(386・388・389)と鉢(387)が出土しており、ハケ調整が施されている。(388)は叩き目が残る。

SK9

V区東部に位置する。SK8を切る。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ13°傾く。長径約256cm、短径約112cm、深さ約30cmを測る。埋土は灰色粘土である。

SK10

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ78°傾く。長径約96cm、短径約70cm、深さ約19cmを測る。埋土は黄褐色粘土である。

SK11

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約92cm、深さ約19cmを測る。埋土は上層が暗灰褐色粘土で、下層は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK12

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約129cm、短径約120cm、深さ約39cmを測る。埋土は上層が暗灰褐色粘土で、下層は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK13

V区東部の南壁際に位置し、一部は調査区外に所在するため、全体の平面形は不明である。短径約34cm、深さ約7cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK14

V区東部の北壁際に位置し、一部は調査区外に所在するため、全体の平面形は不明である。短径約86cm、深さ約24cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK15

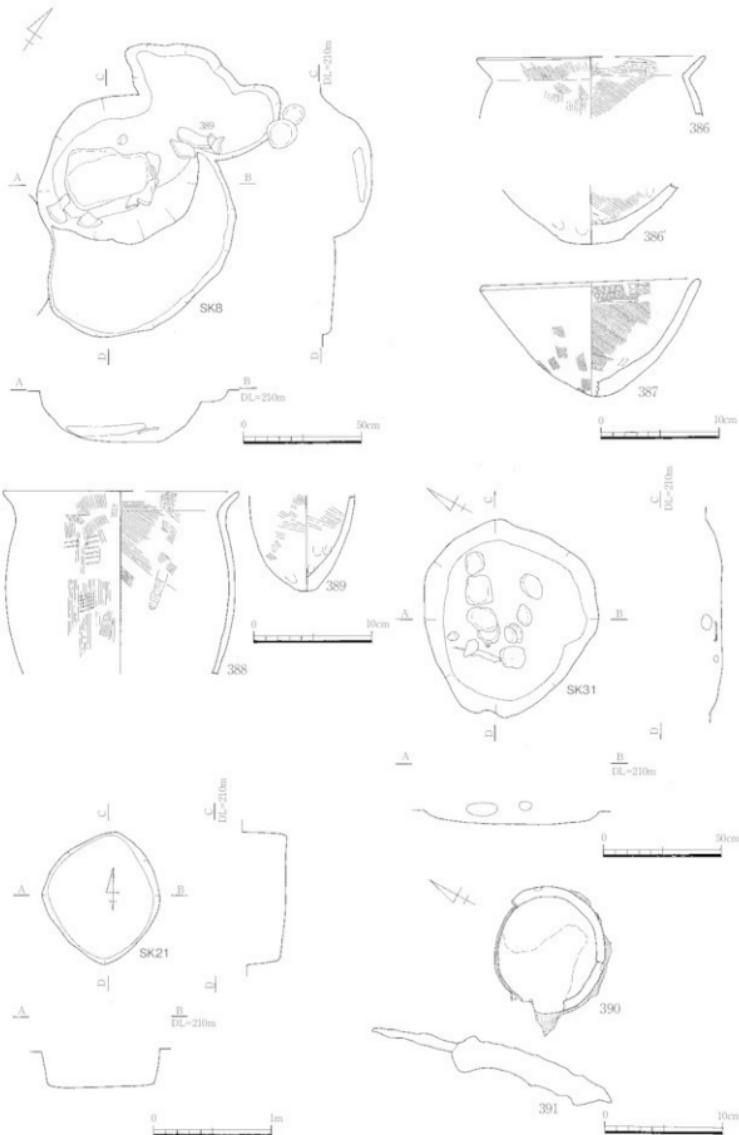
V区東部に位置する。平面形は円形である。径約92cm、深さ約19cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK16

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約54cm、深さ約6cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

SK17

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約82cm、深さ約21cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。



第93図 V区SK8・SK21・SK31平面図・出土遺物実測図

SK18

V区東部の北壁際に位置し、一部は調査区外に所在するため、全体の平面形は不明である。短径約63cm、深さ約18cmを測る。埋土は灰黄色粘土である。

SK19

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ14°傾く。長径約102cm、短径約88cm、深さ約23cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK20

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ65°傾く。長径約40cm、短径約30cm、深さ約16cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK21

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ33°傾く。長径約78cm、短径約63cm、深さ約12cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK22

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ77°傾く。長径約54cm、短径約48cm、深さ約16cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK23

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ5°傾く。長径約112cm、短径約80cm、深さ約17cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる暗灰褐色粘土である。

SK24

欠番である。

SK25

V区東部に位置する。SK26に切られる。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ9°傾く。長径約74cm、短径約56cm、深さ約14cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK26

V区東部に位置する。SK25を切る。平面形は円形である。径約102cm、深さ約28cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK27

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約60cm、深さ約9cmを測る。埋土は不明である。

SK28

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向はほぼ真北である。長径約112cm、短径約100cm、深さ約34cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK29

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約100cm、深さ約31cmを測る。埋土は黄褐色粘土が混じる灰褐色粘土である。

SK30

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ6°傾く。長径約89cm、短径

約70cm、深さ約15cmを測る。埋土は不明である。

SK31

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ60°傾く。長径約82cm、短径約74cm、深さ約7cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

絆筒の蓋と思われるもの(390)と鉄器(391)が出土した。祭祀を行った可能性が考えられる。

SK32

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約94cm、深さ約30cmを測る。埋土は不明である。

SK33

V区東部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ30°傾く。長径約214cm、短径約192cm、深さ約22cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK34

V区中央部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ84°傾く。長径約142cm、短径約116cm、深さ約4cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK35

V区中央部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より東へ85°傾く。長径約78cm、短径約44cm、深さ約12cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK36

V区中央部に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向は真北より西へ64°傾く。長径約92cm、短径約66cm、深さ約11cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK37

V区中央部に位置する。平面形は隅丸方形で、主軸方向は真北より西へ89°傾く。長径約67cm、短径約54cm、深さ約18cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

SK38

V区中央部に位置する。平面形は円形である。径約27cm、深さ約10cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

SK39

V区中央部に位置する。平面形は隅丸方形で、主軸方向は真北より東へ79°傾く。長径約136cm、短径約74cm、深さ約23cmを測る。埋土は上層が暗灰褐色粘土で、下層は黄灰褐色粘土である。遺構の中央で被熱を受けた砂岩と炭化物が出土した。

SK40

V区西部に位置する。位置し、一部は調査区外に所在するため、全体の平面形は不明である。深さ約24cmを測る。埋土は不明である。

P1

V区東部に位置する。平面形は円形である。径約20cm、深さ約45cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

P2

V区中央部に位置する。平面形は円形である。径約14cm、深さ約33cmを測る。埋土は灰褐色粘土である。

第Ⅲ章 まとめ

第1節 繩文時代早～前期の土器について

根々崎五反地遺跡で出土した当該期の土器は下記のとおりである。

○押型文土器(191～193)

TP55拡張区から振幅が大きい山形文(191)、2条の刻目突帯の間に2条の細長い隆帯を付けさらにその上に刻目を施した口縁部(192)、横位の押引文に山形文を模した沈線文を組み合わせた土器(193)が出土した。

○厚手無文土器(190)

TP50第VI層から出土した。織維痕がみられる。縄文時代早期のものと思われる。

○条痕文土器

TP14第VI層から出土した。口縁部の端部である。表裏条痕がみられる。端部近くで外反する。この土器片については小片であるため図示することができなかった。特徴から縄文時代早期末～前期のものと思われる。

本節では、TP55拡張区から出土した押型文土器について記す。

四国の押型文土器の出土状況は、土器編年を構成する上ではあまり恵まれたものではないが、近畿や中国地方の出土例や編年を参考に、様相の変遷を捉えようとする試みがなされている。(2003兵頭歟)では、大雜把な表現をするとネガティヴ文→楕円文・山形文→大型楕円文→大型山形文と押型文土器の様相が変遷すると紹介され、(2003松村信博他)ではネガティヴ文の次に山形文に縦位の施文がなされるものが後続するという案も唱えられている。しかし、変遷案の大きな枠組みは同じであり、押型文土器の中で終末期に大型山形文が現れるという点は共通している。今回の調査でTP55拡張区から出土した土器はこれに該当する土器を含む。

振幅が大きい山形文については、(1956坪井清足)で石山貝塚(滋賀県)出土土器について記された時に、穂谷遺跡(大阪府)を標識遺跡として型式設定した、穂谷式の名称で呼ぶことが多い。石山貝塚の資料では口縁部端部の下に、振幅の大きい山形文が横位に施され、その下に刻目を有する突帯を付け、さらにその下には線刺突文で複合鋸歯文状の文様を施している。文様の特徴から(191～193)は穂谷式併行の土器であると考えて大過ないと思われる。

県内で初めて穂谷式併行と思われる土器が出土したのは城ノ台洞穴遺跡である。(1968岡本健児)では同型式の土器が出土する遺跡として長瀬上野遺跡・中野村遺跡(岐阜県)とともに石山貝塚を挙げており、城ノ台洞穴遺跡出土の土器は当時より穂谷式併行の土器と認識されていたようである。しかし、県内では、同様の土器は城ノ台式と呼ばれるようになる。城ノ台式と呼ばれる県内の土器は下記のとおりである。

奥谷南遺跡(南国市)：振幅の大きい山形文を持つ,刻目突帯を胴部に持つ
城ノ台洞穴遺跡(佐川町)：振幅の大きい山形文を持つ,刻目突帯を胴部に持つ
松原(影地)遺跡(鷺原町)：振幅の大きい山形文を持つ
八足遺跡(大正町)(1)：振幅の大きい山形文を持つ
大宮・宮崎遺跡(西土佐村)：振幅の大きい山形文を持つ

このように特徴のある山形文と刻目突帯で判断している。これらの特徴に加えて沈線文や押引文が加わる例は他に本県ではみられず、根々崎五反地遺跡出土土器の特徴となっている。県外で穂谷式土器が出土した例は、前述した遺跡の他に長瀬上野遺跡(岐阜県)・栗津湖底遺跡(滋賀県)・布留遺跡(奈良県)・有熊遺跡(京都府)・上福万遺跡(鳥取県)(2)・帝釈峠遺跡群豊松堂面洞窟遺跡(広島県)等(3)が挙げられるが、やはり振幅の大きい山形文や刻目突帯を有するものが多いが、押引による沈線が施されたのは上福万遺跡の例ぐらいである。今回の調査では、包含層からの出土であるが、振幅の大きい山形文の施されたものと、沈線文や押引文の加わるもののが同一層から出土している。厚手無文土器についても、異なるTPからではあるが、同一層から出土した可能性が高い。また、(192)にみられるような隆帯に刻目を施す手法は轟B式にみられるが、こういった手法が押型文終末期からそのまま前期の型式に受け継がれていたものかどうかは不明である。

註 1 地下考古学者小野川和昭氏が表採したもの。筆者が実見した。

2 報告書では手向山式と類似すると述べている。

3 この他に九合洞穴遺跡・小の原遺跡・中野村遺跡(岐阜県)・北野ウチカタビロ遺跡(奈良県)・大法3号墳(鳥取県)等があるが、今回は実測図等を確認することはできなかった。

第2節 繩文時代後期の土器について

I区からは縩文時代後期の土器が約2700点出土している。宿毛式と思われるものや、松ノ木式と思われるものなどが出土しているが、位置付けを確かなものにするため、同時期の土器と比較する。

根々崎五反地遺跡からは遺物包含層から縩文時代後期の土器が出土している。形態分類して前述したが、特に第K1類・第K2類・第K6類のものが相当すると思われるが、2本沈線で区画された部分に短沈線や刺突文を施した、宿毛式特有の文様を有するものも含まれる。しかし、一方第K9類のように後続する松ノ木式の典型的なものに相当するものも出土した。宿毛式の範疇には松ノ木式に繋がる形態を有するものも含まれるが、単独で出土すれば松ノ木式としか判断できないものも出土している。根々崎五反地遺跡の場合、遺物包含層からの出土であるため、複数期の遺物が混入される可能性は強いが、同じ土層の平面的にも纏った部分から出土しているため、ある程度の一括性を持つ可能性がある。ここでは、県内における同時期の遺物の出土状況を参考にして根々崎五反地遺跡の遺物の位置付けを考えたい。

(1) 松ノ木遺跡(本山町：吉野川流域)

松ノ木遺跡は5次にわたる調査が実施され、第3次調査では宿毛式の時期の堅穴住居跡も検出され

ている。第K6類等が出土する。多くの土器が出土したのは土器捨て場である。同遺跡は松ノ木式の標式遺跡であるが、中津式・宿毛式・福田K2式・松ノ木式そしてそれに後続する土器が出土するが、宿毛式・松ノ木式が中心である。根々崎五反地遺跡出土土器をもとに形態分類したほとんどすべての類の土器が出土するが、やはり松ノ木式が多く、第K8～K10類がよくみられる。

(2) 松原遺跡(構原町：四万十川流域)

旧庄司ヶ市遺跡を含む。発掘調査は実施されておらず、遺物は表採によるものである。中津式・宿毛式のものがあるが、宿毛式が中心である。第K1～K4・K6類に相当するものが出土する。松ノ木式の浅鉢にみられる第K8類や第K10類もみられる。

(3) 神ノ西遺跡(窪川町：四万十川流域)

本報告書に出土遺物は掲載している。包含層からの出土である。出土遺物が少量なので全体像はつかみ難いが、第K2類や第K6類等宿毛式に相当するものがほとんどである。

(4) 川口遺跡(窪川町：四万十川流域)

本報告書に出土遺物は掲載している。複数地点で表採されたものを含むせいか中津式・宿毛式・松ノ木式・伊吹町式と複数期のものが出土地。第K1・K2・K6類等宿毛式にみられるものも出土するが、第K5・K8・K9類等松ノ木式にみられるものが多い点が特徴的である。

(5) 田野々西遺跡(大正町：四万十川流域)

(1995木村剛朗)では田野々大正橋元遺跡として紹介されている。紹介されている資料では、第K2～K6・K9・K10類が工事中に表採されている。

(6) 三里遺跡(中村市：四万十川流域)

三里式の標式遺跡である。発掘調査において第K1～K3・K5・K6・K10類が出土しているが、第K4類が多い。口縁部に文様が集約される土器が特徴的である。

(7) 片柏遺跡(土佐清水市：沿岸部)

片柏式の標式遺跡である。船元式・中津式・宿毛式・平城式・片柏式・伊吹町式の土器が出土する。この遺跡からは土坑墓が4基出土するが、中津式土器が出土する。宿毛式土器は、中津式～伊吹町式土器と同じ包含層中から出土するが、量的には少ない。多様な型式が出土するため、第K2・K3・K5・K6・K8～K10類がみられる。

(8) 宿毛貝塚(宿毛市：沿岸部)

宿毛式の標式遺跡である。宿毛式・平城式が出土する。第K1・K2・K4・K6類のような宿毛式によくみられるものの他に第K5・K8類のように松ノ木式によくみられるものも含まれる。

上記のように当該期の資料はほとんどが包含層からの出土で、複数期の型式とされるものが出土する。時間的に複数期の土器が同じ包含層から出土するのか、同時期に多様な型式と思われる土器が出土するのか判断しがたいため、ここでは、遺跡ごとの全体的な傾向について記す。

従来の研究では、宿毛式以降頭部の無文化が進み、縁帶文系の土器が成立していくという編年観が支持されており、口縁部については外面施文から内面施文に移行するものもあることなどが述べられている。上記で挙げた宿毛式前後の型式の土器が出土した遺跡については、次のように位置付けられると思われる。

宿毛貝塚・松原遺跡・神ノ西遺跡については第K9・K10類がほとんどみられないため、上記の遺跡の中でも比較的古相の遺跡であると思われる。根々崎五反地遺跡・川口遺跡は第K9類の出土がみられるためそれよりは新相であると思われる。松ノ木遺跡・田野々西遺跡・片船遺跡・三里遺跡は第K9・K10類が多いため前述した遺跡よりさらに新相であると思われる。以上のことから、根々崎五反地遺跡TP49出土の縄文土器は宿毛式から松ノ木式への過渡期のものであると思われる。

第3節 弥生時代～古墳時代の土器について

根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡・辻ノ川遺跡・西原遺跡で当該期の土器が出土した。根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡の資料には土坑から一括して出土したものが多く、窪川町の弥生時代中期～古墳時代前葉の各時期における土器の様相を知る上で大変貴重である。しかし遺構の切り合いが非常に少ないとおり、層位的に出土遺物の時期的な前後関係を明らかにすることはできなかつた。そのため、今回の調査で出土した当該期の土器については、頸部が長く底部が厚いことなど、特徴を共有している幡多地方(高知県西部の中村市を中心とした地域)の土器編年を参考に、様相の変遷を捉えたい。

幡多地方の土器編年については、古くは、神ノ西遺跡で出土した貼付口縁等を特徴とする土器が神ノ西式土器として型式設定され、龍河洞式との関係からIV様式のものとされてきた。北高田遺跡の調査報告では貼付口縁を有し、櫛描文・浮文・列点文で加飾された土器が後期前葉まで残るが、微隆起突帯はみられなくなる様相が紹介された。具同中山遺跡群IVの調査報告では豊富な弥生時代後期～古墳時代初頭の土器の出土層位と高知県中央部の編年等を基に編年の位置付けが試みられている。(2001久家隆芳)では 叩き目が残る土器の出現を一つの画期として、それ以降を庄内式併行と考え、変遷案を提示している。(2002久家隆芳)では弥生時代中～後期の土器様相の変遷について記している。

以上のように検討されてきた編年観が、窪川の土器様相の変化にも共通していることが多いと仮定し、以下のように、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭と思われる土器の形態の変遷を想定した。

IV期

カマガ淵遺跡II区SX1・辻ノ川遺跡TP4拡張区SX1の資料が相当する。円形浮文・微隆起突帯が集中配置されるものや、櫛描文と微隆起突帯が多用されるものがある。SX1で出土する(298)等は形態等から微隆起突帯を有するものとの共伴関係を疑問視する考え方もあるが、出土状況からは共伴関係を積極的に否定する材料はない。辻ノ川遺跡SX1の資料についてはIII期の可能性もある。

V1期

根々崎五反地遺跡I区SK1の資料が相当する。貼付口縁を有し、浮文・刻目によって加飾されている。櫛描文は残るが、微隆起突帯はみられない。(84)の甕は貼付口縁を有する点はV2期のものと共通するが、櫛描文等により加飾されている点等が異なる。

V2期

カマガ淵遺跡IV区SK1・SK4・SK10・SK17・SK18の資料が相当する。貼付口縁を有し、外面に密にハケ調整が施される。緩やかに外反する口縁部を有するものもみられる。

V3期

カマガ淵遺跡V区SK8・西原遺跡SF2の資料が相当する。カマガ淵遺跡V区SK8については出土量が少ないが、あげておく。貼付口縁は認められない。外面に密にハケ調整が施される。「く」の字に外反する口縁部を有するものが多い。

V1期

カマガ淵遺跡II区SK1・SK4・SK5・SK6の資料が相当する。外面胴部に叩き目を残すが、内外面とも全体にハケ調整が強くみられる。

V12期

カマガ淵遺跡II区SK10の資料が相当する。口縁は「く」の字に外反する。胴部は膨らみ、丸底を呈する。外面は叩き目が顕著に残り、上胴部・下胴部にわずかにハケ調整がみられる。内面にもハケ調整がみられる。

上記のようにカマガ淵遺跡では調査区ごとに、出土する土器の時期に一定の偏りが見られる。遺跡全体を調査していないため不明確だが、遺跡内の居住域の移動があった可能性が考えられる。

なお、窪川町内で出土した他の遺跡から出土した遺物については、下記の内容について述べることができるといえよう。

作屋遺跡出土の(1)の土器については微隆起突帯が施されているものが多いことから、IV期またはそれ以前のものと思われる。

神ノ西遺跡出土の(9)の土器については上記のV2期の貼付口縁を有する壺と、ハケ調整が施される点等類似するところが多いが、刻目を施す点等が異なり、この時期に先行すると考えられ、V1期と同時期または以降に位置付けられる可能性がある。

口神ノ川スガサキ地区・川口遺跡・越ノ下遺跡で出土または表採が報告されている叩目の残る土器については、以前は弥生時代後期に位置付けられてきたが、VI期に相当すると思われる。

第4節 弥生時代～古墳時代の遺構について

カマガ淵遺跡で検出された当該期の遺構について記す。

IV区で検出されたSD1・SD2はほぼ東西に平行に構築されている。SD1からは10世紀末～11世紀の遺物も出土するが、1点のみで、弥生土器・古式土師器が多く出土するため、弥生後期～古墳時代初頭が該当する。叩き目の残る土器もみられるため、古墳時代初頭に限定するという考え方もあるが、個数が少ないため断定は避けたい。

SB1・SB2もこの溝に沿うように作られ、向きも溝と同方向である。遺物は出土しなかったが、溝と同時期のものと考えたほうが妥当であると思われる。島根県布田遺跡では調査区を幾筋もの溝が東西に走り、棟方向が同じ掘立柱建物が1棟検出されている。カマガ淵遺跡の全体像については不明であるが、同様な遺構配置が見られた可能性もある。

【参考文献】

- 秋澤 繁・市川豊八：1983「高岡郡」[高知県の地名]平凡社
- 伊藤 強：1999「バーガ森北斜面遺跡」伊野町教育委員会
- 伊藤 強：2001「バーガ森北斜面遺跡Ⅱ」伊野町教育委員会
- 伊庭 功：2000「縄文土器の分類」「栗津湖底遺跡予備調査・南調査区(栗津湖底遺跡Ⅳ)」滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 岩永省三：1980「弥生時代青銅器型式分類編年再考」「九州考古学55」九州考古学会
- 大江 命：1965「飛脚の考古学 I」福應寺文庫
- 太田三喜：2003「奈良県天理市布留遺跡の縄紋時代早期の調査」「利根川24・25」
- 岡本桂典・泉誠司・野本亮・曾我満子：2002「平成14年度企画展『歴史と美術』高知県歴史民俗資料館」
- 岡本健児：1959「土佐の原始と古代の文化」
- 岡本健児：1966「高知県の考古学」吉川弘文館
- 岡本健児：1968「高知県史考古編」高知県
- 岡本健児：1972「神西式土器文化の再検討」「高知女子大学紀要人文・社会科学編第20巻」高知女子大学
- 岡本健児：1972「四国」「神道考古学講座第二巻原始神道期一」「雄山閣」
- 岡本健児：1973「土佐神西遺跡調査概報(上代文化20)」「高知県史 考古資料編」高知県
- 岡本健児：1975「銅矛の埋納遺構」「歴史と地理243」山川出版社
- 岡本健児・廣田典夫・木村剛朗：1978「三里遺跡」中村市教育委員会
- 岡本健児：1983「高知県発見の銅矛について」「高知の研究1」清文社
- 岡本健児：1983「高知県発見の銅劍・銅戈・石劍について」「高知の研究1」清文社
- 岡本健児：1985「窪川町出土原出土の注口土器」「高知県文化財調査報告書第27集」高知県教育委員会
- 岡本健児：1987「土佐神道考古学」高知県神社庁
- 置田昭雅・矢野健一：1988「奈良県天理市布留遺跡縄文時代早期の調査 考古学研究中间報告14」埋蔵文化財天理教調査団
- 片岡 肇：1974「近畿地方における押型文土器変化について」「平安博物館研究紀要5」
- 甲藤次郎：1978「表層地質図」「西南開発地域土地分類基本調査窪川・一子瀬」高知県
- 門脇 隆：1998「県道拡幅(待避所)工事に伴う試掘調査概要報告書～高岡郡窪川町宮内～」高知県教育委員会
- 木村剛朗：1967「四国西南部における縄文期石器の編年に関する一試案」「西四国創刊号」西四国郷土研究会
- 木村剛朗：1968「愛媛県深泥縄文遺跡の紹介」「西四国第2号」西四国郷土研究会
- 木村剛朗：1969～1970「九州姫島黒曜石よりみた西四国縄文期の交易圏(上)(中)(下)」「土佐史談第124～126号」土佐史談会
- 木村剛朗：1983「土佐における後期縄文文化について」「高知の研究1地質・考古篇」清文堂
- 木村剛朗：1987「四万十川流域の縄文文化研究」幡多理文研
- 木村剛朗：1995「四国西南沿海部の先史文化」幡多理文研
- 木村剛朗：1999「大宮・宮崎遺跡I」西土佐村教育委員会
- 木村剛朗：2000「大宮・宮崎遺跡I 続編」西土佐村教育委員会
- 木村剛朗：2002「四国西南部の縄文後期—伊吹町式土器の研究」「犬飼徹夫先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学」犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 久家隆芳：1998「八田神母谷遺跡」高知県埋蔵文化財センター
- 久家隆芳：2000「北高田遺跡の弥生後期土器について」「北高田遺跡」高知県埋蔵文化センター
- 久家隆芳：2001「高知県幡多地域における古墳時代庄内式併用期の土器様相」「庄内式土器研究X X IV」庄内式土器研究会
- 久家隆芳：2002「南四国西半部の弥生土器—中期中期から後期前業を中心に—」「犬飼徹夫先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学」犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 窪川町教育委員会：1989「高野大工・口神の川一町切遺跡发掘調査実績報告書」
- 窪川町教育委員会：1990「若井川カキヤマ・峰ノ上下屋敷遺跡他試掘調査実績報告書」

- 窪川町教育委員会：1991「窪川町若井川西ノ前・口
神ノ川スガサキ遺跡調査実績報告書」
- 高知県教育委員会：1963「高知県遺跡地名表」「高知
県文化財調査報告書第13集」
- 高知県教育委員会：1984「高知県中世城館跡分布調
査報告書」
- 近藤喬一：1974「武器から祭器へ」「古代史発掘5」講
談社
- 坂本憲昭：1992「窪川北部郡營團場整備に係る試掘
調査概要」窪川町教育委員会
- 佐々木馬吉：1984「仁井田五人衆」土佐光原社
- 佐々木馬吉：1987「古代と窪川」朋景社
- 鈴木逸士：1998「四国はどのようにしてできたか」南
の風社
- 関根哲夫：1988「高山寺式土器の編年」「先史考古學
研究1」
- 武山光規・辻 重憲・田井 清・岩崎大海・沖野重
原：「窪川町史」窪川町1970
- 近森泰子：1993「峰の上遺跡」高知県文化財センター
坪井清足：1956「遺物」「石山貝塚」平安学園考古学ク
ラブ
- 出原恵三：1993「南四国中央部における縄文後期土
器」「遺跡第34号」「遺跡発行会」
- 出原恵三：1998「土佐の青銅器」「埋文こうち第11号」
高知県教育委員会
- 寺川 嗣：1994「窪川町川口遺跡埋藏文化財発掘調
査概要」窪川町教育委員会
- 寺川 嗣：1995「窪川町西部遺跡群(神ノ西・家地川)
遺跡発掘調査概要報告書」窪川町教育委員会
- 寺川 嗣：1996「窪川町西部遺跡群越の下遺跡発掘
調査概要報告書」窪川町教育委員会
- 寺川 嗣：1999「窪川町浜の川・六反地遺跡・小向
地区発掘調査概要報告書」窪川町教育委員会
- 寺川 嗣：1999「窪川町作屋遺跡発掘調査概要報告
書」高知県教育委員会
- 戸沢充測：1994「繩文時代研究事典」東京堂出版
- 鳥取県教育文化財団：1986「上福万遺跡II」
- 水井久美男：1998「近世貨幣の分類図版」「近世の出
土銭」兵庫県立考古学調査会
- 西 和彦：1978「地形分類図」「西南開発地域土地分
類基本調査 窪川・一子溝」高知県
- 日本の地質「四国地方」編集委員会：1991「日本の地
質8 四国地方」
- ニューサイエンス社：1968「窪川町で打製石斧を發
見」「考古学ジャーナル22」
- 畠中宏一：2001「平成12年度平串遺跡・平串・富岡
地区試掘確認調査概要報告書」窪川町教育委員
会
- 畠中宏一：2002「平成13年度カマガ淵遺跡・根ヶ崎
五反地遺跡試掘確認調査概要報告書」窪川町教
育委員会
- 畠中宏一：2003「平成14年度辻ノ川遺跡・天ノ川遺
跡・七里上小野川地区試掘確認調査概要報告書」
窪川町教育委員会
- 畠中宏一：2003「高知県における姫島産黒曜石の出
土状態」「Stone Sources No3」石器原産地研究会
- 浜田恵子：2001「具同中山遺跡群Ⅳ出土の弥生時代
から古墳時代初頭の土器」「具同中山遺跡群Ⅳ」
高知県埋蔵文化財センター
- 兵頭 熱：2003「四国島の押型文土器-現状と課題-」
「利根川24・25」利根川同人
- 広島大学文学部帝釈峠遺跡群発掘調査室：1982「帝
釈峠遺跡群発掘調査室年報V」
- 広島大学文学部帝釈峠遺跡群発掘調査室：1983「帝
釈峠遺跡群発掘調査室年報VI」
- 廣田佳久・近森泰子：1991「平成3年度窪川町南部遺
跡群試掘調査概要報告書」高知県埋蔵文化財セ
ンター
- 福田仁史：1991「立命館大学文学部学芸員課程研究
報告第3冊有熊遺跡第1・2次発掘調査概報」立命
館大学文学部
- 藤方正治・山本純代：1997「窪川町米奥試掘調査概
要報告書」高知県埋蔵文化財センター
- 文化財保護委員会：1966「全国遺跡地図(高知県)
史跡・名勝・天然記念物及び埋蔵文化財包蔵地
所在地地図」
- 文化庁：1976「全国遺跡地図 高知県」
- 埋蔵文化財研究会第20回研究集会世話人：1986「埋
蔵文化財研究会第20回研究集会 弥生時代の青
銅器とその共伴関係」
- 前田光雄：1991「尻貝遺跡」大月町教育委員会
- 前田光雄・吉成承三：1993「松ノ木遺跡III」本山町教
育委員会
- 前田光雄：1994「宿毛式、その特質」「研究紀要第1
号」高知県埋蔵文化財センター
- 前田光雄：2000「松ノ木遺跡V」本山町教育委員会
- 松村信博・畠中宏一：2003「南四国の押型文土器」「利
根川24・25」利根川同人
- 矢野健一：1988「出土遺物」「奈良県天理市布留遺跡
縄文時代早期の調査」埋蔵文化財天理教調査团

八幡賢一・萩雅人：1991「埋蔵文化財発掘調査報告

書道布田遺跡」鳥取県教育委員会

山崎真治：2003「縄文土器の編年的研究」「東京大

学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究

室 紀要第18号」東京大学大学院人文社会系研

究科・文学部考古学研究室

山崎真治：2003「高知県の縄文時代石器の実相」「第

14回中四国縄文研究会 中四国地域における縄

文時代石器の実相」中四国縄文研究会

山下英雄・寺川嗣：1992～1994「埋蔵文化財包蔵地

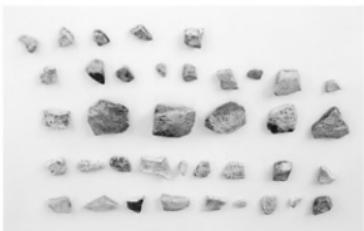
調査カード」高知県教育委員会

和田秀寿：1988「縄文早期高山寺式土器の成立過程

と細分編年」「古代学研究117号」

写真図版

写真 1



沖代地区TP8 出土土器



沖代地区TP23 挖立柱建物跡



口神ノ川一町切地区TP30 検出SB・SD



口神ノ川スガサキ地区平成元年度発掘TP8 出土土器



口神ノ川スガサキ地区平成2年度発掘TP1 完掘状況



峰ノ上下屋敷地区TP8 検出ピットの礎石



高野大工地区TP23 完掘状況



川口遺跡TP78SD検出

平成10年度までの発掘調査

写真 2



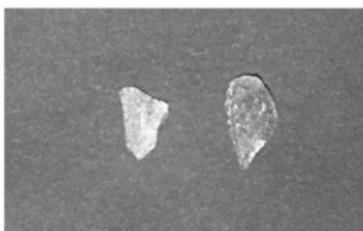
川口遺跡TP44 出土縄文土器



川口遺跡TP44 出土縄文土器



川口遺跡TP44 出土弥生土器



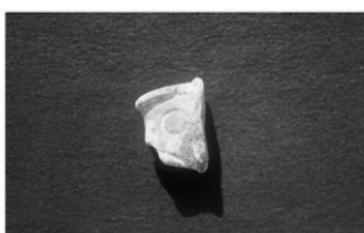
川口遺跡TP78 出土島産黒曜石剥片



神ノ西遺跡TP1 出土縄文土器



神ノ西遺跡TP1 出土縄文土器



神ノ西遺跡TP2 出土縄文土器



神ノ西遺跡TP2 出土縄文土器

川口遺跡・神ノ西遺跡出土遺物

写真 3



作業風景(富岡地区)



作業風景(下小野川地区)



作業風景(カマガネ遺跡)



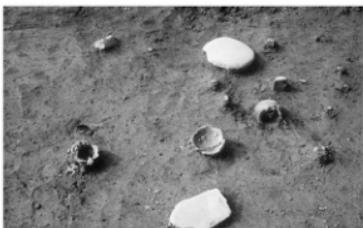
作業風景(西原遺跡)



辻ノ川遺跡TP4 拡張区SX1 完掘状況



天ノ川遺跡TP47 石核出土状況



西原遺跡TP13 拡張区SF1



西原遺跡TP13 拡張区SF2

平成12～15年度の発掘調査

写真 4



根々崎五反地遺跡 I 区 SK1 出土状況



カマガ淵遺跡 II 区 SK10 土器出土状況



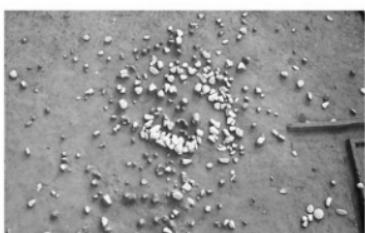
カマガ淵遺跡 III 区 ST 完掘状況



カマガ淵遺跡 IV 区 SB2・SD1・SD2 完掘状況



カマガ淵遺跡 IV 区 SK1 土器出土状況



カマガ淵遺跡 IV 区 SS1 検出状況



カマガ淵遺跡 V 区 SK31 出土状況



カマガ淵遺跡 V 区 SK31 金属器出土状況

根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡発掘調査

写真 5



写真 6

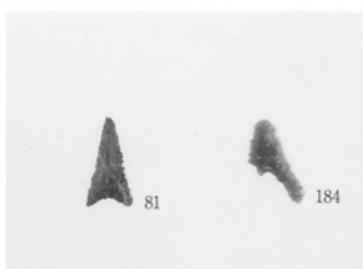
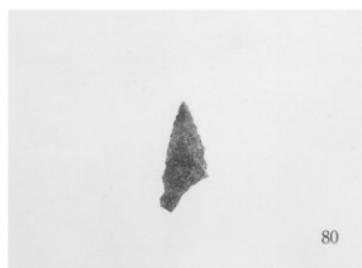
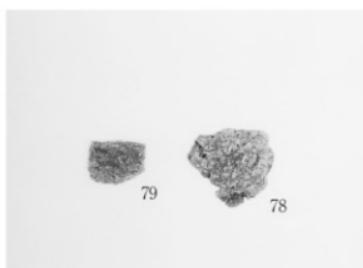
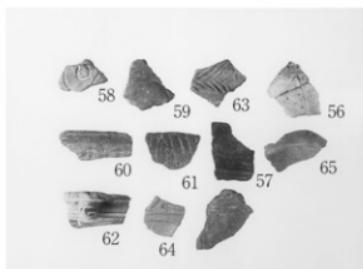


写真 7

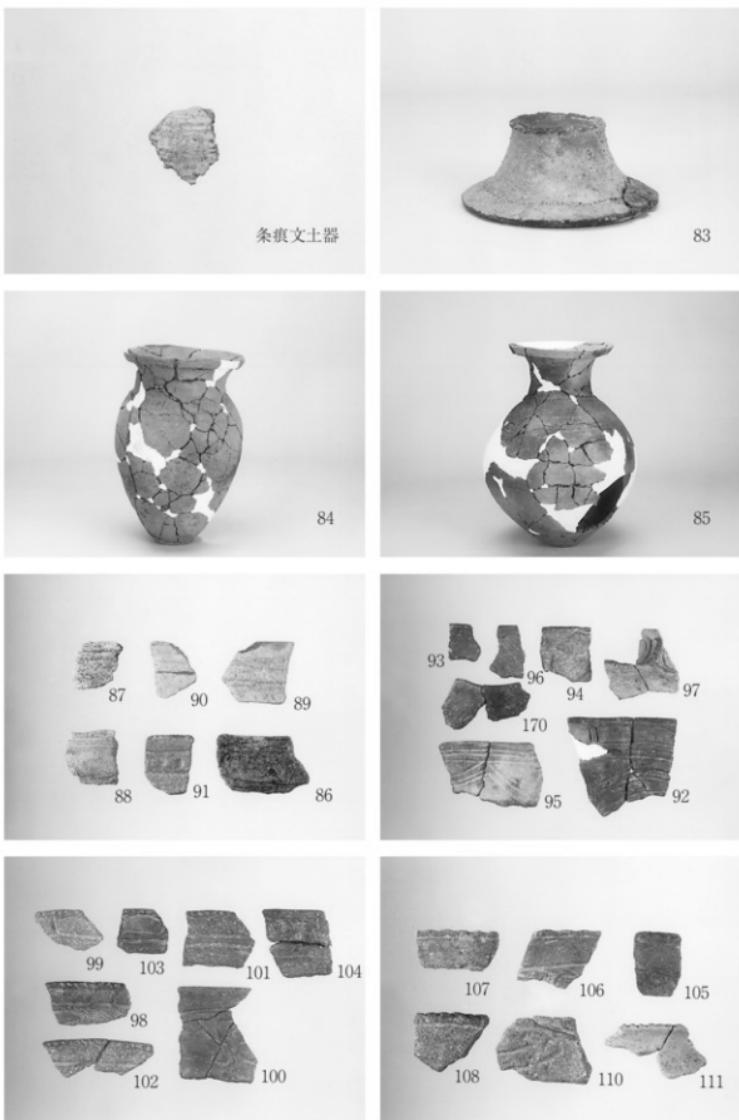


写真 8

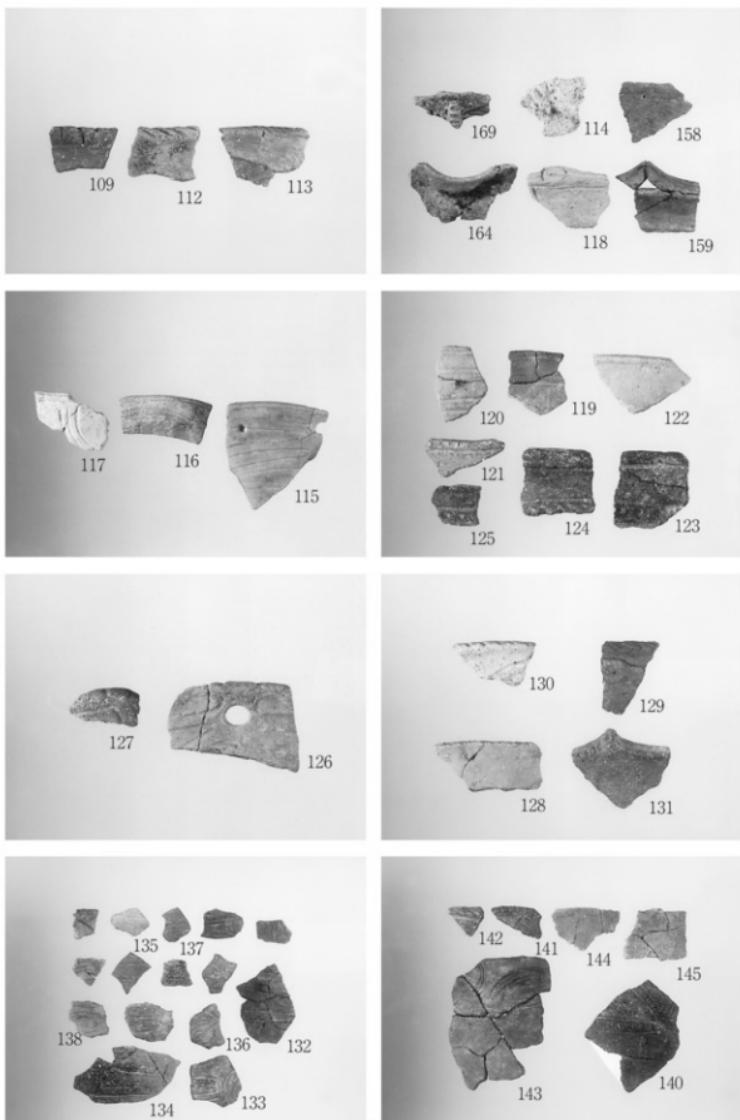


写真 9

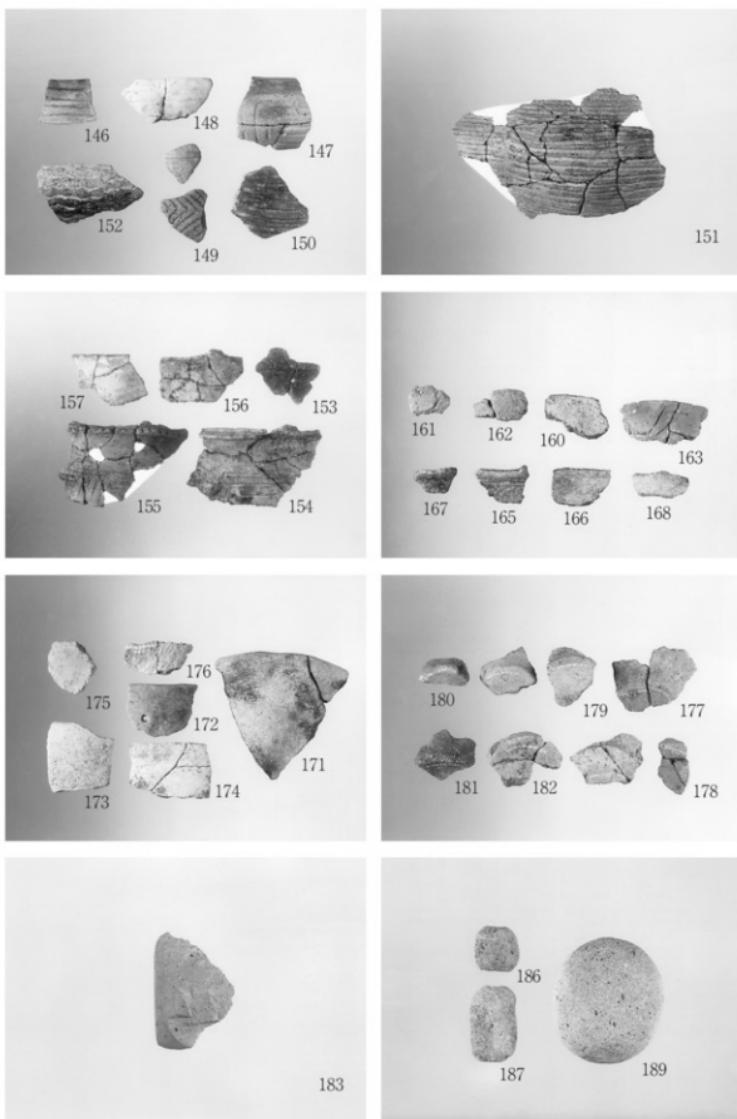
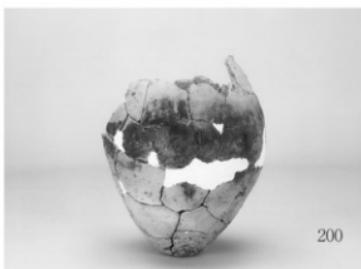


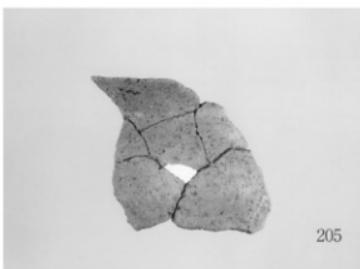
写真 10



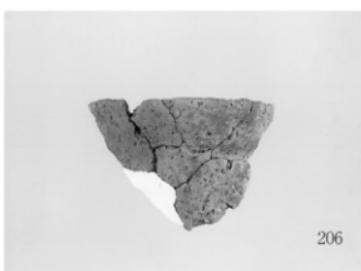
写真 11



200



205



206



207



208



209



210



211

写真 12

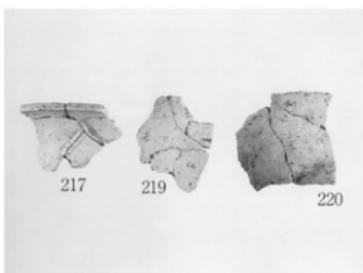
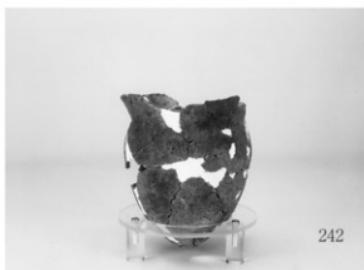


写真 13



写真 14



242



243



244



245



246



247



248



249

写真 15



250



251



252



254



255



256



257



258

写真 16

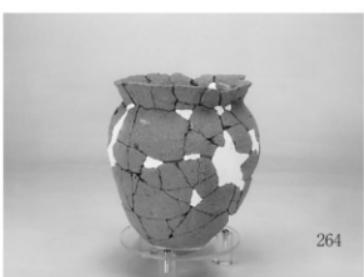


写真 17



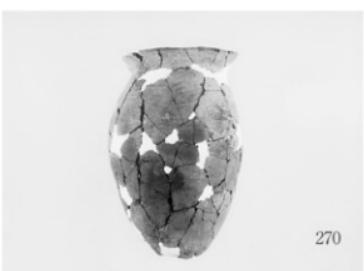
267



268



269



270



271



272



273



274

写真 18



写真 19



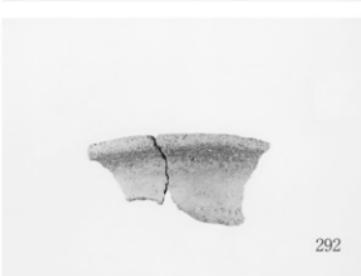
287



288



289



290



291



292



293



294

写真 20



295



297



298



299



300



301



302



303

写真 21

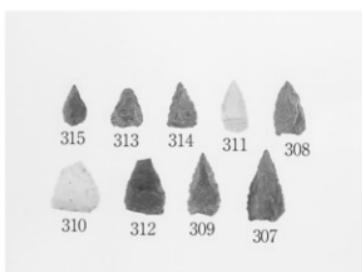


写真 22



325



326



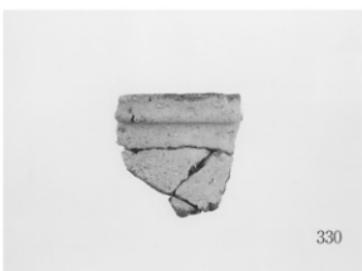
327



328



329



330



331

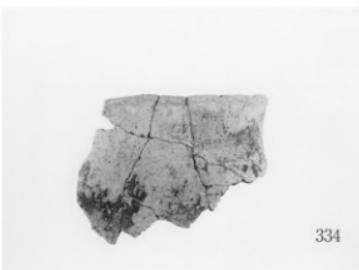


332

写真 23



333



334



335



336



337



338



337 側面

写真 24

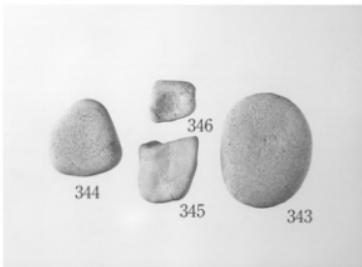


写真 25



写真 26



384



385



387



389



根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡全景

報告書抄録

ふりがな	ねぬきごたんらいせき・かまがぶらいせき・かわぐちいせき・こうのさいいせき・ぬたのかわいせき・そらのかわいせき・さいばらいせき						
書名	根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡・川口遺跡・神ノ西遺跡・辻ノ川遺跡・天ノ川遺跡・西原遺跡						
副書名	中山間地域総合整備事業等に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名	窪川町埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第1集						
編著者名	吉岡範満・畠中宏一						
編集機関	窪川町教育委員会						
所在地	〒786-0008 高知県高岡郡窪川町柳山3-7 TEL 0880-22-3576						
発行年月日	2004年3月26日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °	° ° °	㎡		
ねぬきごたんらいせき 根々崎五反地遺跡	こうひがんだかおぐくにほわくとうねぬきごたんらいせき 高知県高岡郡窪川町根々崎字五反地	33° 15° 25°	133° 12° 10°	2001.5.14~ 2001.6.16,	1,208	は場整備	
かまがぶらいせき カマガ淵遺跡		33° 13° 35°	133° 8° 15°	2001.10.9~ 2001.11.19			
かわぐちいせき 川口遺跡	こうひがんだかおぐくにほわくとうかわぐちいせき 高知県高岡郡窪川町川口	33° 11° 38°	133° 5° 2°	1993.10.4~ 1993.10.29	419	は場整備	
このひのいせき 神ノ西遺跡		33° 12° 30°	133° 7° 25°	1994.10.6~ 1994.11.11	110	は場整備	
ぬのかわいせき 辻ノ川遺跡	こうひがんだかおぐくにほわくとうぬのかわいせき 高知県高岡郡窪川町仁井田字有ノ木ノ本	33° 15° 0°	133° 10° 13°	2002.5.24~ 2002.5.30	82	は場整備	
そらのかわいせき 天ノ川遺跡		33° 11° 35°	133° 5° 28°	2002.5.30~ 2002.6.12	144	は場整備	
さいばらいせき 西原遺跡	こうひがんだかおぐくにほわくとうさいばらいせき 高知県高岡郡窪川町西原字永田山	33° 11° 48°	133° 7° 28°	2003.6.30~ 2003.7.11	250	は場整備	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
根々崎五反地遺跡	散布地	縄文	-	縄文土器・石器・石斧・剥片	押型文土器・無文厚手土器・宿毛式土器・松ノ木式土器		
	集落跡	弥生	土坑1基	弥生土器	伊吹町式土器。		
カマガ淵遺跡	散布地	縄文	-	縄文土器	窪川町初の堅穴住居跡。IV ~ V 様式並行の一括資料。		
	集落跡	弥生	堅穴住居軒・掘立柱 建物跡3棟・土坑86基、溝路4条、正体不明遺構1基、ピット	弥生土器・石器	窪川町初の堅穴住居跡。IV ~ V 様式並行の一括資料。		
	集落跡	古墳	-	土師器	一括資料。		
川口遺跡	散布地	古代	-	土師器	10世紀末~11世紀攝津型。		
	散布地	縄文	-	縄文土器・剥片	宿毛式土器・松ノ木式土器。		
	散布地	弥生	-	弥生土器	宿毛式土器・松ノ木式土器。		
神ノ西遺跡	散布地	中世	-	擂鉢	10世紀末~11世紀攝津型。		
	散布地	中世	-	土師器	宿毛式土器。		
	散布地	縄文	-	縄文土器	宿毛式土器。		
辻ノ川遺跡	散布地	弥生	正体不明遺構1基、ピット	弥生土器	III ~ IV 様式並行。		
	散布地	中世	土坑1基	青磁			
天ノ川遺跡	散布地	縄文	-	石核・剥片・縄文土器	珪質頁岩の石核。		
	散布地	縄文	-	縄文土器・石核			
西原遺跡	散布地	祭祀跡	-	弥生土器	祭祀遺構。		
	散布地	弥生	祭祀遺構、ピット	祭祀遺構	祭祀遺構。		
	散布地	古墳	祭祀遺構	土師器	祭祀遺構。		
	散布地	中世	ピット	青磁・白磁・青瓦・土師器・儀仗・漁具焼			
	散布地	近世	-	陶磁器			

窪川町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
**根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡
川口遺跡・神ノ西遺跡・辻ノ川遺跡・西原遺跡**

中山間地域総合整備事業等に伴う発掘調査報告書

2004年3月

発行 窪川町教育委員会
高知県高岡郡窪川町桜山3-7
電話 (0880) 22-3576
印刷 (有)西村謄写堂